317
103

0048750000

0048750-000

特２２２－８７８

低学年の唱歌教授

幾尾純・著

高踏社

昭和１１

AHI

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

特222
878

帝國圖書館藏

低學年の唱歌教授

奈良女子高等師範學校訓導 幾尾 純著

東京 高踏社發行

帝國圖書館藏

はしがき

吾等の待望せる理想の時代は遂に巡つて來た。あらゆる教育者は、我國に芽生し、育成し、結實すべき眞の日本教育に目醒むるに至つた。お、何と愉快なることではないか。我が教育界にとつて祝福すべきことである。

見よ。輓近我が教育實際界に於ては、一時踵をついで襲來せし教育新思潮は、今や全く停滯し、かくて教育實際家は、晨に一說を迎へ、夕に一說を送るといふイズムの送迎より救はれ、その思索は眞の日本主義の教育に嚮ふ、喜ぶべき雰圍氣を醸成した。

玆に於て初めて實際家は、自己本來の職務と責任に立歸りて、自らの歩むべき、正しき日本主義の教育道を凝視し、從來の輕佻浮薄なる新思潮を漁る所謂「初物喰ひ」の弊風より脫して、一意專心、日本主義教育の深究に邁進するに至つた。

此の傾向は教育の實際、殊に各科教授法の劃時代的の進歩を促し、未だ嘗て見ざる着實なる氣風を醸成し、教育實際界の黃金時代を現出したのである。

本書は此の喜ぶべき我が教育實際界の堅實なる進歩に、貢獻すべく企てられたるもので

あつて、教育の理論と實際に關して無益なる論議を省き、必要缺くべからざる重要問題を選びて懇切叮嚀に說述したものである。

願ふに教育のことたる、もとより經驗を必須なる條件とすべきは勿論であるが、その仕事の性質上、理論の指導を受けずして暗中模索的に進むことは出來ない。從つて教育者の日常苦心を拂ふ點は全くこの理論の體得にある。しかして更にこの理論を如何にして實際化すべきかは、すべての教育者の頭腦を絞る點である。本書はこの重大問題の解決に對して、讀者に十二分の滿足を與ふるものであることを信じて疑はないのである。

一言述べて本書の序に代ふる次第である。

著者識

低學年の唱歌教授

目次

一　唱歌教授の要諦……（一）
唱歌學習指導の仕方……（一）
音樂學習興味の起させ方……（二）
音樂感賞のさせ方……（二）
音樂教室の經營の仕方……（三）
發聲練習の仕方……（五）
發音練習の仕方……（六）
呼吸練習の仕方……（七）
階名練習の仕方……（八）
調號練習の仕方……（九）
ピアノ觀念の養ひ方……（一〇）
略譜の歌へ方……（一一）
本譜の歌へ方……（一二）
音階的音程練習の仕方……（一三）

聽音練習の仕方……（一四）
歌詞の取扱ひ方……（一四）
低學年唱歌教授の扱ひ方……（一七）
樂譜練習帳の扱ひ方……（一八）
樂譜能力テスト……（一九）
唱歌教授案の立て方……（二〇）

二　尋一唱歌指導の實際……（二二）

日の丸の旗……（二三）
てふてふ……（二六）
鳩……（二八）
ぽち……（三一）
ほたる……（三六）
かたつむり……（四〇）
すなばほりませう……（四二）
朝顔……（四八）
桃太郎……（五一）

使の弟……（五八）
兵隊さん……（六四）
菊の花……（六七）
木の葉……（七二）
にはとり……（七六）
雀……（七九）
としのくれ……（八四）
ねずみのもちひき……（八七）
雪遊……（九一）
ひかうき……（九五）
犬……（九九）
花咲爺……（一〇三）
いろびんあそび……（一〇八）

三　尋二唱歌指導の實際……（一〇九）

櫻……（一一三）
ちゝ……（一一六）
竹の子……（一一〇）

蛙と蜘蛛……（二四）
さ舟……（二七）
雨……（二三）
金魚……（二四）
蝉……（二八）
はやおき……（二一）
十五夜……（二五）
ぼよら……（二三）
へいたいどつこ……（二五）
がん……（二九）
だるま……（二六）
うちの子ねこ……（二二）
まりつき……（二六）
雪……（二九）
郵便……（二五）
きつよきり……（二五）
うぐひす……（二六）
汽車のたび……（二〇）

低學年の唱歌教授

一　唱歌教授の要諦

唱歌學習指導の仕方

唱歌教授は情緒的要素に立つところの教科である。從つてその指導を理知に偏し、功利的に偏し、無趣味索漠たるものに終らしめてはならない。その指導は、飽くまで兒童が歌はんとする、朗かに自由に嬉々として歌はんとする尊い欲求の上に立脚すべきである。この歌はんとする欲求が兒童に湧起しないとすれば、如何に巧妙な方法によつて完全な教授を施さんとしても、到底その効果を期することは出來ない。故に教師は、先づその學習態度の馴致に努めなければならない。教師は兒童と共に童心に歸つて共に歌ふことが肝要である。兒童と共に生活することが必要である。

また學習を興味的ならしめる點も忘れてはならない。兒童は唱歌を好むと雖も亦飽きつぽい性質のものであり、その體力も大人に較べて低劣であるから、その疲勞の度も早いものである。教師はこの點を考察して、兒童の學習興味を喚起することに努めなければならない。例へば音階練習、音程練習などは、兒童の嫌惡するものであるから、之を機械的に定形的に教授することをさけて、その方法を卑近に通俗的ならしめて兒童の興味に訴へることが肝要である。總括して、如何に學習に變化あらしめるかを考察することを忘れてはならない。兒童の學習は自由に明るく、而てその指導は卑近に通俗的なることを計らねばならない。

音樂學習興味の起させ方

兒童は本能的に歌はんとするものであり、歌ふことは彼等の生活それ自體であり、またその生長に資するものに外ならぬ。從つて兒童が唱歌の學習を好むことは當然の理と云はなければならない。然るにその本能を裏切つて、その學習に興味を喚起されないと云ふことは、もとより教師自身の指導法に缺陷が存するからである。兒童の歌はんとする純粹な旺盛な欲求を無視して、千遍一律的な定形的な注入教育、强要教育によるからである。また教師が兒童の童心と完全に調和せず、兒童に無理に歌はしめんと計るからである。或はまた兒童の能力程度を知らずして、徒らに發聲練習、音階練習、樂譜練習の如きを課することに要因するものと思ふ。從つて之等の基本練習は、十分兒童の能力程度を考察した後に課さなければ、兒童の學習興味を減削する因となるものである。教師はこの點に注意するところあらねばならない。

次には兒童の疲勞を考察して、適宜に鑑賞指導をなすことをも忘れてはならない。教師が樂器によつて彈奏し、或はレコードに依つて靜かに傾聽せしめるがよい。兒童を靜かに樂しく遊ばせるがよい。また鑑賞指導は每時之を行ふがよい。兒童の學年に應じて興味的な教材を鑑賞させる。兒童は唱歌の時には又樂しい曲が聽かれると思つて、唱歌時間を待ち遠しく思ふやうになるものである。かくて兒童の學習興味は湧起されるのである。

音樂鑑賞のさせ方

音樂鑑賞のその鑑賞と云ふ意味を、正課時間だけの取扱ひで既に鑑賞の目的は達せられると說く人もあるが、之は言ふまでもなく餘りに狹義な鑑賞の意味の採り方である。鑑賞教育と云ふ以上、もつと廣義な意味の鑑賞方法が考究されねばならない。然らば現今行はれつゝある鑑賞方法には如何なるものがあるか、その一は唱歌以外に種々の器樂曲を教師が演奏して鑑賞せしめる方法である。その二としては、蓄音機を聽かしめて鑑賞に資する方法である。先の教師の演奏による鑑賞の方法は、兒童の最も好むところであり、樂曲の主律、樂節、段落なども自由に分解し綜合して理解せしめることの出來る極めて効果多いものであるが、この方法は先づ教師自身に演奏の力能がなければ駄目である。教師がいゝ氣になつて曲の浮くやうな提琴を聽かせる程度であれば、一通りの曲目は愚か、名曲難曲に至つては歯も立たない。況して二重奏、三重奏、オーケストラの如き合奏曲に於ては、何うしても蓄音機による外はない。併し蓄音機の缺點とするところは演劇に對する映畫の如く完全なる情感の交流を促すことの不可能なる點である。分析、綜合して理解せしめることも出來ない。從つて鑑賞指導に當つては、この兩者を併用すべきであらうと思ふ。

鑑賞はなるべく全學年を通じて各時間に之を課するのが至當であらうと思ふ。この問題は一寸考へると甚だ不自然であり、無法のやうにも思へる。卽ち一週二時間程度の切りつめられた唱歌時間に於て、然も單に歌はしめるだけでも時間の不足を訴へらるゝ現狀に於て、鑑賞時間を割りこませると云ふことは甚だ不當のやうに思はれる。併し一時間機械的に歌ひ續けさせることは、高學年に於ても無理である。生理的にも衞生的にもよろしくない。況して低學年には不法であり、大體一二年の兒童には十五分乃至二十分、高學年には三十分乃至四十分位を適當とするものである。從つてその殘餘の時間を、靜かにこの鑑賞教育に補足さすべきであらうと思ふ。教師の說話も勿論肝要であるが、あまりおしやべりすることはよろしくない。併しその鑑賞教材の眞の意味の徹底するやう、簡單なる興味的な說話をなすことを忘れてはならない。鑑賞時に於ける兒童の態度は努めて自由にさせ、教師の威壓や强要を以てなしてはならない。と云つて餘りに放任にすぎ教室の騷亂を招來するが如き態度もよろしくない。鑑賞は靜肅に、而て音樂會の場合の禮儀が守れるやうに馴致すべきである。鑑賞教材は兒童の生活、その世界に適切なるものを選擇し、兒童が嬉々として、然も秩序ある享樂の中に鑑賞するやう訓練すべきであらう。

音樂教室の經營の仕方

唱歌教室は普通教室としても十分ではあるが、なるべく特別教室に依つた方が効果が多い。別に唱歌のための教室を設けやとも、講堂などを利用すべきである。普通教室から場所を變つたと云ふだけで、兒童には一の刺戟となり、新しい學習興味も湧起するものである。唱歌教室はなるべく陰鬱なるところをさけて、明るく朗快なる室を選ばなければならぬ。床は板張りとし、床下に空洞を設けて、土中に壺を埋むればよく音の反響を高めて有利なものである。室内を清潔にすべきは貧するまでもなく、器具の配置もその宜しきを得なければならない。學習中は窓を開け、通風をよくし、採光の具合をも考へなければならない。陽熱の光線の直射するところで學習せしめてはならない。

唱歌教室は清潔整頓を旨とするばかりでなく、優美なる裝置をなすことも忘れてはならない。引幕の色彩も雅致あるものを選擇し、壁には美麗なる繪畫を掲け、或はベートーベンなどの樂聖の肖像乃至音樂史に關係ある寫眞などを掲けておくがよい。花瓶には四季とり〳〵の美しい花を生け參考圖畫をも併置して、兒童が教室に入り來れば自然にその調和優美に靜安の氣に誘致されるやう遺憾なからしめねばならない。机は二人掛を理想とし、中央に少し間隙を設けて、その排列法は二列又は四列に並べるがよい。教具としては、ピアノ、オルガン、ヴァイオリンも差支へない。音階掛圖、唱歌掛圖、歌詞の意味を理解し直觀せしめるための繪畫、唱歌の場合の姿勢を示せる掛圖、五母音の口形を描ける掛圖などを用意しておくべきである。

次に黑板は二種を用意しておかねばならない。一は普通のものであり、一は五線を描けるものである。黑板は白墨の後が殘つて、白つぽく汚なくならぬよう常に清潔にしておくことが肝要である。殊に五線を描ける黑板は線の周圍に白墨の外拍節機も用意しておかねばならぬ。教壇は二個、その中の一本は竹或は木にて作つた約一尺五寸位のもの、歌詞又は曲節を指しつゝ授くる時に使用するものである。も一本は兒童の腰掛、不注意に調戯を與へるときに使用するものである。ピアノ、オルガンの置き方、諸種の掛圖の掛け方なども統一あらしめておかねばならない。教室の硝子窓は、とき折り兒童に拭かしめるがよい。窓外には青い常綠樹を植え風致を

添えるがよい。

發聲練習の仕方

發聲練習と云つても別に特別の練習法による必要はあるまいと思ふ。音程練習に伴つて、聽覺の修練を加へ、その作用によつて音の美醜を知らしめ、各自の發聲に就て反省せしむべきであらう。この練習に於ては、何より教師の正しい模範と批判、環境の整理が肝要とされる。發聲練習に就て先づ注意すべきは、自然的發聲に努めることである。技巧的發聲を要求するよりも、飽くまで子供らしく、伸び〳〵と自由に朗かに發聲せしめたい。子供らしい響きを持つことが肝要である。また眞の發聲を兒童に求めようとしても、仲々望み得られるものでない　そこを無理に押し通さうとすると、遂に誤つた發聲法に陷らしめ、子供らしい響きを失つた、老人のやうな聲を出したり、假に例へて云ふ鶏の首をしめるやうな苦しい聲を出したり、活潑の如き寂びた不自然な發聲をなすやうな結果に陷る。實に恐るべきは發聲練習である。兒童には何より自由に伸び〳〵として歌はせることを根本義としなければならない。聲高く心行くばかり歌はせたい。教師の理想を底二無二押通さうとし、兒童の折角の美聲を殺してはならぬ。

然しながら單に歌はせるだけでは、眞の發聲をなすには至らないものであるから、中學年となれば共鳴ある聲を發聲せしめることに努めなければならない。單に聲帶によつて發せられる聲は實に貧弱なるものである。何うしても喉頭、口蓋舌などの作用によつて、頭部諸空腔、鼻腔、口腔、胸部などに共鳴し、擴大され色づけられた發聲をなさしめることが肝要である。そこでこの共鳴發聲の練習に當るには、先づ鼻腔共鳴練習から入るがよい。一名ハンミング・ヴオイス（鼻音聲）とも云ふ。その要領は唇にも舌にも力を入れず、唇は輕く締めて鼻孔から發聲せしめるのである。出來るだけ大きな發聲をなさしめる。この方法を繰返して練習して行くと、遂に鼻腔に共鳴する發聲をなすに至る。併し注意したいことは俗に云ふ大阪式の鼻聲と混同してはならぬ點である。あの鼻にかゝつた音は、氣息が鼻腔内に共鳴せず、そのまゝ無意味

に派失するものであるから、全然別物たることを知らなければならない。またこの鼻聲も鼻腔共鳴練習によつて當然矯正されるものである。

次に胸聲區、中聲區、頭聲區の所謂聲區の取扱ひに就いてゞあるが、言ふまでもなくこの三つの聲區は何の不自然もなく流れるやうに移つて行く、各聲區の聲量も均等に訓致されなければ眞の發聲とは云はれないものである。然しながらこの三つの聲區を融和させると云ふことはなか〳〵至難なことである。聲樂の太家リルリーレーマン氏も「本當に健全な唱歌の發達を計るには、この發聲區間の問題を一掃し去らなければならぬ」と云つた如く、全くこの發聲區を嚴重に神經過敏に取扱ふと、兒童はオツカナびつくり戰々恟々として腫物にでもふれるやうな氣で歌ふ。教師はこの點に注意して、餘りに嚴に失した取扱ひをなして、兒童を臆病ならしめぬやう注意すべきである。

發音練習の仕方

一般に日本人の聲には力がない、日本人の言葉には活氣がない、じめ〳〵と暗い、陰鬱であると云ふ非難はよく聞かされるところである。この非難は吾人が外國人と交際し、その會話を聞けば直ちに首肯されるところである。これは日本人の性質そのものにも要因するものであらうが、發聲運動の極めて遲鈍なる點にも原因があらうと思ふ。從つて日本人の言葉を快活に、力强く誘致する意味に於ても、發聲諸器管に十分な平素の訓練を加へ、而て發音を敏活ならしめ明瞭に表現せしめなければならない。

然らばこの發音練習は如何なる方法に依るが最も効果があるか、之を詳細に完全な域にまで到達せしめようとすることは、言ふまでもなく專門的な仕事であつて、短時間の指導の斷續による短日に於てよく成し上げられるものではない。從つて發音練習は先づ音階練習音程練習乃至は普通歌曲の取扱ひに伴つて通俗的に、而て卑近な簡易な取扱ひをなすがよいと思ふ。その方法として、或は緩かに唱はせ、又は出來るだけ早く且つ明瞭を旨として唱はせ、之れに修練を加へ、兒童

自身に反省させ、何遍も繰返して行くうちに、之を整理さして行くものである。その歌詞は極めて歌ひ難い、發音に困難な、そして十分滑稽味のある、兒童が嬉々としてこの練習を續くるに足るものを選擇し考案すべきであらう。例へばその一例を擧げてみると、「トナリノツルベハ ヤブレタ ツルベ ウチノ ツルベハ ヤブレヌ ツルベ ツブレタ ツルベニ ツブレヌ ツルベニ ツブレス ツルベ」の如き發音に於ても、唱歌するにも困難なるものを出來るだけ早く、明瞭に歌はしめる練習を續ける。兒童は勿論滑稽味につり込まれて笑ひ乍ら歌ひ出す。併し不眞面目なる頽度では決してない。笑ひ乍ら而も彼等は一生懸命になつて歌ひつゞけるものである。この方法を繰返して行けば、發音練習の効果は相當に擧るものだと確信する。一般に行はれてゐるが如き、口形圖の前に兒童を引き据えて、アエイオウの口形を强制して發音練習をなすが如きは機械的な、而て極めて無趣味な方法と云はなければならない。言ふまでもなくその方法によつて發音練習の効果を期待することは不可能である。發音練習は、先づ通俗的に、而て卑近な取扱ひをなし兒童の興味に訴へてその學習効果を擧ぐる點に想到しなければならない。

呼吸練習の仕方

呼吸練習も發聲の原動力とも云ふべき重要な使命を持つてゐる。呼吸練習によつて、氣息を種々に調節し、共鳴腔に送るところの發聲の力を養ふものであるから、この練習の方法も輕々しく取扱ふことは出來ない。呼吸練習としては、現今いろ〳〵の方法が實施されてゐるが、この練習も通俗的に、而て卑近に簡單に取扱つていゝと思ふ。と云つて決して粗雜に取扱ふと云ふ意味ではない。從來の規定的な理論一天張りに則することを排して、兒童本位に、而て興味的に取扱ふと云ふ意味である。その方法としては、先づ如何にして多量の氣息を準備し得る習慣を養ふべきか、如何にしてその準備された氣息を、經濟的に使用し得る習慣を養ふべきかの二點について考へなければならない。

併しその方法は至つて簡單にして明瞭である。從來一般の方法は、横隔膜をぐつと下げて腹一杯に吸ひ込み、胸を出來

るだけ擧げて肋骨の助けによつて胸の中に氣息を貯めておき、呼出すとき徐々と腹がたるんで來るやうにする、と醫科の生徒にでも說くやうなことをくど〳〵と云つたものであるが、兒童にはなか〳〵理解されない。併し呼吸練習に於ては決してこんな面倒な注文は必要としない。氣息はぐつとお腹の底に貯めこんで、歌ふときは其上に〳〵息を入れて行くやうにして歌ふと說くだけでよい。而て短い簡單な音程を一息に出來るだけ二回三回四回と長く歌はしめる練習を續ける。氣息の續かなくなつた兒童は膝掛けさせ、殘つた兒童には尙つゞけさせる。この方法を採ると、兒童は人一倍長く續けんとして、如何に氣息を經濟的に使用すべきかを自ら考察するに至るものである。尙兒童はこの氣息の經濟的使用の考察から一步進んで、鼻腔、口腔から流失する氣息を有効に使用せんことを努める。その結果は共鳴となつて十分活用されることになる。至つて簡單な方法であるが、決してその効果は輕視されないものである。

以上の呼吸練習は、從來の如き夕クト棒を持つて、「緩吸急呼」「緩吸緩呼」などゝいかめしく取扱つた方法に比較して決して劣らぬは勿論、寧ろ數倍の効果を擧ぐることの出來るものである。尙この呼吸練習を餘りながい時間に亘つて行はせると、暴氣の候などには倒れる兒童もあるから、一時間の中五六分程度をこれに割くことが最も適切であり、また最も効果があると思ふ。

階名練習の仕方

階名練習は無味乾燥に陷り易いものであるから、これを興味的に取扱ふことが肝要である。練習の速度の最初は緩かにして、漸次急速に進めて行かなければならぬ。全音階系列を覺えさせるに當つても、少くとも二時間を之に當てねばならない。大人の考へを以てすれば容易なことではあるが、兒童にとつては生優しい問題ではないのである、殊に初めて階名に接する兒童にとつてはその理解に苦むものである。從つて敎師は餘り授業を進めて取扱ひに遺憾あらしめてはならない順讀みが十分と思ふ確信がついてから、逆讀みにかゝらねばならぬ。尙低學年兒童の階名に對する知識はまち〳〵なものであるから、一部の優等生を以てその敎授の標準とせず、普通兒を以てその敎授の標的とする點を忘れてはならない。この點を誤ると後に逆讀みはおろか、順讀みさへあやふやな兒童を發見してがつかりするものである。

次にドミソドの三和音は、順讀と逆讀とが十分理解徹底された後に敎へなければならない。三和音はその音階系列の位置を明瞭に記憶せしめるのが眼目であるから、板書の方法を十分考察してかゝらなければならない。次に基礎音によつて他の音を知る練習を高全ならしめることが肝要である。ドと云へば直ちにドレと云ひ、ドシと云ふが如き、またミと云へば、直ちにミファと云ひミレと呼ぶが如く、すべて基礎音に對して直覺的に反射的にその上又は下の音を速讀する事の出來るやうに指導しなければならない。階名練習は、必ず時間の初めに行はねばならぬと云ふ規定はないものであるから、敎授の變化を計る上に於て一時間の中五六分づゝ二回或は三回之を練習すべきである。最初は言ふまでもなく掛圖によつて練習すべきであるが、慣れてくれば掛圖なしに指導すべきである。尙この階名練習を十分徹底せしめておけば、次に讀譜の練習に進んで大いに力となるものである。

讀譜練習の仕方

讀譜即ち五線上に並べられた音符を讀むと云ふことは、兒童にとつて實に一大仕事である。從つて讀譜指導は極めて叮重に、一進一退常に兒童の理解を正確ならしめることを期して、漸進的に指導することが肝要である。單に一部兒童が理解し得たりと云つて、直ちにその全部を推測して、次の指導に移つてはならない。中途に於て一ヶ所不理解なる點をそのまゝ看過するとすれば、兒童は讀譜學習を嫌惡し、言ふまでもなく譜を讀むことも不可能となり終るものである。敎師はこの點に留意し、常に劣等兒及普通兒を標準として指導を進めて行かねばならない。

また音程練習と同時に讀譜練習を課してゐる敎師も多いが、この方法は排した方がいゝと思ふ。殊に幼學年や中學年の讀譜指導の場合には絕對に排しなければ、學習は不活潑となり、兒童は倦怠を覺えて一の効果をも擧げることが出來ない

ものである。また讀譜練習は譜表上に於ける音符を歌はしめるものではなくして、讀むことをのみ練習せしめるものであり、音符は何うしても一つ〳〵を明瞭に深く認識さして行かなければならない。要するに讀譜の練習もその練習の如何によつて効果は左右される。練習さへ十分にやつて行けば、兒童は自ら機械的に意識的に効力なしにもスラ〳〵と讀譜して行くやうに上達するものである。併しこの讀譜練習は何もかもたゞ練習のみによつて到達すべき性質のものではない。そこには練習樣式の考察も必要である。教師の練習方法に對する研究である。ドを示しで音階の系列から他の音を考へ出させると云つた一般の讀譜練習に依らしめることは、學習經濟上から云つても、その結果からみても餘り理想的なものではない。要するに教師各自の研究考察に俟つべき問題である。簡單なる應用問題を提出し、樂譜準備圖の取扱ひなどそのよろしきを得なければならない。

ピッチ觀念の養ひ方

唱歌の基礎は、音の高低を判別する力、即ちピッチ觀念の確立にある。つまり耳の訓練が基礎となるものである。併し兒童は却々このピッチ觀念を正確ならしめることが出來ない。田舍の兒童や唱歌を習はない者は、半音の區別は愚か餘程音の差のあるものでも、正確に判別することが出來ない。俗に樂器は一通り彈奏し得られる人が、その調子を合せることが出來ないと云ふが如きも、このピッチ觀念即ち音の高低に對する耳の訓練が不十分だからである。從つてピッチ觀念の最初の指導に當つてはオッターブ位な距離の二つの音を聞かせ、その高低を判別させることから入るのがよいと思ふ。

尙ピッチ觀念の全くゼロの兒童に音の高低を判別させるには、先づ音の音昇及び低下から指導することが肝要である。即ちこの音の音昇及低下を示して、音の高低的判斷力を與へるのである。教師はゆるやかに漸高音、漸低音を彈奏して、音が高くなつて行くことや、低くなつて行く印象を與へ、高い音、低い音を實際に比較的に認知せしめるのである。勿論彈奏は單音に依るべきである。斯くして音の昇高及び低下が判別されるに至つたならば、次に高低二音を彈いてその判別

をさせる。この彈奏は初めは充分間を置いて、兒童の判別認知の餘裕を與へておかねばならない。兒童が慣れて來れば、漸次に早く、その距離も漸次に縮めて行くやうにする。

以上の如くして二音間の距離を段々縮め、ピッチ觀念が正確になつて來れば、次に全音と半音との區別を判斷せしめる指導にとりかゝるのである。これも半音だけポッンと鳴らしてそれを覺えさせるだけでは理解に困難である。何うしても比較的に取扱はねばならぬ。「今先生がピアノを二度鳴らすから、二つの音をよく比べてみなさい。……どうです。一つの音は何だか足りないやうな、悲しいやうな音でせう。これが半音です」と說き、この方法を何度も繰返して聞かせるのである。併しこの方法は餘り兒童にとつて興味多いものではないのであるから、兒童が一通り全音と半音との區別が出來るやうになれば、次には兒童が既に學習したものゝ中から、全音と半音とを區別せしめる方法を採る。この方法は學習に變化を與へ興味的であり、ピッチ觀念をも正確ならしめるに効果あるものである。例へば一年ならば「池の鯉」「かたつむり」「たこのうた」、二年ならば「雲雀」「浦島太郎」「秋葉」「那須與一」など、三年ならば「春が來た」「汽車」「虹」「雁」などすべて半音を含むものである。例へば「春が來た」であれば、教師がその歌を彈奏して、その中から半音の部分を兒童に指摘させるのである。こゝではルとガの間が半音であるが、その半音が兒童に判別されぬ場合は、教師が指示してその音を十分比較判別せしめる。かくして、兒童は漸次正しいピッチ觀念を養成されるに至るものである。

略譜の教へ方

小學校に於ては略譜を授くべきか、それとも本譜を授くべきかと云ふ問題が最近提唱され、一部の論者の中には略譜全廢論さへ說く者もあるが、略譜は略譜としての獨自の使命を持つており、之を輕卒に捨て去るべきものではないと思はれる。即ち手輕であり、簡易であり、兒童の理解に容易なる點が、本譜の及ばざる略譜の長所とするところである。また略譜に熟達せしめることは、本譜に入る一道程であつて、略譜の知識なくして直ちに本譜の指導をなすが如きは、兒童にと

つては非常な困難事である。併し略譜は言ふまでもなく略された樂譜であつて完全なものではない。唯本譜への媒介物として、また簡易樂譜としての使命を全ふせしむればいゝのである。

略譜の指導に當るには、大體尋常五年の第一學期の終り頃から始めたがよいと思ふ。略譜指導に當るには、先づ兒童が現在學習してゐる歌を、教師の指導なくして階名唱法をなし得るか否や、兒童が分數を解する數的觀念が確立されてゐるか否かの二點について考察することが肝要である。この二條件が完全に具備されてゐないとすれば、略譜指導も兒童にとつては困難となる。言ふでもなく、最初は四分音符から入らなければならない。こゝで樂譜と音符との區別を明瞭に理解させておく。略譜ではある長さの四分の一を一つに數へる約束になつてゐること、音符では四分の一が一の音になつてゐることを十分知らしめる。併し本譜、樂譜、音符、略譜などに對するあまりくど〳〵しい說明をなすよりも、最初は實際の運用方面に指導の主眼をおくがよい。次に八分音符は「今度は座蒲團をしいた音符が澤山出て來ました。之を八分音符と云ふのです」と說き、四分音符と八分音符との音の長短を調子をとつて理解させるのである。次には二分音符、附點音符、休止符、附點八分音符、十六分音符と云ふ具に進めて行くのである。

斯くて兒童は初めて視唱の域に到達し、自分の力で譜を讀み、樂器を奏し、歌ふことが出來るやうになるものである。そこで初めて兒童の獨自學習の自由な天地を認め得るに至るものである。兒童は言ふまでもなく、興味に乘つて、手當り次第に譜をよみ歌はんとするものである。教師は兒童のこの氣勢を旨く把捉して、出來るだけ多くの練習曲をよましめるやうに指導してやることが何より肝要である。

本譜の數へ方

略譜の指導が十分の効果を擧げ、兒童が自由に略譜を讀み得る程度に達すれば、次に本譜の指導に移らなければならない。本譜指導は尋常五年の二學期の始め頃から開始するが最も至當のやうに思はれる。先づその指導の順序としては、第

一に譜表上の各位置の見分け方から着手すべきである。これも最初は却々見分け難いものであるから、十分練習させ、迅速確に認め得るやう指導しなければならない。次には音名の位置を確實に、且つ敏速に把捉せしめること、これも十分練習を行はせなければならぬ。この位置把捉が不確實であれば、「ホ調」或は「ト調」と云つても無意味となるばかりでなく、それと關係をもつ各曲の位置も不安定となり、兒童は大膽な視唱が出來ないと云ふ結果となる。

次に各音間の高度關係を敏速に明確に知らしめる練習をなさねばならぬ。更に進んで調子記號の取扱ひである。この取扱に當つては、なるべく不要なものは排し、實際の活用に必要なるものから授けて行かなければならない。例を示して、「#」は變記號と云ひ、これが曲の中途にあれば半音上ることを示してゐるものであり、「b」は變記號と云つてこれは半音下ぐべきことを示してゐるものである。併し變記號が曲の初めについておればその數によつて何調であるかを示すものである。一つは「ト調」二つは「ニ調」三つは「イ調」四つは「ホ調」と云ふが如きである。また變記號一つは「ヘ調」二つは「變ロ調」三つのは「變ホ調」四つは「變イ調」なるを示すものであると說明する。併しこの記號の記憶は却々困難であるから急速に記憶せしめようと計つてはならない、例を示して各記號の聯絡關係をも十分認知せしめなければならぬ。說明はこの程度に止めて次に實際練習に進むがよい。また本譜指導に於ては、常に兒童の實力を考察して、漸進的にその指導を進めて行くことを忘れてはならない。

音階的音程練習の仕方

音階練習は要するに音程練習を主要目的とするものではないが、併し音程練習をも兼ねた音階練習を行ふことが肝要であらうと思ふ。即ち音階的音程練習が必要とされる所以である。贅言すれば、ドからミに上る場合とか、ソからレに下る場合とか、その他の場合に於て一體どの位の高さに上げたらよいのか、又はどの位の程度に下げたらいゝのであるか、と云ふ音律觀念を養ふには、何うしてもこの音程練習に依らなければならない。

この音階的音程練習に於て注意すべき點は兒童の聲の伸びないことである。この聲の伸びないがために、一般に音程は下り易く、又上り足りないものである。之は音階的標準があやふやなためにである。尙餘言すれば音程練習の不足なためである。從つて發聲させるときには出來るだけ伸び〳〵と、縮んだやうな聲を出さないやうに注意せしめなければならない。この聲を伸ばしめるに役立つものが、三和音である。從つてこの三和音、即ち音程を繰返し練習せしめて行けば、兒童にドミソドの各音律つまり音程を正しく把握せしめるに至るのである。尙この三和音を正しく唱へることが出來るようになれば、其の他の音もこれに從つて次第に引き上げられて行くものであるから、音程の下り易い傾向を防ぐことが出來るのである。從つてこの三和音、基礎音を確實にそして自由に伸び〳〵と唱へしめることに努むることが何より肝要である。

聽音練習の仕方

聽音練習つまり耳の訓練と云ふことは、音程練習若くは樂譜練習の基礎となるものである。音の仕事はすべて耳が基礎となるものである。音の高低を正確敏密に聞き分けたり、音律の誤りを指摘するものは、すべて耳の仕事である。從つて唱歌教授に於て、兒童の音樂的修練を正確に積ませようと努むれば、何うしても耳の訓練、つまり聽音練習に訴へるより外に道はない。併しこの耳の訓練と云ふことは、別に方法はなく、唯耳そのものゝ教養、音に對する敏感さを刺戟するより外に方法はないものであるから、耳そのものを絶えず刺戟して音に慣れさせ、音の高低即ち音律に對する正確な把捉をなさしめるより外に方法はないのである。

然しながら、またこの耳の發達と云ふのが極めて遲々たるものであり、容易にその發達を期することが出來ないのであるから、性急に効果を擧げようとしてはならない。教師の平常の努力によつて、徐々に音に對する正確な訓練をなさなければならない。尙聽音練習に於ては、唯徒らに耳を刺戟してその効果を期することはもとより不可能なものであるから、

辛抱强く合理的に系統的な練習をなさしめねばならない。或は聽音練習のために特別の課題を作つておき、練習樂譜の音程によつて系統的に耳の訓練をなさしめなければならない。また聽音練習は之を斷片的に取扱ふことが何より肝要である。

聽音練習の具體的な方法としては、先づ樂譜の二小節をピヤノ或はオルガンで教師が彈奏して聞かせ、その通りに兒童に復唱させる。兒童が二小節を聽きとることが困難な場合は、一小節づゝ彈奏して復唱させる。尙歌ひ出しの最初の音が兒童に發見されない場合には、その最初の音の階名を知らしてやることを忘れてはならない。或は樂器の彈奏を聽いただけでは音の高低が分らないと云つた場合には、片方の手で音の昇低を示してやるべきである。併し何日までも斯うした教師の援助を與へてやると、耳の獨立が鈍つて來るものであるから注意を要する。斯くの如き教師の援助は、初步の學習に於てか、或は音の聽き分けの困難な場合、又は特別の場合にのみ試みるべきであらう。尙兒童は音そのものゝ高低は判別することが出來るとしても、その音がミであるかッであるかドであるかレであるか、音階の觀念のないものにはその見當がつかないのであるから、音階練習も必ず每時間行はなければならない。聽音練習に使用するところの練習樂譜は別に特に製作する必要はあるまいと思はれるが、と云つて出鱈目に聽かせることはよろしくなく、何うしても系統的に發展的に排列して聽かせなければ聽覺を發達せしめることは出來ないものである。そこで最も兒童の興味に訴へて効果の擧るものは、一度學習した音程系列を、即ち聽き覺えのある音程系列を以て聽音練習をなすことである。

歌詞の取扱ひ方

童謠に盛られたところの歌詞は、子供の立場、子供の心境に則して作られたものであるから、純眞であり無邪氣であり兒童自身の情感に直接端的に反映し交流するものであるが、文部省小學唱歌の歌詞は概して非兒童的の非難を免れない。即ち多くの歌の主題そのもの、歌の着想そのものが兒童の世界から離れて大人の觀た世界、大人の感動した世界である。

既に着想に於て大人の世界であり、兒童の世界を無視したものであるから、その歌詞の表出法は全然兒童らしい無邪氣な純な表出と異なり、生硬枯淡にして何ら生き〳〵とした生彩がない。無趣味にして陳腐である。歌曲は兒童らしい情感が採り入れられてあるとしても、歌詞の多くは舊態そのまゝの陳腐さ、生硬さから一歩も出でゝゐないのである。然しながら、小學校唱歌教授に於ては、童謡のみを歌はせることも出來ないのであるから、先づこの生硬なる非兒童的なる歌詞を如何にして兒童化し、如何にして兒童の情感にぴつたり交流せしむべきかに就いて考察しなければならない。

その歌詞の詩化、兒童化の方法としては、何うしても教師の巧妙なる說話に俟つより外に方法はないと思ふ。即ち尋六の教材から比較的無難の歌詞朧月夜に就いてみても、

菜の花畠に入日薄れ、見渡す山の端、霞ふかし。春風そよ吹く、空をみれば、夕月かゝりて、にほひ淡し。

の如く生硬なる詩的情味であり、兒童らしい感動のない澄み極つた大人の觀照で、兒童の自然觀照にとつては、甚だ緣遠いものである。この歌詞を如何に兒童化し、兒童の情感に交流せしめるかと云へば、何うしても教師が、春の夕暮どきの野原の詩的な情景を巧妙な說話によつて說き、兒童にその詩情を起させなければならない。即ち詩的想像を旺盛に行はせなければならない。身は春の夕べのそよ風に吹かれるが如き心に換位せしめなければならない。

この外詩的內容を含む歌詞以外の滑稽歌詞の取扱ひに於ても、その滑稽味を單なる皮相の駄じやれとすることなく、上品なユーモアとして、統整された面白き情味として歌はしめなければならない。滑稽歌詞の中にも、自らなる詩味情味は含まれるものである。從つてその滑稽感を、この情味にまで深化せしめることが肝要である。この滑稽歌詞の取扱ひに當つては、教師の說話に巧妙なる方法と考察とが必要とされる。尙教訓を含む教訓を目的とするところの歌詞は、實際指導に當る前に於て、十分その歌詞のもつ目的を徹底せしめる用意が必要である。只漫然と歌はしめるだけでは物足りない。兒童にその目的を明瞭に認知せしめて、力强く歌はしめねばならない。否歌はしめるでなくて、兒童自身が「歌はねばならぬ」といふ意氣の向揚を持つまでに、歌詞の理解徹底を計ることが何より必要事であらうと思ふ。

低學年唱歌教授の扱ひ方

低學年の兒童に歌謡の美を求めたり、鑑賞に依る音樂的美的直觀を體驗させようとする事は、却て兒童から歌を消しとり、歌ふことの喜びを減削するものと思はなければならない。低學年の兒童には、唯歌ふことの喜びを知らしむればよい準備時代として只歌ふことによつて、その生活を限りなく明るく、喜びに充滿せしむれば足るのである。從つて唱歌の時間に少し位騒いだからと云つて兒童を叱りつけ、その無邪氣な歌はんとする心を奪ひとつてはならない。低學年の兒童には、自由に伸び〳〵と歌はしめることが肝要である。即ち歌ふことの喜び、歌ふことによつて兒童の生活を明るく充實せしむれば、それで教授の目的は十分達成せられるものである。

從つてその教材は明るく樂く無邪氣なものを採擇しなければならない。と云つて低劣な卑俗な滑稽を交へた歌詞や。純美ならざる劣惡の旋律は兒童に與へてはならない。暗いもの、感傷的な曲を排して、無邪氣で純眞で快活なる歌曲を歌はしめなければならない。贅言すれば、兒童に與へる教材は、兒童自身が歌詞を十分に容易に理解し、その發想に對して兒童自身が心から歌はんとする意欲を持ち得るものを與へなければならない。また狹い教室內にのみ閉じ込めて發聲練習のみを課してはならない。草原の上で、明るい太陽の輝く野原で、遊戯の都度、自由に屈託なく歌はしめることが肝要である。

併し兒童を自然のまゝに放任して歌はしめるだけでは教育とは云はれないものであるから、初步的な指導をなすことも肝要である。先づ訓練すべきは、その發聲法である。低學年兒童は歌を歌つてゐると云ふよりも、歌を叫んでゐると云つた方が適切なほど不自然な大聲を發するものである。この不自然な發聲法が發聲器官を害ふことは明白なことである。從つて教師はこの點に留意し、低唱による練習をさせねばならない。「もつと氣持ちのよい聲で歌ひませう」と、注意して、口を大きく開き小さな低い聲で柔かく歌ふべきことを述べる。これも教師の範唱によつて、實際に低唱による効果を理解

を歌ふものであると云ふことを正確に認知せしめておかねばならない。自分の心持を歌ふと云ふ自覺が生れてきてこそ、表情的表出をなすことも出來るものである。

樂譜練習帳の扱ひ方

從來兒童に使用せしめて來た練習帳が、果してその學習に効果ありや否やを考察すれば、その價値その無價値さに殆んど馬鹿らしさを感ずる程である。甚だしいものは何のために練習帳を使用し、又使用せしめてゐるのか、その目的さへあやふやなものが多いのである。從つてその練習帳も有名無實以外の何物でもなく、練習帳は兒童の惡戯描きの雜記帳の感さへあるものである。試みに一兒童の練習帳を採つて點檢すれば、表紙の半分はちぎれ、無茶苦茶に字や繪を描きなぐつてあり、中の用紙も引き裂いたり、惡戯書きをしたりして殆んど完全なる體裁を保つてゐるものは認め得られないのである。果して斯くの如き汚なき練習帳をみて、兒童は樂譜を自學自習し、歌はんとする美しい心情を持つことが出來るか否か、決して兒童は練習帳をその家庭に於て一顧だもしないことは餘りに明白な事柄である。

また兒童の書いた樂譜について點檢してみても、その完全に書かれたものは殆んど皆無と云つてよい。一學級何らの誤謬もないものは皆無である。然も兒童は何らの間ちがひもなく正しく歌つてゐる。之は視唱でなく、兒童が暗誦してゐるからである。從つて兒童は二三十分もかゝつて寫し採つた樂譜を有益に使用することもしらず、音符の誤謬さへ知らずに然も正しく歌つてゐる。こゝに練習帳指導上の根本的な缺陷と一つの皮肉を感ずるものである。何のための練習帳かその意義を見出すことが出來ないものである。この缺陷を招來した要因は、一に練習帳そのものゝ消極的使命にある。即ち、時折り練習帳を開いて歌はしめると云ふ範圍に止めた點にあると思ふ。從つて今後の樂譜練習帳は、之に積極的な使命を附與することが肝要である。教授の都度、兒童の復習の都度必ず樂譜練習帳に依らざるべからざる方法を考察すべきである。その形式も一般にあり來りの形式を踏襲せず、教師獨自の方法を工夫することが肝要である。出來るだけ練習帳を丁寧に

取扱ふこと、必ず練習帳を持つて視唱によること、先づ練習帳に兒童を慣れ親ませることが何より肝要事であると思ふ。

樂譜能力テスト

樂譜能力のテストはまだその完全なる方法を發表されない。歐米に於てもまだその研究の結果が發表されてゐないのである。然しながら樂譜能力を否定すると云ふことは、唱歌教授にとつて重要な任務であり、そのテストによつて唱歌教授に科學的な嚴密な基礎を與へることが肝要である。幸ひに先學者諸氏の熱心な研究と努力に俟つところである。

然らば樂譜能力のテストが如何にして必要であるか、これは今更贅言を要するまでもあるまいと思はれるが、樂譜能力と云ふやうなものは各個人によつて非常な相違があるからである。樂譜を學ぶと云ふことは特殊な能力のはたらきに依るものであつて、各個人みな一樣にその力を具有するものとは限られてゐない。即ち後天的に教師の努力によつて、各兒童一樣にその能力を進展せしめることが出來ないものである。言ふまでもなく後天的な指導によつて幾分その能力の開發されるところは認めるが、概してその能力は先天的なものである。兒童は生れながらにしてその能力の差異を持つものである。從つて或る兒童、即ち先天的に樂譜能力の缺如したる兒童には、幾ら教師の指導が熱心に加へられるとしても、その能力が或程度以上は伸びないものである。

從つて以上の如き先天的の能力を科學的なテストによつて認知し、それに對する教授上の基礎を設けることが何より肝要となるのである。又、何歳頃の兒童が、五線上に於ける音符を認識する力が最も發達するのであるか、拍子の觀念が最も明確になるのは何歳位であるか等もテストに依つて査定するより外に科學的な方法はないのである。從つてこの科學的な樂譜能力テストの方法が完成し、その教授に科學的な基礎をおくことが肝要について來る。

唱歌教授案の立て方

唱歌教授の如き兒童の情感に訴へるデリケートな取扱ひを必要とするものにあつては、その教授をも綴密詳細なるを要すると思ふ。その教授の要旨とするところは大同小異であるが、教材の研究は深く綿密になさねばならない。最初時間配當について考察し、各時間に於ける教授の範圍を一定しておくべきである。また教授の目的、目的把捉に對する情感の高調を計るためには如何なる準備が必要であるか、教辨物の蒐集も遺憾なきを期さなければならない。繪畫、實物などをも展覽すべき必要がある。又その展覽の時機は實際教授の項に明記しておくがよい。

教授にとりかゝる前に、既習教材の復習をなすとか、音階練習、音程練習、發聲練習をなすとか、かうした豫定があればその取扱ひの大體の時間をも記入しておくべきである。新教材に進めば、先づ聽音練習を必要とする。その後に新教材に對する教師の說話をなす方が効果は多い。教師の說話は、出來るだけ情緒的に、詩的になされなければならない。如何にして歌詞及び歌曲に對する兒童の詩的感興を高調すべきかを考察し、その方法をも記入しておくがよい。歌詞の朗讀、齊唱、教師の範唱なども遺憾なきを期するため大體の時間を記しておく。板書はまた丁寧明瞭なるを要する。音符を誤つて記入しないやうに、何度も繰返して調べてみなければならない。又その記入は丁寧になさなければ、勢ひ兒童に投げやりの氣を起させるものである。

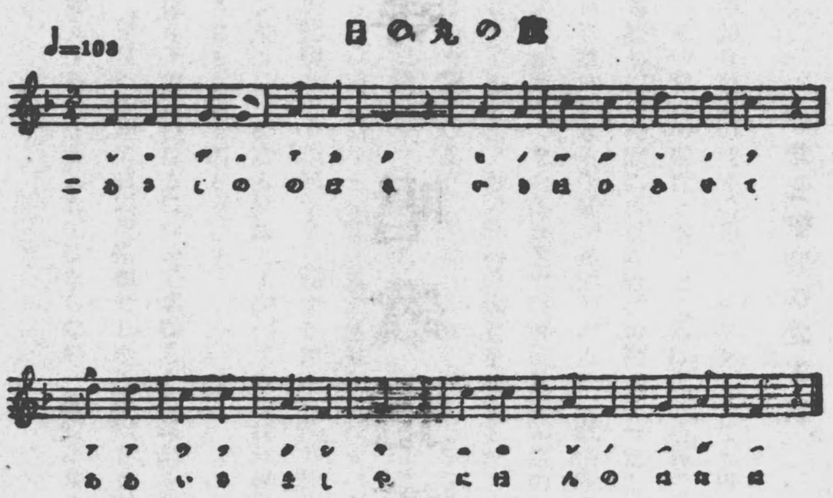
次には一節々々の取扱ひ方について考察しその結果を記入しておく。なるべく詳細なるを要する。表情的表出をなさしめるために、兒童に各節の强弱を指摘せしめる時期をも考察しておくことが肝要である。尙最後に大體に亘つての注意點を考察し、記入することを忘れてはならない。鑑賞をなさしめようと思へば、その鑑賞教材を列記しておくべきであらう。

尋一唱歌指導の實際

日の丸の旗

一　白地に赤く
　　日の丸染めて、
　　あゝうつくしや、
　　日本の旗は。

二　朝日の昇る
　　勢見せて、
　　あゝ勇ましや、
　　日本の旗は。



一　教材及指導の要點

「日の丸の旗」文唱一

(一)　區分　四回　二時間

(二)　速度　メトロノーム108を以て示してあるから、一つの歌を十七八秒から、二十秒位のところで歌へばよからうと思ふ。

(三)　發想　ゆつたりと晴やかに。

第一段の前半四小節は、靜かに曲を起してゆつたりと進めてゆき、後半四小節は漸次強め加減に取扱ひ、

第二段前半四小節は強く高らかに歌ひあげ、後半は靜かに受けて、ゆつたりと大きく、全曲を結ぶことにする。

(四)　ククトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　既習歌曲の唱話及第一歌詞

(一)既習歌曲の唱話……本次は學校に於ける唱歌學習の第一次、即ち最初の時間である。然し、彼等は、學校に於てこそ教育を施された經驗はないが、已に今日までの生活によつて、環境から受けて來た教育的影響は決して尠くはない。そこで、正式ではないかも知れないが皆多少知つてゐる譯であり、歌つて來た經驗を持つてゐるのである。今、それ等の歌を調べ、彼等の力をみ定めて、計畫を樹てたらよからうと思ふ。

調べるといつても、六ケ敷い事ではない。問答等と開き直る必要もない。即ち禮を濟ますなり、子供達の知つてゐさうな歌を、片つぱしからダン〳〵彈いてゆくのである。

始めこそは、樣子が分らないので、キヨトンとして目をクル〳〵させてゐるが、その内に自分の得意な曲でも出て來ると、ニコ〳〵やりだして來る。今度は小聲で誰か歌ひ出して來る。さうしてゐる間にワイ〳〵と歌ひあげて來るやうになるものである。

しかし、完全に歌へるものは極めてすくないもので、大抵は一番の歌詞を繰りかへすものである。例へば「兎と龜」のやうなものでも、第一歌詞は大抵の子供は知つてゐる。第二歌詞になれば半數位になる、第三歌詞にな

るともう二三名になる狀態である。しかし、子供達はそれまで、じつと待つてゐるものではない。すばしつこい子供はもう第一歌詞にかへつて來る。大勢もそれに從いてかへつてゆく……かうして何回も〳〵同じところを繰りかへしてゆくところは又面白いものである。

かうして、子供達の持つてゐる既習歌曲を知ると共に唱歌學習に興味をもたせ、これに馴れしめやうといふのである。

「あなた方はお唱歌が好きですか」

「どんな唱歌を知つてゐますか」

等の問答をしてゐる間には、もう一通りの仕事は濟んでゐる頃である。子供達はすつかりメートルを擧げてゐる時分である。子供は理屈では動かない。早く童心をつかむことである。

(二)教材「日の丸の旗」の練習……この仕事も前段に於て一通りは濟まされて來てゐる譯ではあるが、これは單に知つてゐる、歌へるといふ計りではなく、正式に正確に纏めるといふ建前の許に指導してゆくのである。子供達の中には、第二歌詞の歌へるものもあるではあらうが、正式に纏めることは第一歌詞に止め、第二歌詞は單に知つてゐるものに歌はせ、彼等を滿足させる位に考へて置いたら、よからうと思ふ。

(三)聽音把捉練習……これは基本練習の第一歩、音樂的陶冶の最初の仕事である。即ち、與へられたる音乃至言葉を、その儘把捉し、復唱するのである。

これが、何でもないやうで、なか〳〵六ケ敷いものである。最初は極めて短いものでも片つ端から忘れてしまつて、滿足に復唱することは、かなりに困難なやうであるが、だん〳〵馴れて來ると、相當に長い旋律でも、容易にしかも正確に把捉して、これを復唱するやうになるものである。

その方法としては、出來るだけ子供達の感興をひき易いものを材料に採り、それに適當に曲節を附して用ふるのである。

例へば、子供達の姓名に曲節を附して點呼してみるのも一つの方法である。

「山本の花子さん」

と節をつけて歌つてやれば、子供達も一緒になつて其の儘復唱する。悪戯をやつて困るやうな子供があれば、

「支那男いたづらやめてこちらをむいて」

と唱へば、皆んながそれを唱ひ出すので、流石の支那男君も、仕方なしに悪戯をやめ、皆んなと一緒になつて

「こちらを向いて……」等と歌ひ出すやうな滑稽さへある位で、六ケ敷い基本練習も、まことに朗らかに、進めてゆくことが出來るのである。かうして、面白く愉快に引廻して置いて、適當の頃合を見計つて

(四)既習歌曲の齊唱……前にみて置いた數曲の内から適當な一曲を選んで齊唱せしめ氣持よく本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……本次も子供達の知つてゐさうなもの、好きさうなものを數曲齊唱せしむることによつて學習動機をあふり本次の練習に這入る準備とする。

(二)聽音把捉練習……前次同樣の方法に階名唱法を加へることにする。例へば、

「ドーシラ、ソーミー、ラーラーソー」

と、いふやうな工合に、適當な旋律を少しづゝ課することにすれば、子供達は一層興味を以つて從いて來るやうである。

姉や兄等が常に歌つてゐる階名「ドレミ」に對し、尠からぬ憧れを持つてゐた彼等は、この階名を以て歌ふことによつて、尋常一年生になつた誇りと悦びとを痛感するものである。

(三)教材「日の丸の旗」の練習……今日は第一歌詞の仕上げである。齊唱させてみれば相當に歌へるやうであつても、全部の子供が知つてゐる譯ではないから、隨分危いものもある譯である。

そこで、今度は、幾組かに分けて歌はせてみることにして、各個人としての纏りをつけるやうに指導を進めてゆくことにする。初めてとしても、大して六ケ敷い曲ではないから、一通り纏めるには、左程の困難もなからうと思ふ。一通り纏つた頃合をみて一同起立し、充分に歌ひあげて、本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……本次も面白さうに數曲を歌はせてみて、唱歌氣分に導き、本次の練習に這入る準備とする。

(二)聽音把捉練習及階名翻譯練習……この階名翻譯練習といふのは、旋律を階名に翻譯せしめ、階名唱法によつて復唱せしむる方法である。こゝに於て彼等は全くの模倣から開拓？　の方面に一歩を進めたものであるから、子供達の活動は愈々眞劍味を帶びて來る譯である。

其の方法としては、最初階名である旋律を歌ひ、途中から階名をやめて旋律のみを聴かせ、それを全部階名唱に補つて復唱せしむるのである。例へば

楽譜 1－76－5－0－1

ド　ミ　ソ

千葉 1－76－5－0－1

ド　ミ　ソ

楽譜 128－1……　千葉 123－

〃　　〃

と、いふやうな工合である。この階名を消して旋律計りを聴かせる場合には、鼻音唱法によるのが最も好都合のやうに思ふが、楽器を用ひてもよからうと思ふ。但し子供が復唱する場合には、楽器は必ず用ひないやうにしてほしいと思ふ。他に依頼して動くやうな習慣をつくることは、今の内から充分に警戒し、自分のことは自分で解決するやうに指導してほしいと思ふのである。

(三)教材「日の丸の旗」の練習……面白さうに唄いてゆく……子供達は得意になつて従いて來る。……第一歌詞は、大抵は大丈夫であらうと思ふ。……第二歌詞に移つてゆくことにする。歌へるものもあるではあらうが大抵は危つかしいものが多からうと思ふ。

そこで、一二回範唱を示し、それから、一句づゝ歌詞を讀んで聴かせては、それに曲節を附しながら復習せしめつゝ進めてゆくことにする。出來るだけ子供達の活動の餘地を残し、不用の世話はなるだけ避けるやうに心掛けたいものである。

二回も繰りかへせば、一通りは纏るものである。そこで、今度は、第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。……「あゝ勇ましや」が却々出來ず、大抵は「あゝ美くしや」を繰りかへすやうなことになつて、混亂する場合が多いやうである。しかし、あせつても仕方がないから、あつさりと切あげて

(四)既習歌曲の練習……何んでもよろしい、最も得意の一曲を斉唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　総整理

(一)聴音把捉練習及階名調譜練習……聴を済ますなりグン〳〵と追つぎ〳〵に把捉練習、調譜練習を取まぜて進めてゆくことにする……子供達は面白さうに捌きながら従いて來る。勿論完全には出來ない筈である。間違ふところも御愛嬌、決して氣にするには及ばない。三分の

正確味が五分になり、七分になり八分に進むところに面白味もあり、興味も湧くかうして一通り引廻して置いて

(二)教材「日の丸の旗」の練習……第一歌詞第二歌詞を續けて歌はせてみることにする。子供達は得意になつて歌つてゆく……しかし「あゝ美くしや」と「あゝ勇ましや」が、どうしても混亂して旨くゆかない。

そこで、今度は、子供を二組に分け、第一歌詞と第二歌詞とを同時に併唱させてみることにする。不安定な組は、確實味の多い組のために引摺られ、すつかり混亂に巻き込まれるので、相方共に一生懸命に自分の持場を護ることに努めるのである。相互にかうして奮闘してゐる間に大抵は纏るものである。

しかし、この時に注意すべきことは、餘りに一生懸命に自分の持場を護り、併せて相手方を切崩さんと焦るために、暴聲を張り上げることである。かうした時には、悠々としてせまらず平氣で歌つてのけたものを賞揚し、興奮し、落着を失ひ、聲の調子を亂すやうなものは極力退けて、絶えず自己の聲を旨く調節してゆくやうな習慣をつけるやうに心して取扱つてほしいと思ふ。

なほ、分唱獨唱等によつて充分に纏りをつけ、適當な頃合をみて一同起立し、心ゆく計りに斉唱せしめる。

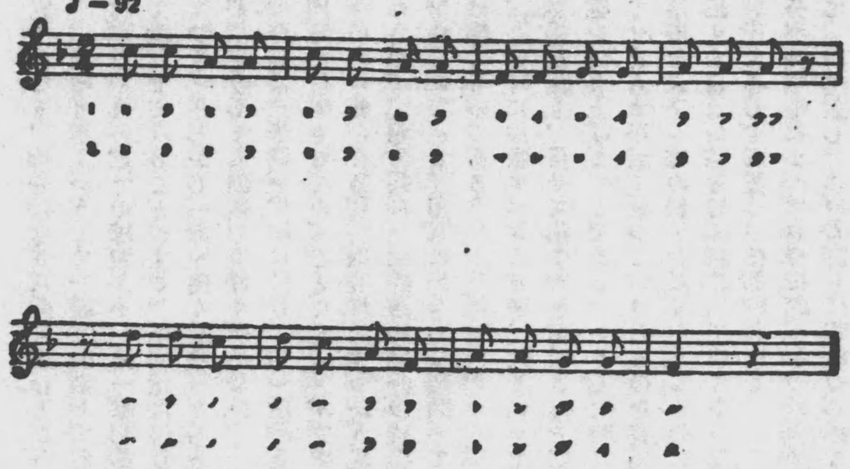
蝶　々

一　ひらひら　ひらひら
　きいろい　てふてふ
　はなの　のはらを
　とんで　くる。

二　ひらひら　ひらひら
　ましろい　てふてふ
　はるの　のはらを
　とんで　いく。

テフテフ

♩=92



一　教材及指導の要點

「蝶々」小學新唱歌一

(一) 區分　四回　二時間

(二) 速度　メトロノーム92を以て示してあるから、一つの歌を十秒位の速さに歌へばよからうと思ふ

(三) 發想　可愛らしく、

第一段前半二小節「ヒラ〳〵〳〵」は極めて弱く輕快に取扱ひ、後半二小節は、ゆつたりと稍強め加減に歌つてゆき、

第二段は強く受けて漸次力を抜き、輕くゆつたりと全曲を結ぶことにする。

(四) タクトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……禮を濟ますなり面白さうに彈いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。一旦引廻して置いて更めて齊唱せしむることにする。

(二)階名翻譯練習——但し把捉練習も加味して……

1 2 3 2 | 1 — · | 1 2 3 2 | 3 2 1 — |

ド レ · · · ド レ · · ミ · · ·

點は子供達に階名を當填めさせるところである。最初は其部分を黙なくして置き、漸次活動の餘地を擴めるやうに取扱つてゆけば、かなりに面白く、効果的に進めることが出來るやうに思ふ。

(三)教材「蝶々」の練習……子供達の知つてゐるやうなもの計りでは張合がない。又學校に這入つたといふ誇りに對しても稍不滿がある。そこで、子供達の餘り知らないやうなものも、少しは加へる必要がある。

この歌は發表ぜられてから間もないものであるから、知つてゐるものはなからうと思ふ。そこで、一二回範唱を示して、大體の輪廓を知らしめ、次に、一回づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

この歌には附點がない。八分音符計りをゆつたりと廻つてゆくところに、可愛らしい落着がある譯であるが、どうかすると附點になり跳躍的に陷入易い傾向があつてなか〳〵旨くゆかないものである。

それから、第一段から第二段に移るところ、第一拍の强拍の後半拍を受けて出るところがどうかすると簡單にゆかない場合があるやうである。

若し、業器で旨くゆかないやうであれば、タクトを以て指導することにすれば、これは譯なく運めることが出來るやうに思ふ。即ちポンと叩き込んだ音を蹄いてからこれをきつかけに受けて出るやうにすれば、大した困難はないやうに思ふ。かうした受方は、從來の日本曲、殊に地方の俚謠には隨分多く用ひられてゐる形式であるから、子供達にも何時とはなしに親しみがある譯であるから、一つきつかけが解れば、あとはすら〳〵と運んでゆくことが出來やうと思ふ。一通り歌へるやうになれば餘りくどくならない程度に切り上げて、

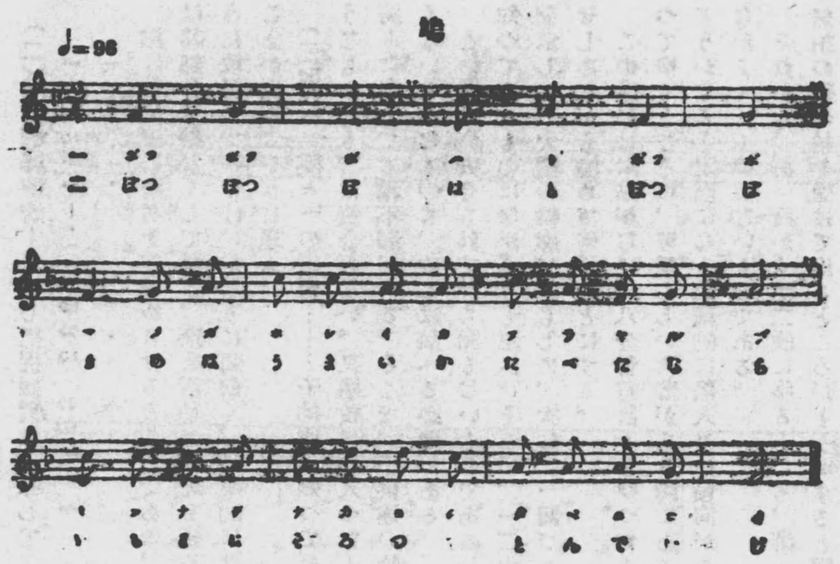
(四)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理　（以下方法省略）

第三次　第二歌詞

第四次　總整理

備考……等一第一時限の取扱方、聽音把捉、階名翻譯練習等の詳細に就ては、拙著「私の唱歌教授」を參照せられたし。



鳩

一　ぽっぽっぽ、
　　鳩ぽっぽ、
　　豆がほしいか、
　　そらやるぞ。
　　みんなで仲好く
　　食べに來い。

二　ぽっぽっぽ、
　　鳩ぽっぽ、
　　豆はうまいか、
　　食べたなら、
　　一度にそろつて
　　飛んで行け。

一　教材及指導の要點

「鳩」新訂尋常小學唱歌　一

(一)　區分　四同　二時間

(二)　速度　メトロノーム96を以て示してあるから、一つの歌を十五秒位に歌へば、よからうと思ふ。

(三)　發想　可愛らしく

第一段は前半二小節「ポツポツポー」の内、第一小節は極めて弱く、しかもスタツカツトに取扱ひ第二小節目は稍々強めに取扱つて二拍を充分に保たしめ、後半二小節はこれを受けて晴やかに歌ひあげ、

第二段は弱く曲を起して漸次強め加減に押してゆき、

第三段は強く朗らかに歌ひあげて可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)　タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一　歌詞

(一)既習歌曲の練習……「テフテフ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 4 3 2 | 1 — — ・0 ‖
ド　　ソ

最初は聽音把捉練習として取扱ひ、それから「ド」から「ソ」まで位の範圍を適當に工夫して練習することにする

例へば

1 2 3 2 | 3 4 3 2 | 3 4 5 4 | 3 2 1 2 |
ド　〃　〃　〃

3 2 3 4 | 5 4 3 2 | 1 2 3 4 | 3 2 1 — ‖
〃　ソ　ド　〃

(三)教材「鳩」の練習……この歌も隨分古くから、然も廣く歌はれてゐるものであるから、大抵の子供は知つてゐやうと思ふ。尠くとも、多少の馴染はもつてゐやうと思ふ。そこで、最初は、例によつてグン〳〵と彈いてゆくことにする。子供達は得意になつて從いて來る。……しかしどうせ聽き覺えの連中である。發想もなければ、勿論正確

といふ譯にはゆかない。

かうして一通り歌はせて置いて、あゝ滿足を與へて落着かせて置き、それから更めて範唱を示し、次に一段づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

始めの「ポッポッ」と弱く「スタッカット」に出てゆくところが、なか〳〵旨くゆくものでなく、かなりに亂暴に叫び出すものであるが、二三回やつてみると、だん〳〵興味が出て來て、後には目を細くして首を打振り「ポッポッ」と出て來るところは、おかしくもあり又たまらなく可愛いものである。

それから、この歌には附點がない。八分音符をゆつたりと進つてゆくところに、可愛らしく、又なつかし味もある譯であるが、どうかすると附點がついて誕躍的になり、このおつとりとした氣分をぶち壞はさうとする傾向があるから、この點は特に注意して取扱つてほしいと思ふ。仕上げは次回にゆづり、適當なところで、あつさりと切上げて置き、

(四)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を高らかに齊唱せしめて氣持よく本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を勇ましく齊唱せしむることによつて學習氣分をつくり、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 1 | 2 3 4 3 2 | 3 4 5 4 3 | 2 — · 0 |
ド　　レ　　ミ
5 4 3 2 3 | 4 3 2 1 2 | 3 4 3 2 2 | 1 — · 0 |
ソ　　ラ　　ミ

(三)教材「鳩」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達は嬉しさうに歌ひあげながら從いて來る。第一歌詞が終れば第二歌詞に移つてゆくのは勿論である。あへて阻止する必要はない譯で、勝手に面白く歌はせて置けばよからうと思ふ。今日の目的は第一歌詞の整理である。其れ以外の方面は大體大目に見てやりたいと思ふ。

次に、更めて第一歌詞を歌はせてみることにする。例の「ポッポッポー」のスタカットの取扱、及び八分音符を輕くあつさりと畳んでゆくところが、旨くゆかないかも知れない。しかし、二三回も繰りかへしてゐる内には何とか纏めることが出來やうと思ふ。

なほ、分唱によつて詳細に指導を施し、適當なる頃合を見計つて、

(四)既習歌曲の練習……「テフテフ」を輕く朗らかに齊唱せしめて、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)教材「鳩」の練習……瞳を清ますなりグン〳〵彈いてゆく……もう大抵は大丈夫、子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來る。なほ、不充分な點があれば指導を加へ、訂正を施して一通りの繰りをつけ、今日は愈々第二歌詞に進入ることにする。

最初は、例によつて自由に歌はせてみることにする。次に、更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。大して六ケ敷い歌でもないからすぐに謂めることが出來やうと思ふ。

しかし、どうかすると、第二段の後半「たべたなら」の「ら」の言葉が明瞭を缺き「たべたなな」或ひは「たべたらら」等と旨くゆかない場合が尠くない。さうした時には、

「奈良の奈良漬、奈良漬し」

と、いふやうなものを盛んにやらせてみる。こんなものは旨く出來ても、出來なくても、興味があるもので、子供達は窮屈な教室であることさへ忘れたやうに、一生懸命に練習するものである。從つて効果も多い譯である。尋常小學校、殊に低學年の兒童に對して、

「アエイオウ」等の母音唱法を、專門家でも教育するやうな態度でやつてゐるのをよく見受けるが、あれで兒童の興味をひき、あれで多少でも効果が擧げ得られてゐるものであるか、私は尠からぬ疑問をもつてゐるものである。どんな滋養物でも、消化力をもたないものには何の効果も、もたらされない計りか、反つて害心すべき結果を招致することを私共は考へねばならぬと思ふ。

子供は子供的に……

素人は素人的に……

……

かうして面白く遊んでゐる間に何とか謂りはついて來るそこで、今度は、第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

第二歌詞だけ歌つてゐる内は無事であつたものが、第一歌詞からつゞけてみると、すつかり混亂して大抵は旨くゆくものではない。この兩歌詞をゴチャにして纏めてみても何とか筋が通つてゐるので一層始末に悪へない。「一番はまだ食べないところ」「二番はもう食べてかへるところ」等幾ら說明しても、ゆつくりと、そんなことを聽いてゐてはくれない。何んでもかんでも歌へば滿足のいく連中だから一

唇始末が悪い。しかし、あせつても仕方がない譯であるから、大抵のところで切上げて……心機一轉

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 3 4 | 3 — 2 — | 1 2 3 4 4 2 | 3 — · 0 |
ド　　ド
3 4 3 2 1 2 | 3 — 4 — | 3 4 5 4 3 2 | 1 — · 0 |
ミ　　ミ

(三)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしめて、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　總　整　理

(一)階名翻譯練習

1 2 3 2 | 3 4 3 2 | 1 2 3 4 | 5 4 3 — |
ド　　ド
3 4 3 2 | 1 2 3 4 | 5 4 3 2 | 3 2 1 — |
ミ　　ソ

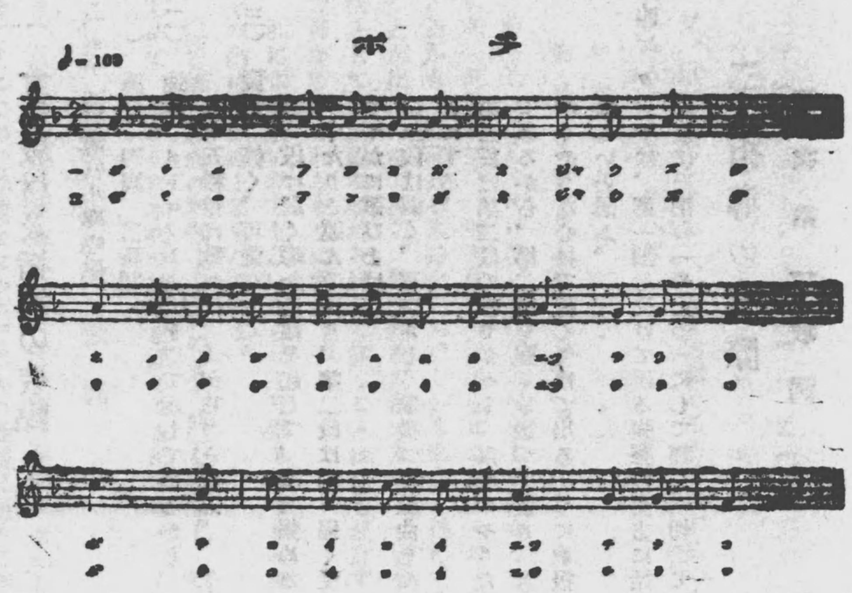
(二)教材「鳩」の練習……二二回齊唱させてみる事にする。混亂錯綜は前の通りでなか〳〵旨くゆかない。そこで今度は、

「豆がほしい組」と「豆はうまい組」との二組に分け、例によつて兩組の兒童を向き合せ、相手方の顔に注視せしめながら同時に併唱せしむることにする。

さあ、子供達は一生懸命である。不安全な子供は相手方に引摺り込まれて、何をどう歌つてゐるかさへ分らなくなるので、自分を護ること、他を攻撃することに全力をそゝぐ譯である。教師は審判役。混亂させられたもの、暴聲を張り上げたものは、悲鳴を擧げたものとしてオミツトしてゆくのであるが、子供達としてはなか〳〵に六ケ敷い譯である。

かうして交互に繰りかへしてゐる間に、何時となしに纏つて來るものである。

そこで、なほ分唱や獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合をみて一同起立、心ゆく計りに齊唱せしめて、本教材を結ぶことにする。



ポ　チ

一　ポチはあんよが
　　おじやうずだ。
　　おめめがみえぬか
　　えつちらて。
　　ポチこいこい
　　えつちらて。

二　ポチはあんよが
　　おじやうずだ。
　　おちちがほしいか
　　えつちらて。
　　ポチこいこい
　　えつちらて。

一　教材及指導の要點

「ポチ」新尋常小學唱歌　一

(一)　區分　四回　二時間

(二)　速度　メトロノーム100を以て示してあるから、これも十五秒位に歌へば、よからうと思ふ。

(三)　發聲　輕く、可愛らしく

第一段は弱く靜かに曲を起して、漸次强め加減にゆつたりと運んでゆき、第二段は稍々强く受けて晴やかに歌ひあげ、

第三段は弱く、可愛らしく取扱つて全曲を結ぶことにする。

第三段は第二段の繰りかへし、反響のやうなものであるから、第二段を强く取扱つて置き、其裏をゆくやうな心持で輕く受けて出るやうに取扱つてほしいと思ふ。

(四)　タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「鳩」を齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の學習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 6 5 4 | 3 4 3 2 | 1 2 3 2 |
ド　ソ　ミ　ド
3 4 5 6 | 5 6 5 4 | 5 4 3 2 | 3 2 1 — |
ミ　ソ　ソ　ミ

(三)教材「ポチ」の練習……この歌は發表せられてからまだ間もないものであるから、知つてゐる子供は尠からうと思ふ。兎に角、知つてゐるものゝために、一二回自由に歌はせてみることにする。初めての子供達は、この時に大體の輪廓を知つて置き、其の教授を持ち受ける譯である。

次に更めて範唱を示し、それから一段づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。第二回目は、ある部分は曲だけを聽かせてそれに歌詞を挿入して復唱せしめ、又は部分は全然聽かせないで、それに適當に歌曲を挿入させながら進めてゆくことにする。例へば

3 2 1 | 3 3 2 3 | 5 6 5 3 | 2 0 |
ポ チ ノ　ナ ビ ケ ス ダ

又は、

3 3 5 5 | · · · · | 3 2 2 | 1 0 ‖
ナ ン ネ ネ　ネ ム ル ル

又、歌詞だけを示して、曲を當塡めるやうにするのも面白いやうである。例へば

5 3 | · · · · | · · · · |
光 チ ュ ン ュ ン ュ ン ュ ン

かうして進めてゆけば、子供達には少しの隙がない。常に前の記憶を辿り、頭を働かせて適當に處理してゆく譯であるから、始終ある緊張を保ち、しかも面白く進めてゆくことが出來るのである。無意味な反覆にならず、いつも子供としての活動の餘地を殘して置くことは最も注意すべき大切なことであるやうに思ふ。

別に六ケ敷い歌でもないから、二三回も繰りかへせば、この內には出來上るものである。

(四)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を勇ましく齊唱せしめて、晴やかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

一通り歌はせて置いて、次に階名唱法にかゝることにする。勿論滿足にはゆかないであらうが、把捉法を加味しながら進めてゆけば何とか捌いて來るだらうと思ふ。例へば

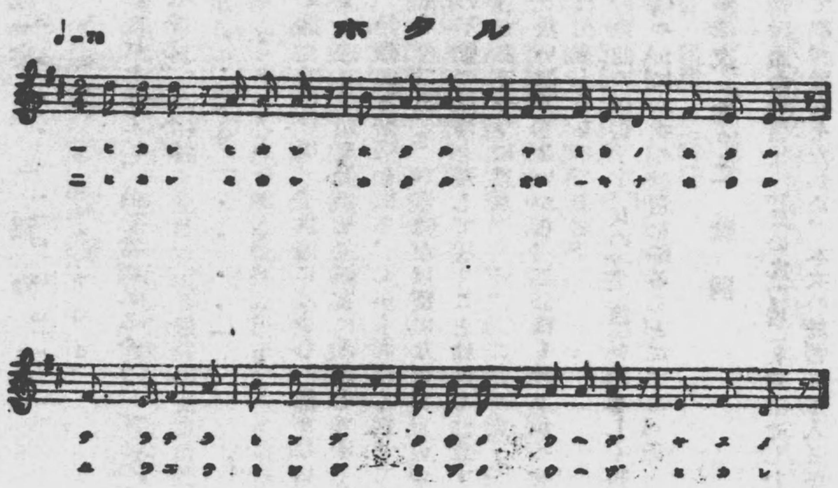
「ドドレレ・・レレ、ミミ・・・・ソ」

といふやうな工合にして導いてゆくのである。かうして階名と音の高度關係とを結ぶ習慣をつけて置けば、それがいつとなく歸納せられてゆく譯である。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 2 3 4 5 4 | 3 4 5 6 5 | 4 3 2 — |
ド　レ　ミ　ファ
3 4 5 6 5 | 4 3 4 3 2 | 1 2 3 4 3 | 2 3 2 1 — ‖
ミ　ファ　ド　レ

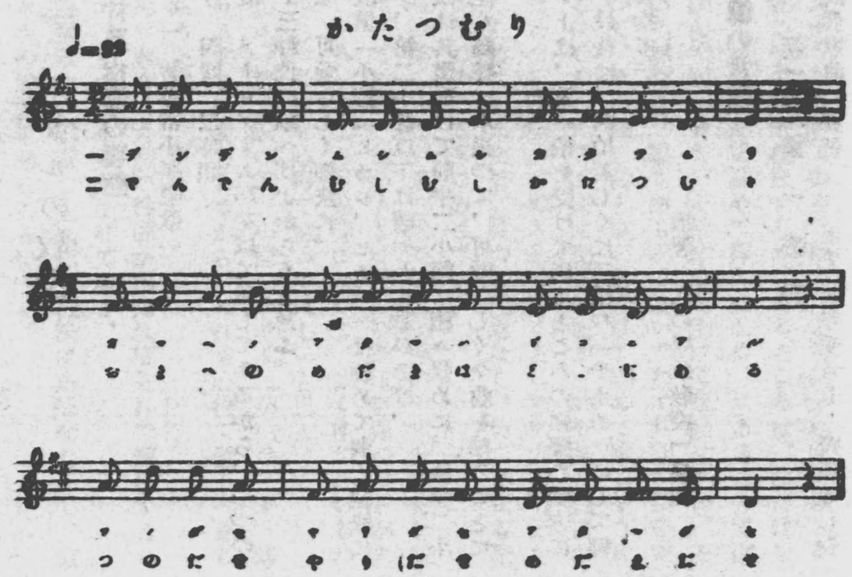
(三)教材「ポチ」の練習……いつもの通りに面白さうに彈いてゆく……子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來るなほ分唱によつて一通りの運りをつけ、愈々第二歌詞に移ることにする。



ほたる

一　ひかれ、ひかれ、ほたる、
　　やみよの　ほたる。
　　ちらちら　とんで、
　　くさのうへで
　　やすめ。

二　ひかれ、ひかれ、ほたる、
　　おほきな　ほたる。
　　ゆらゆら　とんで、
　　みづのうへで
　　ひかれ。



かたつむり

一　でんでん蟲蟲
　　かたつむり、
　　お前のあたまは
　　どこにある。
　　角だせ、槍だせ、
　　あたまだせ。

二　でんでん蟲蟲
　　かたつむり、
　　お前のめだまは
　　どこにある。
　　角だせ、槍だせ、
　　めだま出せ。

第一　ホタルの教授

一　教材及指導の要點

「ホタル」　新尋常小學唱歌一
(一)區分　四回　二時間
(二)速度　メトロノーム76を以て示してあるから、一つの歌を十三秒位に歌へばよからうと思ふ。
(三)發想　可愛らしく輕快に。
第一段第一小節「ヒカレ、ヒカレ」は極めて弱く輕快に取扱ひ、第二小節以下は晴やかに歌ひあげ、第二段は其餘受けて前半二小節は稍々强めに、後半二小節は輕く弱聲に取扱つて、可愛らしく全曲を終ることにする。
(四)タクトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は、四拍若しくは三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一　歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ポチ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 6 5 4 | 3 4 3 2 | 1 2 3 2 |
ド　ソ　ミ　ド
3 4 5 6 | 5 6 5 4 | 5 4 3 2 | 1 — • 0 |
ミ　ソ　ソ

正式の翻譯練習としては、まだ旨く捌いてゆくことは六ケ敷いと思ふから、適當に聽音把捉練習を陪梅して無理にならないやうに面白く指導してほしいと思ふ。

(三)教材「ホタル」の練習——この歌は發表せられてから、まだ間もない詩であるから、知つてゐる子供は尠からうと思ふ。兎に角一二回、極めて自由な心持ちに彈いて聽かせて大體の輪廓を示し、次に更めて範唱を與へ、それから、一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は全體を其餘從唱せしめ、第二回目からは例によつて挿入法を採つて謂めてゆくことにする。例へば

i i i i o 5 5 5 5 o | • • • | 3 3 2 1 | • • • |
ぢみて　ぢみて　ホタル　ホタル
3 2 3 5 | 6 i i o | • • • • | 2 3 1 0 ‖
ヤスメ

といふやうなものである。即ち、ある部分は曲と歌とを同時に聽かせて其餘模倣せしめ、あるところは、曲だけを聽かせて適當に歌を當塡めて挿入せしめ、又ある部分は歌だけを讀んで聽かせて、それに曲を附けて復唱せしめ、それからある部分は、歌も曲も示さないでたゞ其間の拍子だけをとつて、その間に曲と歌とをつけて謂めて來るやうに指導するのである。子供達は記憶を辿り、歌や曲の關係から適當なものを當塡め、挿入してゆくところに大に自己を活動せしむることが出來、從つて倦怠なく、いつまでも緊張をつゞけてゆける譯である。

第一段の第一小節、第二段の第三小節の十六分音符を並べられたところが、なか〳〵に同一の拍時を保つことが六ケ敷く、どうかすると附點等になつて、旨くゆかないものであるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

それから、第二段の第二小節「ラドド」が「ラソド」等にならうとする傾向もあるから、これも心得て置くべきことであらうと思ふ。

兎に角、本次は大體の輪廓が出來ればそれで滿足することにして、あつさりと切上げて置き、

(四)既習歌曲の練習……「鳩」を輕快に齊唱せしめて、氣持よく本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 2 3 4 5 6 | 5 6 5 4 3 | 2 — • 0 |
ド　ド　ソ
2 3 4 5 6 | 5 6 5 4 3 | 2 3 4 5 4 | 3 2 1 — ‖
ド　ド　ド　ド

(二)教材「ホタル」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供達も面白さうに從いて來る。第一小節と第二段の第三小節目の十六分音符のところがどうも旨くゆかない。

さうした時には、それらの部分だけを取出して出來るだけゆつくり歌はせてみることにする。次には出來るだけ速く歌はせてみることにする。

又は、歌詞を取り替へて練習してみることは一入効果的であつて面白いやうに思ふ。例へば、

「ヒカレ、ヒカレ、ホタル」
「ヒカレ、ヒカレ、クンシヤウ」

「今度は何にしませうか」等と子供達に希望を求めてみるのも面白いやうに思ふ。子供達はいろ〳〵に考へてみては勝手な問題を提供する、それを片つ端からやらせてみるとヤイヤイと喜んで歌も出して來る。例へば、

「先生今度は頭にしませう……」
「よろしい、これは面白い、それでは……」
「ヒカレ、ヒカレ、アタマ」
「それは誰の頭ですか、何、お父さん？」
「ヒカレ、ヒカレ、メダマ」
「これは誰のメダマですか、何、先生？　これはひどい
「今度は？」
「ヒカレ、ヒカレ、ピアノ」
「ヒカレ、ヒカレ、ナイフ」
と、いふやうな工合に遊ばせてゐる間に大抵は出來上るものである。同じことを何回も何回も繰りかへすことは、遂には倦怠を來たし、緊張を缺いで、殆んど効果はないものである。かうして、一通り濟つたところを、更に分唱獨唱等によつて仕上げをなし、

(三)既習歌曲の練習……「ポチ」を可愛らしく齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌調

(一)既習歌曲の練習……「テフテフ」を愉快に齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名調譜練習

1 2 3 4 5 6 | 5—4— | 3 4 3 2 1 2 | 3—2—|
ド　　ソ　　ミ　　ミ
3 4 5 6 5 6 | 5—4— | 5 6 5 4 3 4 | 3 2 1—|
〃　　ソ　　ソ　　〃

(三)教材「ホタル」の練習……第一歌詞を一二回齊唱せしむることにする。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。しかし、さらに不充分な點には指導を施し、間違つてゐる點は訂正を施して愈々第二歌詞に這入ることにする。

最初は一回範唱を示し、それから、歌詞を一句づゝ讀んで聽かせては、それに曲節を附しながら復唱せしむることにする。大して六ケ敷い譯でもないから、二回も繰りかへせば一通りは濟めることが出來やうと思ふ。

次に、第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。どう組合せても何とか濟つてゐるだけに始末が悪い。すつかり兩歌詞がこんがらかつて、なか〳〵旨くゆかないものである。しかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから、今日はあつさり切上げて置いて、

(四)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を暢び〳〵と齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　總　整　理

(一)既習歌曲の練習……「鳩」を可愛らしく齊唱せしむる

ことによつて學習氣分をあふり、本次の練習に這入る準備とする。

一通り歌はせて置いて、途中から階名唱法に導入することにする。完全に出來やうとは思はないが、大體の見當がついてゐれば滿足することにして、グン〳〵と進めてゆくことにする。

かうすることによつて、旋律と階名との關係に多少の關心を持ち、注意をむけるといふ習慣をつくる其過程に價値がある譯で、今のところ其結果は大した問題ではないのであるから、其出來栄えについては余り敏感にならないで、氣ながに、朗らかに指導を進めてゆく事の出來得るやうに努めてほしいと思ふ。

餘りくどくならない程度に切上げて元の歌詞にかへして收めて置き、

(二)教材「ホタル」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達も得意になつて歌ひあげながら從いて來る。しかし、第一歌詞と第二歌詞の混亂はなか〳〵旨くゆかない。そこで、例により第一歌詞の組、第二歌詞の組の二組に分け、向ひ合つて口形の動きに注目せしめながら、同時に併唱せしむることにする。

かうなれば、彼等はすつかり遊びの氣分になつて活動をはじめる譯である。不安定なものは、すつかり混亂させられてどうすることも出來なくなつて、中止をよぎなくさせられて沈沒する。(歌へなくなつて腰かけること)

かうしたことを相互に二三回も繰りかへせば大抵は出來上るものである。さらに分唱や獨唱等によつて充分に濟りをつけ、適當なる頃合をみて、一同起立し、愉快に齊唱せしめて氣持よく本次の練習を終ることにする。

第二　かたつむりの教授

一　教材及指導の要點

「かたつむり」　新訂尋常小學唱歌一
(一)區分　三回　一時間半
(二)速度　メトロノーム92を以て示してあるから、一つの歌を十五秒位に歌へばよからうと思ふ。
(三)發想　輕快に。

第一段は普通の強さに曲を起して輕く嘴やかに畳んでゆき、
第二段は弱く受けて漸次强め加減に取扱ひ、
第三段は强く高らかに歌ひあげ、漸次力を拔いて、輕く
全曲を結ぶことにする。

(四)タクトは、第一拍を受けて出るところの強聲の受方に始め、最後は、三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ホタル」を斉唱せしむることによつて學習氣分をつくり、本次の練習に進入る準備とする

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 | 3 4 5 4 | 3 2 3 4 | 5 6 5 4 |
ド　　ミ　　ミ　　ソ

3 4 3 2 | 1 2 3 4 | 3 2 1 2 | 3 2 1 ||
ミ　　ド　　ミ　　ミ

(三)教材「かたつむり」の練習……この歌は隨分古くからしかも廣く歌はれて來たものであるから、大抵の子供は知つてゐることであらうと思ふ。そこで、最初は、極めて自由に、思ひのまゝに歌はせてみることにする。

しかし、大抵の場合は、滿足に歌へるものは極めて尠く第一歌詞、第二歌詞をごたごたにして歌つてのけるものが多いやうである。かうして、一通り歌はせてみて、彼等にもある滿足を與へて置き、兎に角今日は、第一歌詞だけを整理することにする。

大抵の場合範唱も要らなければ、模唱させる必要もないやうである。第二歌詞と切離して歌はせてみれば、何とか捌いてゆくことが出來るやうであるから、本次に於ては第一歌詞を繰りかへす事によつて充分に記憶せしめ、第二歌詞との混亂に備へて置くことにする。

(四)既習歌曲の練習……「ポチ」を可愛らしく斉唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第二歌詞

(一)階名翻譯練習

1 2 3 2 1 | 3 3 4 5 4 | 3 2 3 4 3 | 4 5 6 5 | 1
ド　　レ　　ミ　　ファ

6 5 6 5 4 | 3 4 5 4 3 | 2 3 4 5 4 | 3 2 1 ||
ソ　　ラ　　ラ　　ソ

(二)教材「かたつむり」の練習……例によつて面白さうに彈いてゆく……子供達も得意に歌ひあげながら從いて來る。大抵は間違なく捌いて來ることが出來やうと思ふ。

そこで、今度は第二歌詞に移ることにする。特別な手數は要らない。その儘彈いてゆけば勝手に從いて來るものである。しかし、滿足に歌へる場合は極めて尠く、大抵は混亂に陷り、ウヤムヤに終ることが多いやうである。

そこで、第一歌詞の頭と、第二歌詞の目玉とをハツキリ頭のなかに入れることにする。例へば、

「でんでん蟲々かたつむり、お前の」まで歌つて來ては指を一本、或は二本出してみせることにする。子供達は其指を見て、一本ならば咽喉の間に「あたま」と受け、若しも二本の指であつたら「めだま」と受ける。かうして、黴菌を入れず、受けて出るところに多大の興味をひき、一生懸命に努めるので、大抵は片づけることが出來るやうである

又は、例によつて、第一歌詞の組、第二歌詞の組に分け同時に併唱させてみるのも面白いやうに思ふ。兎に角、頭と目玉の區別は大したことでもない譯である。一通り纏つたところをみて、分唱や獨唱によつてさらに仕上げをなし最後に愉快に、しかも晴やかに斉唱せしめて、本次の練習を終ることにする。

第三次　總　整　理

(一)既習歌曲の練習……「ホタル」を愉快に斉唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 3 4 | 5—4— | 3 2 3 4 5 6 | 5—0 0 |
ド　　ソ　　ミ

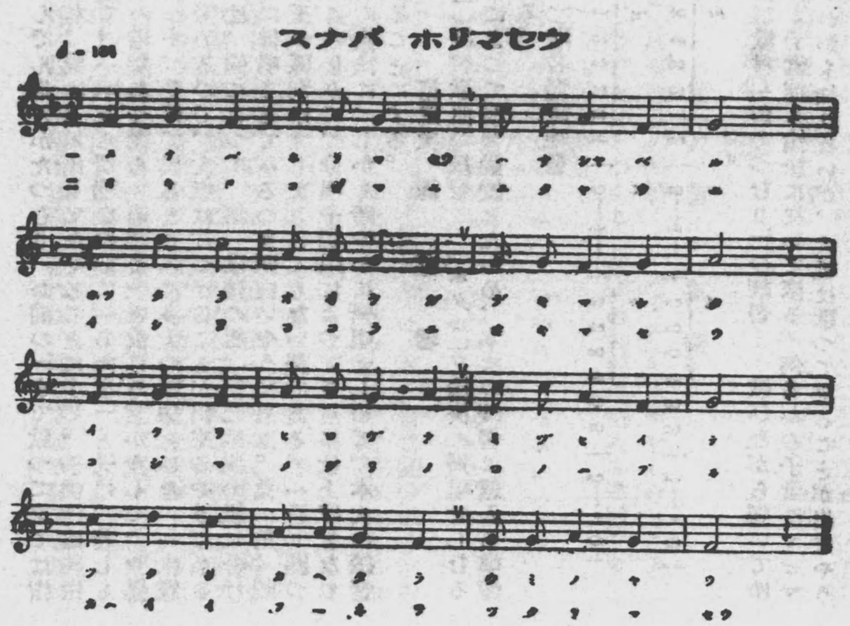
3 4 3 2 1 2 | 3—4— | 5 6 5 4 3 2 | 1—0 0 ||
ミ　　ミ　　ソ

(三)教材「かたつむり」の練習……歌ひながら彈いてゆく……子供達も愉快に從いて來る。何名かの子供はマゴマゴすがかも知れないが、大抵は歌つて來ることが出來やうと思ふ。一通り歌はせて置いて、今度は階名唱法に導入することにする。動きは遠く、相當に飛んでゐるので、なか〳〵旨くはゆかないと思ふ。しかし、結果よりも階名と音とを結んでみやうとするその過程が尊いものであるから、あつさり切上げて、元の歌詞にかへして收めて置き、今度は動作遊戯にこれを移してみることにする。

子供達は、この節奏的な音の動きに對してこれを動作によつて表現してみやうとする慾求は、必ず起るべきものであり、又歌詞によつても何等かのヒントを受けてゐる譯であるから、教師が少し環境をつくり、傍かの動機でも與へてやれば、彼等は枯草にでも火がついたやうな勢で踊り出すものである。

最初は勝手に、思ひ〳〵に踊らせて置く方が面白い。しかし、いつとなく仲間の誰かに統一されてゆくから面白い譯である。

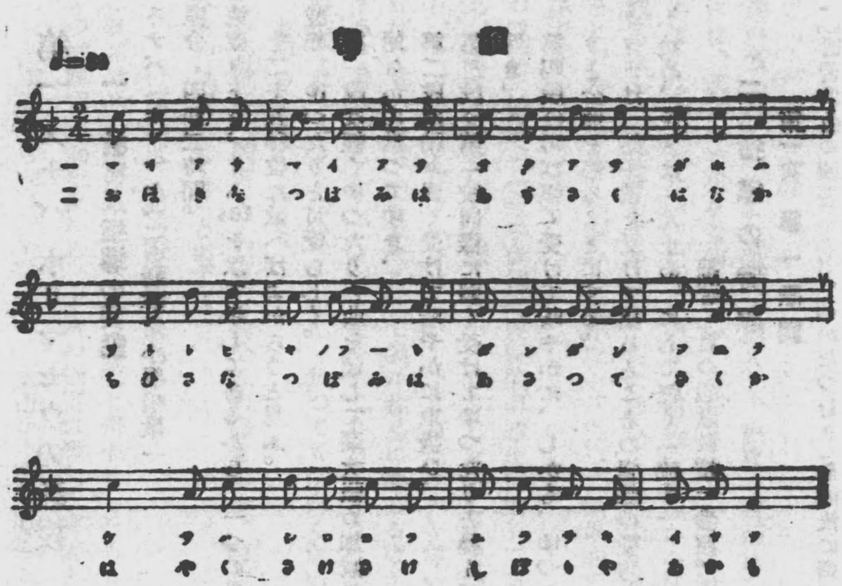
リトミック等によつて正式の指導が出來得れば、これに越したことはないが、ナマジ小器用な指導よりも、子供達の思ひ〳〵の創作考案に任せた方が一層効果的であるやうに思ふ。兎に角子供達は盛んに踊るものである。一通り踊らせて置いて歌にかへし、心ゆく許り斉唱せしめて、本教材を結ぶことにする。



すなばほりませう

一　すなばほりませう、
　　はなしやべる。
　ほつたらお池が、
　　出きました。
池をひろげて
　　水ひいて、
つくりかへたら
　　海のやう。

二　おきの小島に
　　にたやうに、
石をこゝらに
　　おきませう。
小島めぐりの
　　このはぶね、
かはいいふねを
　　つくりませう。



朝顔

一　毎朝、毎朝
　　咲くあさがほは、
　ととひきのふと
だんだんふえて、
　今朝はしろ四つ
むらさき五つ。

二　大きなつばみは
　　あす咲くはなか。
　ちひさなつばみは
あさつて咲くか。
　早く咲け咲け、
　　紅や赤も。

第一　スナバ　ホリマセウの教授

一　教材及指導の要點

「スナバ　ホリマセウ」新等常小學唱歌一

(一)區分　四回二時間。

(二)速度メトロノーム104を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　ゆつたりと可愛らしく。

第一段は輕くゆつたりと曲を起して漸次强め加減に朗らかに歌つてゆき、

第二段は稍々强く受けて晴やかに取扱ひ、

第三段は第一段同樣に弱く受けてゆつたりと墨んでゆき、

第四段は再び强く受けて晴やかに、しかも、ゆつたりと全曲を終ることにする。

(四)ククトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして輕く「流す」

損著「私の唱歌教授」參照。

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「かたつむり」を愉快に齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に導入る準備とする。

(二)　階名翻譯練習

1 2 1 2|3 4 3 2|3 2 3 4|5 6 5 4|
ド　　ミ　　ソ　　ミ

3 4 5 6|7 6 5 4|5 4 3 2|3 2 1—‖
ミ　ぐ　ソ　　ミ

(三)教材「スナバホリマセウ」の練習……

この歌は發表せられてから、まだ間もないものであるから知つてゐる子供は尠からうと思ふ。兎に角、最初一二回は極めて自由に彈いて聽かせ、知つてゐる子供達には勝手に歌はせてみると共に、知らないものには大體の輪廓を示して練習に導入る準備とする。

次には更めて一回の範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。この最初の一回は一句一字も省略することなく範唱を與へることにするが、二回目からは隨意に歌詞或は旋律を省略し、適當に歌詞或は旋律をこれに當嵌めさせながら進めてゆくことにする。例へば、

1 2 1|3 3 2 3|5 5 3 1|2—0|
ス　ナ　バ　　ホ　リ

・・・|・・・・・・|2 2 3 2|1—0‖
ホ　リ　マ　セ　ウ

歌詞の省かれた部分には歌詞を挿入し、旋律の省かれた場合には、適當な旋律を當嵌めてゆくのである。かうすれば子供達には油斷がない。記憶を辿り、前後の模樣から推して適當なものを當嵌めてゆくところに尠からぬ興味も湧く。そこで倦怠がなく弛緩の心配がない。從つて効果的である譯である。

この歌は三拍子、一寸子供達には馴染が尠ない拍子であるから、旨くゆかないかも知れない。さうした時には樂器を離れ、ククト棒を以て「アクセント」を打込み〳〵導いてゆけば、其のリズムに乘せられて案外容易に謳める事が出來やうと思ふ。しかし、ククトをやめてみるとどうも不安があつてはつきりしない。しかし、焦つても面白くないから、あつさりと切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「螢」を愉快に齊唱せしめ、晴やかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……「日の丸の旗」を齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に導入る準備とする……一亘り齊唱せしめて置いて、途中から階名唱法に導入することにする。この歌は大して六ケ敷い譯でもないから、何とか捌いてゆくことが出來やうと思ふ。子供達としてはそれが嬉しくてたまらないのである。かうして一通り引廻してから元の歌にかへして改めて置き、

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 12| 3 4 3 2 1 2|3 2 3 4 5|6 5 4 3—|
ア　　ま　　ま　　ま　　ま　　ま　　ま　　ま

3 4 5 6 5|6 7 6 5 4|3 4 5 4 3|2 3 2 1—‖
ま　　ま　　ま　　ま　　ま

(三)教材「スナバホリマセウ」の練習……例によつて面白さうにグン〳〵と彈いてゆく。子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來る。しかし、三拍子獨特のリズムが、なか〳〵旨くゆかない。そこで今度は、樂器を離れてククトにより、アクセントを打込み〳〵導いてゆくことにする。

次はククトを止め、樂器によつて歌はせてみることにする。大抵は大丈夫であらうとは思ふが、若し旨くゆかない樣であれば、第一拍を特に强聲に取扱はせて、二三回も繰りかへせば大抵は謳るものである。これは一種の遊戯化されたものであるから、すつかり子供達の氣分を朗らかにして愉快に進めてゆくことが出來るやうである。例へば、

「すなば　ほりませう、はなしやべる」といふやうなもの

である。しかし、この第一拍があまり目立つやうでは歌にはならぬ。漸次磨きをかけて角を取り滑かに歌らしく纏めてゆくことにする。

四　既習歌曲の練習……「かたつむり」を晴やかに齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)階名翻譯練習

1 2 1 2 3 4 | 3 — 2 — | 3 2 3 4 5 6 | 5 — 0 |
ド　　〃　　〃
3 4 5 6 7 6 | 5 — 4 — | 3 4 5 4 3 2 | 1 — 0 ‖
〃　　ソ　　〃

(二)教材「スナバ　ホリマセウ」の練習……一二回齊唱せしめてから意々第二歌詞に移ることにする。

初めは、例によつて自由に歌はせてみることにする。次に更めて一二回の範唱を示し、それから、一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては其れに旋律を當嵌め乍ら進めてゆく事にする。從來は第一節同樣に、生眞面目に旋律を附して一句一句の範唱を示したものであつたが、これこそ無駄なことである計りでなく、僅かに殘された活動の餘地さへも取上げたやうなもので、全く困つたものである。

子供達は與へられた歌詞に記憶を辿つて適當したる旋律を當嵌めながら進めてゆく……その適當に當嵌めるところに飽からぬ興味を感ずるやうで、まことに緊張したる授業を運んでゆくことが出來るやうである。歌詞は美しいがかなりに六ケ敷いから、本次に於いての仕上げは困難であらうと思ふ。焦る必要はない。適當な頃合をみてあつさりと切上げて置き、

(三)既習歌曲の練習……「かたつむり」を齊唱せしめて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　總　整　理

(一)教材「スナバ　ホリマセウ」の練習……禮を濟ますや、ダン〳〵と彈いてゆく……子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來る。第一歌詞は大丈夫であらうと思ふが、第二歌詞は旨くはゆくまいと思ふ。一二回練習してみても尙いけない樣であれば、さらに其の部分について練習を重ねて一通りの纏りをつけることにする。次に分唱獨唱によつて仕上げをなし、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

切離してならば無事に捌いてゆけるものでも、さて續けてみるとなか〳〵旨くゆかないものである。そこで、今度は第一歌詞の組と第二歌詞の二組に分け、相互に向ひ合つて相手方の口形に注目せしめながら同時に齊唱せしむることにする。

不安定な組は押されてしまい、全く混亂にまでもつてゆかれるのであるから、自分を護ることに一生懸命であゝ。かうして相互に練習を重ねてゆけば、ワイ〳〵といつてゐる間にすつかり纏つて來るものである。なほ合唱獨唱等によつて最後の仕上げをなす。

(二)既習歌曲の練習……「蛍」を輕く可愛らしく齊唱せしめて、愉快に晴やかに、本次の練習を終ることにする。

第二　朝顏の教授

一　教材及指導の要點

「朝顏」新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　三回　一時間半。

(二)速度　メトロノーム84を以て示してあるから、一つの歌を十七秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　ゆつたりと優しく。

第一段は靜かに曲を起してゆつたりと落着きを以て運んでゆき、

第二段はそのまゝ受けて稍々强め加減に押してゆき

第三段は强く受けて晴やかに歌ひあげ、後半二小節は謳聲に落して、ゆつたりと優さしく全曲を結ぶことにする。

(四)タクトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「スナバ　ホリマセウ」を愉快に齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 1 2 | 3 4 3 2 | 3 2 3 4 | 5 6 5 4 |
ド　　〃　　〃　　ソ
3 4 5 6 | 7 6 5 4 | 5 4 3 2 | 3 2 1 0 ‖
〃　　ソ　　〃

(三)教材「朝顏」の練習……この歌は發表せられてから二十餘年、殆んど知らないもののない位にまで普及せられてゐるものであるが、さて滿足に歌つてゐるものは極めて尠ないやうである。扨て、最初は例によつて極めて自由に非公式に、一二回齊唱させてみることにする。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめな

がら進めてゆくことはいつもの通りである。

第二回目は例によつて旋律及歌詞を隨時に省略し、それに適當に當嵌法を實施せしめながら進めてゆくことにする

この歌は一般に知られてゐる計りでなく、子供達も歌へるつもりでゐるものが多いだけに、なか〳〵厄介である。殊に第二段を滿足に歌へるものは至つて尠なく、大抵は第一段の旋律を其儘に繰りかへさうとする傾向があつて、なか〳〵に旨くゆかないものである。しかし、くどくなつてもいけないから、適當なところで切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「かたつむり」の歌を愉快に齊唱せしめて、本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……「スナバ　ホリマセウ」の歌を齊唱せしむることによつて學習氣分をあふり、本次の練習に這入る準備とする。一耳り歌はせて置いて途中から階名唱法に導入することにする。勿論旨くはゆかないが、大體の見當がつき少しでも合つてゐる部分があれば滿足することにしてグン〳〵と進めてゆくことにする。……一耳り引廻して置いて元の歌詞にかへして收めて置き、

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4|5 6 7 i|7 6 5 4|3 4 3 2|
ド　　ソ　　ど　　ミ
3 4 5 6|5 6 7 i|7 6 5 4|3 2 1—‖
〃　　ソ　　ど　　〃

(三)教材「朝顏」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達も氣持よく歌ひあげながら從いて來る。しかし第二段を受けるところが大抵は旨くゆかないものである。そこで今度は、

「毎朝毎朝、さく朝顏は」

「さく朝顏は、だんだんふえて」

と、いふやうな工合に「咲く朝顏は」を繰りかへさせることにする。次の句の「をととひ昨日と」は「咲く朝顏は」と同一の旋律を繰りかへしてゐる譯であるから、その繰り返しに充分に馴れさせて置いて「をととひきのふと」に取りかへてゆくやうにすれば、大した困難もなく謬めることが出來やうと思ふ。

それから、どうかすると附點がついて跳躍的にならうとする傾向もないではないから、充分に注意をして指導してほしいと思ふ。八分音符を以て疊んでゆくところに、ゆつたりとした一種の落ちついた、優しい氣分が味はれる譯であるが、跳躍的になつては全くぶち壞しになるのであるか

ら、この點は特に注意して取扱つてほしいと思ふ。

かうして二三回繰りかへしてゐる内には何とか謬るものである。さらに分唱獨唱によりて仕上げをなし、

(四)既習歌曲の練習……「鳩」を可愛らしく齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「かたつむり」を齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

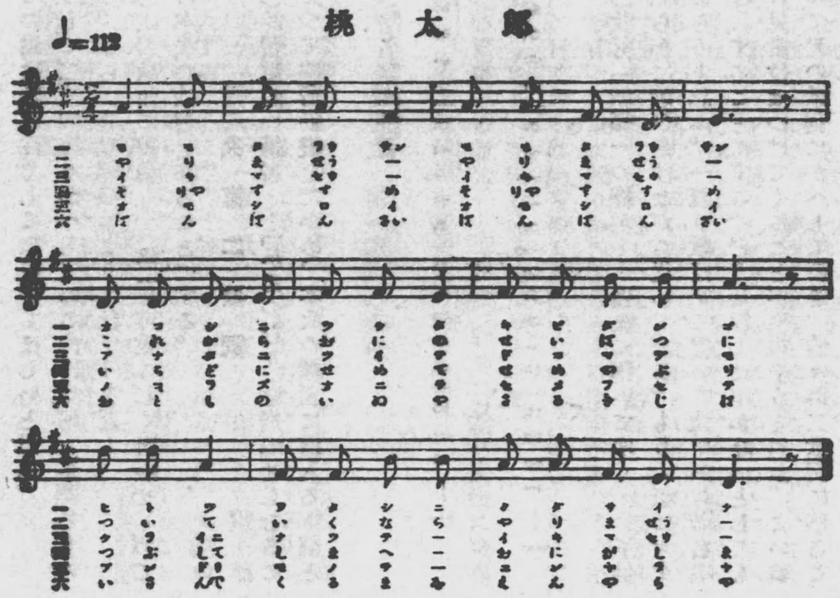
1 2 3 4 5|6 7 i|7 6|5 4 3 4 3|2 1 2—‖
ド　　ソ　　ど　　ミ
3 4 5 6 5|6 7 i|7 6|5 6 5 4 3|2 3 2 1—‖
〃　　ソ　　ど　　〃

(三)教材「朝顏」の練習……愉快に彈いてゆく……子供達も朗らかに歌ひあげながら從いて來る。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。一耳り歌はせて置いて途中から階名唱法に導入することにする。どうせ旨くはゆかないとしても大體の見當位はつけてくることが出來やうと思ふ。よい頃合をみて元の歌詞にかへして置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

例によつて、最初一、二回は極めて自由に歌はせてみることにする。次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を當嵌め、復唱せしめながら進めてゆくことにする。極めて平易な歌詞であり、しかも短かいものであるから二回も繰りかへせば、大抵は謬めることが出來やうと思ふ。

一通りの仕上げをなし、次には第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。多少の混亂はあらうとは思ふが、錯綜しさうな歌詞でもないから、少し練習を重ね歌詞の内容に注意を向ける餘裕が出來て來れば、混亂させる樣なこともなくなる譯である。更に分唱獨唱、それから例の第一歌詞と第二歌詞の併唱等によつて仕上げをなし、最後に一同起立し、晴やかに歌ひあげて本教材の練習を結ぶことにする。

桃太郎



一 桃太郎さん、桃太郎さん、
お腰につけた黍團子、
一つわたしに下さいな。

二 やりませう、やりませう、
これから鬼の征伐に
ついて行くならやりませう。

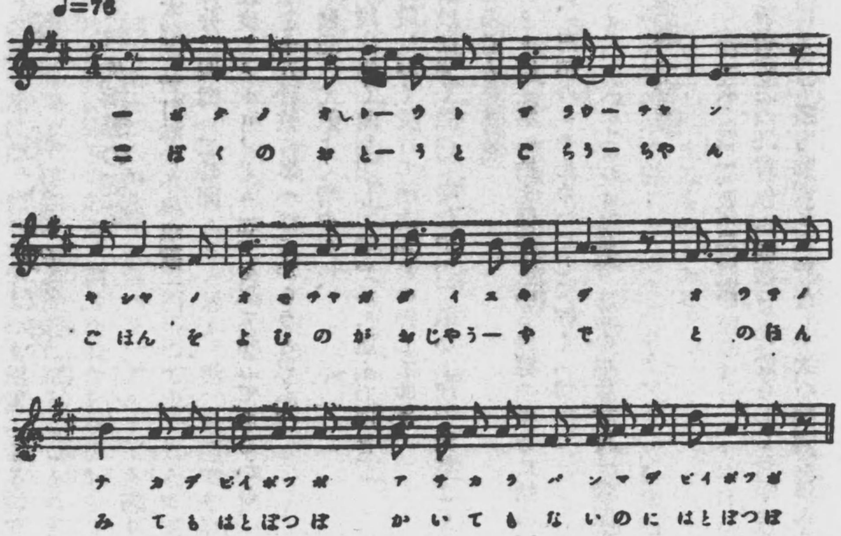
三 行きませう、行きませう、
あなたについて何處までも
家來になつて行きませう。

四 そりや進め、そりや進め、
一度に攻めて攻めやぶり、
つぶしてしまへ、鬼が島。

五 おもしろい、おもしろい、
のこらず鬼を攻めふせて、
分捕物をえんやらや。

六 萬萬歳、萬萬歳、
お伴の犬や猿雉子は、
勇んで車をえんやらや。

僕の弟



一 僕のおとうと五郎ちやん、
汽車のおもちやがだいすきで、
おうちの中でもぴいぽつぽ、
朝から晩までぴいぽつぽ。

二 僕のおとうと五郎ちやん、
御本よむのがお上手で、
どの本見ても鳩ぽつぽ、
書いてもないのに鳩ぽつぽ。

第一　桃太郎の教授

一　教材及指導の要點

「桃太郎」新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四同　二時間

(二)速度　メトロノーム 152 を以て示してあるから、一つの歌を十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)　發想　元氣よく晴やかに、

第一段は強く曲を起して晴やかに運んでゆき、

第二段は弱く受けて漸次強めに押してゆき、

第三段は強く受けて晴れやかに歌ひ上げ、元氣よく全曲を終ることにする。

四)タクトは、第一拍を受けて出る強聲の受方に始め、最後は、三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一、第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「朝顔」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に導入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 5 6 7 i | 7 — i — | 7 6 5 4 3 4 3 — 2 — |
ド　　ジ　　ジ　　ミ

3 4 5 6 7 i | 7 — 6 5 | 6 5 4 3 2 3 | 1 — ・ 0 ‖
ミ　　ジ　　ラ

(三)教材「桃太郎」の練習……この歌は隨分古くから、しかも、廣く歌はれてゐるものであるから、大抵の子供は知つてゐることであらうと思ふ。そこで、最初は極めて自由に思ひの儘歌はせてみることにする。

第一歌詞は何とか歌へるものが多いやうであるが、第二歌詞になれば隨分不安定になり、第三第四歌詞になれば愈々混亂狀態になる場合が多いやうである。しかし、子供達はまことに要領よく出來てゐるもので、すつかり分らなくなれば、何時ともなく、誰からとなく最初にかへつて來るものである。かうして何同でも得意になつて繰りかへしてゆくところが、何ともいへない可愛らしいものである。

かうして歌はせてゐる間に一通りの見定めをつけ、出來てゐる部分は其儘にして置き、指導を必要とする部分からの練習に導入することにする。

第一歌詞は大抵は大丈夫なものであるから、第二歌詞の

指導から始むればよからうと思ふ。これも範唱を示す必要もなければ、一句づつ從唱せしむるにも及ぶまいと思ふ。歌はせてゐる間に、必要に應じて補導を加へてゆけば大抵は纏めることが出來るものである。

(四)既習歌曲の練習……「スナバ ホリマセウ」を齊唱せしむることによつて氣分を纏め、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第三、第四歌詞

(一)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 4 3 2 |
ド　　ソ　　ド　　ミ

3 4 5 6 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 2 1 0 ‖
ミ　　ソ　　ド　　ミ

(二)教材「桃太郎」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供達は得意になつて從いてくる。第一第二歌詞は大抵は大丈夫であらうと思ふ。第二歌詞でやめて置く必要はない。ゆくところまで引張つてゆくことにする。然し、適當なところから元にかへり、グル〳〵と繰りかへすことは前同の通りである。適當な頃合をみはからつて切上げ、更めて第三、第四歌詞の練習に導入ることにする。

第三歌詞になれば、知らないものも相當にある譯であるから、其儘歌はせていつては何か分らないで、マゴ〳〵する子供も出て來ることになるから、今度は、歌詞を二三回讀んで聽かせて置き、それに曲節を附して歌はせることにすれば、大抵は纏めることが出來やうと思ふ。

(三)既習歌曲の練習……「朝顔」を齊唱せしむることによつて氣分を統一し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第五、第六歌詞

(一)既習歌曲の練習……「かたつむり」を晴やかに齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に導入る準備とする。

(二)教材「桃太郎」の練習……例によつてグン〳〵歌はせ乍ら彈いてゆく……適當な頃合をみて階名唱法に導入することにする。大して六ケ敷い音程が使つてあるといふ譯ではないから、正確にはゆかないとしても一通りは捌いてゆくことが出來やうと思ふ。一巡り引廻してから元の歌詞にかへして收めて置き、さらに第四歌詞までの纏りをつけ愈々第五歌詞の練習に導入ることにする。

最初は、前同同樣に一二回讀んで聽かせて充分に傾聽せしめ、次に曲節を附して歌はせながら進めてゆくことにする。

この歌に於ける難關は第四、五の兩歌詞である。これさ

へ旨く切り抜けてゆけば、第六歌詞は譯なく解決されるものであるから、この第五歌詞を充分に徹底せしむるやうに努めてほしいと思ふ。

なほ不安があるやうであれば、いつもの通りに、第五歌詞の組、第六歌詞の組の二組に分け、相互同時に併唱せしむることにする。殊に、兩組を向ひ合せにして、互に相手方の口形の運動に注目せしめながら歌はせることにすれば一層面白く効果的であるやうに思ふ。

不安定な組は確實味の多い組に引摺られてすつかり混亂に引込まれるのであるから、相方共、一生懸命に自己を護ると共に相手方の切崩しに乘り出す事から、どうかすると暴音、暴聲を張り上げるものであるから、この點は充分に警戒してかゝる必要があらうと思ふ。私のところではかうした暴聲は泣き聲と稱して敗者の悲鳴として待遇することにしてゐるから、彼等もこの悲鳴？ に陷入らないやうに充分に注意してゐるやうである。兎に角、かうしてゐる間に、一通りの譜りはつかうと思ふ。然し、くどくなつてはいけない。仕上げは次回にゆづり適當なる頃合をみてあつさりと切上げ、

(三)既習歌曲の練習 ……「朝顔」を晴やかに齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次 總整理……方法省略

第二 僕の弟の教授

一 教材及指導の要點

「僕の弟」新訂尋常小學唱歌一

(一)區分 四回 二時間

(二)速度 メトロノーム76を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想 可愛らしく、ゆつたりと、

第一段は輕く曲を起して、靜かに、ゆつたりと運んでゆき、

第二段は稍弱めに受けて晴れやかに歌ひあげ、

第三段は「オウチノナカデ」又は「アサカラバンマデ」を張く明瞭に取扱ひ、「ピーポッポ」は極く弱聲に、輕快に取扱ふことにする。

(四)タクトは、最初の半拍を避けて歌ひ出すところの一拍半の受方に始め、最後は二拍或は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二 指導の實際

第一次 第一 歌詞

(一)既習歌曲の練習 ……「桃太郎」を晴やかに齊唱せしむることによつて、唱歌氣分をあふり、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名讀譜練習

1 2 3 2|3 4 5 3 2|3 4 5 6|5 6 7 i|
ド ミ ミ ミ

7 i 7 6|5 6 5 4|3 4 3 2|3 2 1—||
ヤ ソ ミ ミ

(三)教材「僕の弟」の練習……この曲は發表せられてから、まだ間もないことであるから、知つてゐる子供は尠からうと思ふ。兎に角、一二回極めて自由に彈いて聽かせて大體の輪廓を示して置き、それから更めて範唱を與へ、次に一句づつ後唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の半拍を避けて出るところ、それから第二小節目の「ラ|ドシラソ」が、なか〳〵に旨くゆかず、大抵は「ラド|ラソミ」にならうとする傾向があり、

第二段第三小節「ドードララソー」が「ドードシラソー」等にならうとする傾向があるので、これ等は前以て心得て置く必要があらうと思ふ。

しかし、何といつても一番六ケ敷いのは半拍を避けて出るところの最初の歌ひ出しである。この個での指導では、どうしても旨くゆかない樣な場合には、避ける半拍の代りに何かを欲めてゆけば宜敷い譯で、そうすれば譯なく解決せられてゆくのである。しかし、これは最後の手段、出來たらば、出來るならば、なるべく手段を用ひないで捌いてゆくことにしたいものだと考へてゐる。餘りに世話のとゞくものは力をつける所以ではない。年寄の子と金持の子供が役にたゝないといふのは、かうした消息を物語つて居るものだと思ふ。しかし、旨くゆかなければ仕方がない。

それは、ポンと打込む、タクトの音を聽いたのをきつかけに歌ひ出すのも一つの方法、しかし、それよりも、

「ポン、僕の弟五郎ちやん……」

と、「ポン」を各自唱へてそれをきつかけに歌ひ出すことにする。或は一番の歌詞であるから、

「一、僕の弟五郎ちやん……」

と、受けるのもよからうと思ふ。兎に角、どちらにしても、最初は大きく明瞭に唱へしめ、次には小聲で、次には口の中に於て、次には心の內で……と、いふやうな墮梅に導いてゆけば大した困難はなからうと思ふ。

第一回は叮嚀に一句〳〵の範唱を示しては導いてゆくことにするが、第二回目からは例の幾尾式常歌法によりて進めてゆく事にする。それは、ある部分を曲だけを聽かせて歌詞を省略し、歌詞だけを聽かせて旋律を省き、それに適當した歌詞或は旋律を當嵌め挿入してゆくのである。子供たちは前からの關係から推し、記憶を辿つて適當と信ずるものを當嵌めてゆくところに、多大の興味を感じ、たゞたゞ教師の範唱を其儘に模唱し繰りかへしてゆくやうな倦怠がなく、面白く、しかも活潑的に進めてゆく事が出來るやうである。しかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから適當なところであつさりと切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「朝顔」を愉快に齊唱せしめて、晴やかに本次の練習を終る事にする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……「スナペホリマセウ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 1 | 2 3 4 3 2 | 3 4 5 6 5 | 6 5 6 7 i |
ド　　レ　　ミ　　ラ

i 7 6 5 6 | 6 5 4 3 2 | 3 4 5 6 5 | 4 3 2 1 ||
ド　　ラ　　ミ　　ラ

(三)旋律誘導練習……これは旋律の動きに對して、識らず〳〵の間にこれを會得せしめやうといふのである。これが要するに作曲の萌芽ともなるべきものである。

これは階名を用ひても、歌詞を用ひても宜敷い。しかし階名では何音位先まで、つづけてよろしいか、始めは見當がつき憎いものであるから、馴れるまで歌詞による方がよからうと思ふ。例へば、

5 6 5 3 | 1 · · · | 5 6 5 3 | 2 · · · |
サクラガ　サイタ　　サクラガ　サイタ

と、いふやうな工合に、子供達の興味をひきさうな言葉に適當に旋律を附しては指導してゆくのである。すなはちある部分の旋律を消して歌詞だけを聽かせて置いて、これを從唱させるのである。最初は旨くゆかないものであるが少しく馴れてくると、大體適當な旋律を當嵌めて謳めて來るやうになる、なか〳〵馬鹿に出來ないものである。かなりに子供達の興味をひき、効果も尠くないやうである。

(四)教材「僕の弟」の練習……一二回齊唱せしむることにする。最初の受方がまだ旨くは出來まいと思ふ。しかし例の、

「イチ、僕の弟五郎ちやん……」

を、一二回やらせてみることにする。それから「イチ」を漸次小聲に導き、心の裡に押込むやうにすれば、今次こそはハツキリと會得することが出來やうと思ふ。なほ、分唱、獨唱等によつて充分に聽まりをつけることにする。

(五)既習歌曲の練習……「桃太郎」を晴やかに齊唱せしむることによつて氣分を調め、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)階名翻譯練習

1 2 3 2 3 4 | 3 3 3 | 3 4 5 6 5 6 5 4 | 3 3 3 |
ド　　レ　　ミ　　ラ

1 7 6 5 6 | 5 4 3 2 | 3 4 5 6 5 4 | 3 2 1 ||
ド　　ソ　　ミ　　ド

(二)旋律誘導練習

(三)教材「僕の弟」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來る。不充分な點には指導を加へ、間違つてゐるところには訂正を施して意々第二歌詞に移ることにする。

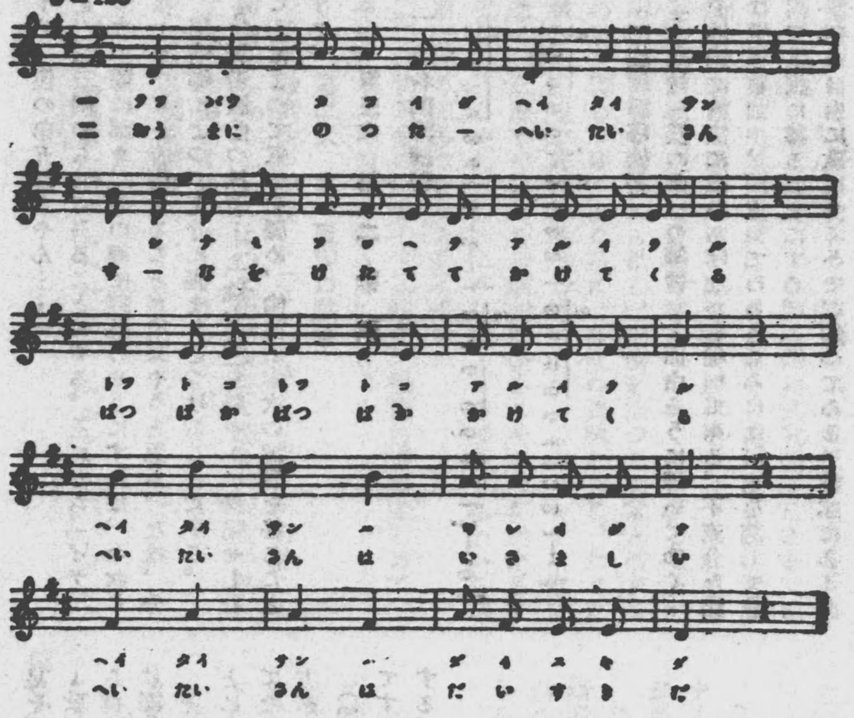
最初は自由に歌はせてみて、知つてゐる子供達にある滿足を與へて置き、それから更めて範唱を示し、次に一句づゝ歌詞を聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。大抵二回も繰りかへせば一通りは謳めることが出來やうと思ふ。

そこで、今度は、第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。何でもないやうであるが、兩歌詞が混亂錯綜してなか〳〵旨くゆかないものである。しかし、焦つても仕方がないから、あつさり切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「桃太郎」を高らかに齊唱せしめてすつかり氣分を直し、朗らかに本次の練習を終ることにする。

兵隊さん

♩=120

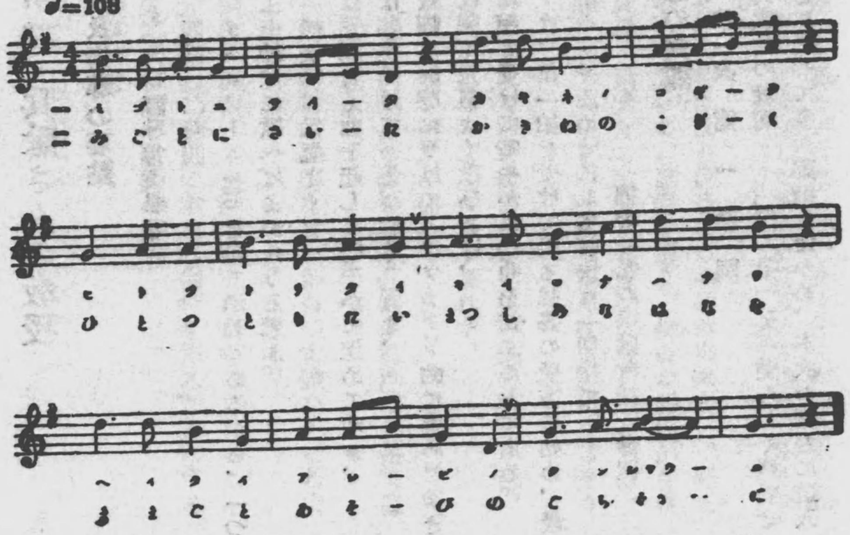


一 鐵砲かついだ兵隊さん、
足並そろへて
歩いてる。
とつとことつとこ
歩いてる。
兵隊さん
きれいだな。
兵隊さんは
大すきだ。

二 お馬に乘つた兵隊さん、
砂を蹴立てて
かけて來る。
ぱつぱかぱつぱか
かけてくる。
兵隊さんは
勇ましい。
兵隊さんは
大すきだ。

菊の花

♩=108



一 見事に咲いた
かきねの小菊、
一つ取りたい、
黄色な花を、
兵隊遊の勳章に。

二 見事に咲いた
垣根の小菊、
一つ取りたい、
眞白な花を、
飯事遊の御馳走に。

第一　兵隊さんの教授

一　教材及指導の要點

「兵隊さん」新訂尋常小學唱一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム 120 を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕快に、元氣よく、

第一段は元氣よく曲を起して晴やかに進めてゆき、

第二段は其儘受けて一先づ收めて置き、

第三段は輕く弱聲に受けてスタカート的に進めてゆき

第四段は強く元氣よく歌ひあげ、

第五段は輕く受けて晴やかに全曲を結ぶことにする。

(四)タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕快に「切捨て」

摘書「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「僕の弟」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 3 4 | 3—2— | 3 4 5 6 5 6 | 7—i— |
ド　　ミ　　ミ　　ド

7 i 7 6 5 6 | 5—4 3 | 5 6 5 4 3 2 | 1—0 ‖
ド　　ソ　　ソ　　ド

(三)教材「兵隊さん」の練習……この歌は隨分歌はれてゐる歌である。しかし、發表せられてから、まだ間もないものであるから、知つてゐるものは尠ないかも知れない。兎に角、最初は思ひのまゝに歌はせてみることにする。

一通り歌はせて置いて、更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

第一回は普通の樣に引張つてゆき、第二回目からは例によつて挿入式によつて指導を進めてゆく事にする。例へば

1　3 | 5 5 3 3 | 1 5 | 5 0 |
チャンポン

6 6 6 5 | 3 3 2 1 | • • • • | • • ‖
ヤ　　ヤ　　ヤ　　ヤ

と、いふやうな工合に、音を聽かせて歌詞を除く場合には、その除かれた部分に適當な詞を當嵌めてゆき、歌詞を聽かせて旋律を除かれた場合には、その旋律を當嵌めて進

めてゆき、兩方を聽かされないで、たゞ拍子だけを示された場合には、それに適當した歌曲を當嵌めて進めてゆくやうにするのである。

この方法を採る時には子供達には油斷が出來ない。絶えず注意を引緊めて置いて、記憶を辿り、前後の關係からみて適當なる旋律、適當なる歌詞を挿入してゆくところに、尠からぬ興味を持ち緊張をつゞけてゆくことが出來るやうである。

何でもないやうなものではあるが、第一段の第三小節、「ドソ」が「ドミ」になつて「ソ」に上り切れず、

第三段の第一小節、第二小節の「ミーレレ」が「ミーレド」にならうとする傾向があるから、これ等は前以て心得て置く必要があらうと思ふ。

兎に角、一回で纏める必要はないから、大體のところで滿足することにしてあつさりと切上げて置き、

(四)既習歌曲の練習……「桃太郎」を齊唱せしむることによつて氣分を直し、愉快に本次の練習を終ることにする

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 2 3 3 | 4 4 3 2 | 3 4 5 5 | 6 6 5 5 |
ド　　ファ　　ミ

6 7 i i | 7 7 6 6 | 5 6 5 4 | 3 2 1— ‖
ソ　　ド　　ソ　　ミ

同音を並べて唱へることは、何でもないやうに思へるが始めての子供達にはかなりに六ケ敷く、なか〳〵に思ふやうにはゆかないものである。しかし、諦くなつてはいけない。適當なところで切上げて、

(二)既習歌曲の練習……「スナメホリマセウ」を愉快に齊唱せしむることによつて氣分を直し、

(三)教材「兵隊さん」の練習……例によつて面白さうに彈いてゆく……子供達は、愉快に歌ひあげながら從いて來る。前にも述べたやうな誤りはあらうと思ふ。そこで、例の挿入式によつて一二回練り直してみることにする。元々大して六ケ敷い歌でもないから、大抵は纏めることが出來やうと思ふ。

なほ、分唱、獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合をみて朗らかに齊唱せしめ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「桃太郎」を愉快に齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に這入る準備とする。一通り引廻して置いて途中から階名唱法に導入

する事にする。どうせ旨くゆく筈はない。子供達は思ひの儘に歌つて來る。或は正確味三分誤り七分かも知れない。そんな時に詰らない調、不滿さうな態度をみせてはいけない。朗らかにグン〳〵と引張つてゆくやうにする。

かうして、旋律に階名を當嵌めるやうな習慣をつけて置けば、子供達の環境にあるすべての音、すべての旋律が知らず〳〵の間に練習教材となつて彼等と交渉を持つことになるのであるから、教室内の仕事が彼等の生活に織り込まれて來ることになる譯である。從つて其影響するところも尠くないのである。……適當なところで元の歌詞にかへして收めて置き、

(二)教材「兵隊さん」の練習……一二回齊唱せしめてみることにする。なほ、不充分な點には訂正を試み指導を施して愈々第二歌詞に這入ることにする。

最初は例によつて、子供達の自由に歌はせてみることにする。次に一回の範唱を示し、それから、一句づゝ歌詞を讀んで聽かせてはそれに旋律を附して從唱せしめながら進めてゆくことにする。もう旋律は出來てゐるからこれを授ける必要はない、新しい歌にどういふ工合に旋律を當嵌めてゆくかに彼等相當の工夫が殘されてゐる譯である。常に彼等子供達のために、幾分でも工夫活動の餘地を殘して置くことは、教授者、指導者として心得べき最も大切なことだと信じてゐる。

大して六ケ敷い歌詞でもないから、二三回も繰りかへせば、大抵は片づけることが出來やうと思ふ。さらに、分唱によつて讀りをつけ、次に第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

第二歌詞だけ歌はせて置けば何でもなかつたやうなものだが、第一歌詞から續けてみると双方の歌詞が混亂してどうも旨くゆかない。殊に、第四段、第五段に至つては、勝手なことをいつてゐるかのやうにさへ思へる位である。しかし、これは無理からぬこと、仕上げは次回にゆづり、

(三)既習歌曲の練習……「僕の弟」を可愛らしく齊唱せしむることによつて氣分を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　總　整　理

(一)既習歌曲の練習……「桃太郎」を元氣よく齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に移る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 1 2 3 3 | 2 2 3 4 4 | 3 3 4 5 5 | 6 6 6 5 |
ド　　ソ　　ミ　　ラ

6 6 7 i i | i 7 7 6 6 | 5 6 5 4 4 | 3 2 2 1 |
ラ　　ド　　ソ　　ミ

(三)教材「兵隊さん」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。しかし、第一第二歌詞の錯綜は前次の通りである。

そこで、今度は、第一、第二歌詞を分けて一通り練習して置き、それから、いつもの通りに、第一歌詞、第二歌詞の兩組に分け、これを同時に併唱させることにする。次には、兩組を向き合せ、各自相手方の口形の運動に注目せしめながら進めてゆくことにする。

不安定なものは相手方の口形に引摺られて自分の持場が分らなくなり、すつかり混亂にクタキ落される。自分の持場を護り、敵を混亂に導くべき努力によつてハツキリと其歌詞を記憶することが出來るのである。

かうして交互持場を取替へて練習を進めてゆけば、面白くワイ〳〵といつてゐる間に充分に徹底せしむることが出來るのである。なほ分唱獨唱等によつて讀りをつけ、適當な頃合をみて一同起立し、心ゆく計りに歌ひあげて本教材を結ぶことにする。

第二　菊の花の教授

一　教材及指導の要點

「菊の花」　新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム 108 を以て示してあるから、一つの歌を二十八秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく、ゆつたりと、

第一段は晴やかに曲を起して、ゆつたりと疊んでゆき、

第二段は弱聲に受けて漸次强めに押してゆき、

第三段は强聲に受けて漸次力を拔き、ゆつたりと可愛らしく全曲を終ることにする。

(四)クトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして靜かに「流す」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を元氣よく齊唱せしむることによつて學習氣分をつくり、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 3 | 3 4 4 | 3 — 2 — | 3 4 5 5 | 6 6 6 | 5 — 0 |
ド　　ミ　　ソ

6 7 i | 1 7 6 | 5 — 6 — | 5 5 4 4 3 2 | 1 — • 0 ‖
ラ　　ソ　　ソ

(三)教材「菊の花」の練習……この歌は隨分古くから歌はれてゐるものであるから、大抵な子供は知つてゐる譯ではあるが、滿足に歌へるものは極めて尠なく、歌へるとしても、全くの新教材に接する以上の苦心と骨折を要するのが普通の狀態である。兎に角、最初の一回は、例によつて子供達の自由に思ひの儘に歌はせてみることにする。

第一段の第二小節「ソーソラソ」と下の「ソ」を受けるところが、なか〳〵に旨くゆかず、第二段の第三小節「レーレミファ」の「ファ」音が明瞭を缺いで「レーレミミ」等にならうとする傾向のある事は、その主なるものであらう。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。前に述べた二ケ所は、一回や二回の訂正ではなか〳〵に直るものではない。しかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから、詰くならない程度に切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「桃太郎」を愉快に齊唱せしむることによつて機嫌を直し、朗らかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名調譜練習

1 8 5 i | 7 7 6 5 | 6 6 5 4 | 3 4 3 2 |
ド　　シ　　ラ　　ミ

8 4 5 6 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 2 1 — ‖
ミ　　ソ　　シ　　ミ

(二)教材「菊の花」の練習……グン〳〵と彈いてゆく……子供達は一生懸命に歌ひあげながら從いて來る。しかしどうも旨くゆかない。殊に第一段の第二小節は最も六ケ敷いやうである。どうしても旨くゆかないやうであれば、例の歌詞の入替へによつて進めてゆくことにする。例へば、

「ミーゴトニ、サイータ」
「モースコシ、サゲーテ」
「マーダサガラナーイ」
「ドーヤラ、デキータ」
「ヨークデキマシータ」
「ミーゴトニ、デキータ」
「ミーゴトニ、サイータ」

と、いふやうな工合に、いろ〳〵に取替へて子供達の感興をひきつけて置き、何回も何回も繰りかへしてゐる間に何とか纏つて來るものである。

さらに、分唱獨唱等によつて仕上げをなし適當な頃合を

みて、一同を齊唱せしむることにする。

(三)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を高らかに齊唱せしむることによつて氣分を新たにし、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「僕の弟」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をつくり、本次の練習に導入る準備とする。

一通り歌はせて置いて、途中から階名唱法に導入することにする。隨分六ケ敷いものであるから、どうせ旨く捌けるものではない。勝手といつては語弊があるが、そこは適當に捌かせて置けば宜敷い譯で、一通り引廻してゐる間に多少でも見當をつけることが出來れば、それで滿足することにして、元の歌詞にかへして收めて置き、

(二)教材「菊の花」の練習……一二回歌はせてみる。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。そこで今度は愈々第二歌詞に導入ることにする。

知つてゐる子供も澤山あらうと思ふから、最初は自由に歌はせてみることにする。次に一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を當嵌めながら、進めてゆくことにする。前半は同一歌詞を共儘繰りかへす譯であるから、二回も繰りかへせば大抵は片づけることが出來やうと思ふ。

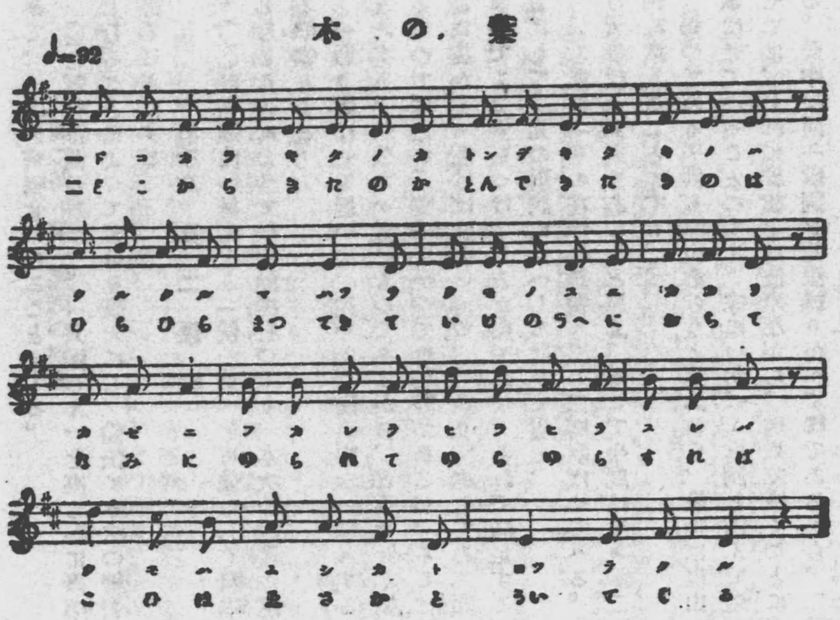
そこで、今度は第一歌詞から續けて歌はせてみることにする。たゞ後半が僅かに違つてゐる計りであるから、何でもないやうなものではあるが、これがなか〳〵厄介なもので、反つて錯綜し混亂を來たし、まことに思ふやうにゆかないものである。しかし、これは內容から區別して導入つてゆけば大した困難はないやうである。例へば

「兵隊さんの勳章は白いか黃色いか」
「御馳走の御飯は……？」

と、いふやうな工合に導いてゆけば、譯なく捌いてゆくことが出來やうと思ふ。仕上は次回にゆづり適當なところを見計つて、

(三)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を元氣よく齊唱せしめて愉快に本次を終ることにする。

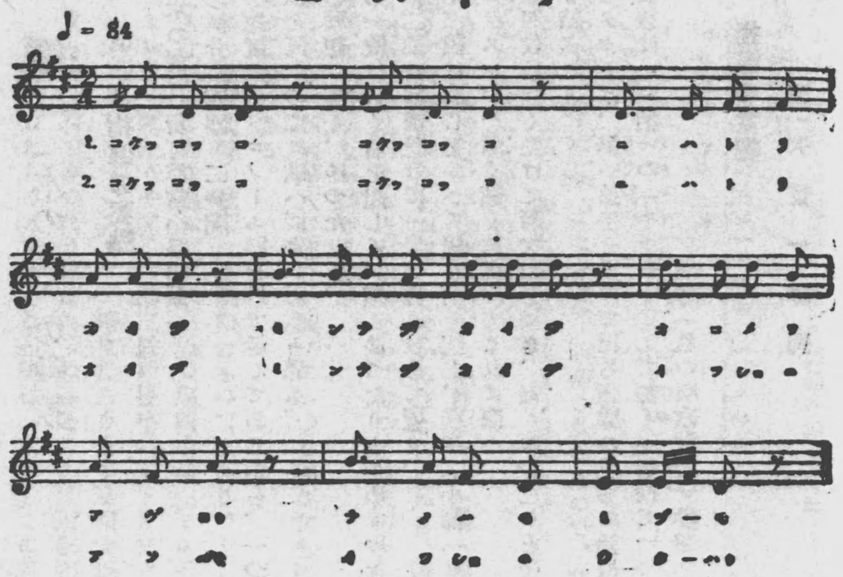
木の葉



一　何處から來たのか、飛んで來た木の葉、
　くるくるまはつて、蜘蛛の巣にかかり、
　風に吹かれて、ひらひらすれば、
　蜘蛛は蟲かと寄つて來る。

二　何處から來たのか、飛んで來た木の葉、
　ひらひら舞つて來て、池の上にぢちて、
　波にゆられて、ゆらゆらすれば、
　鯉は餌かと浮いて來る。

ニハトリ



一　コケッコッコ、
　コケッコッコ、
　ニハトリ　オイデ、
　ミンナデ　オイデ、
　オ米ヲ　アゲヨウ、
　ナノハモ　水モ。

二　コケッコッコ、
　コケッコッコ、
　ニハトリ　オイデ、
　ミンナデ　オイデ、
　一ショニ　アソバウ、
　一ショニ　ウタハウ。

第一　「木の葉」の教授

一　教材及指導の要點

「木の葉」新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム92を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕く、ゆつたりと、

第一段は弱く曲を起して、輕くゆつたりと進めてゆき、

第二段は其儘受けて一先づ輕く收めて置き、

第三段は感じをかへて強く曲を起し、後半二小節「ヒラヒラスレバ」弱く輕く取扱つてこれに應へ、

第四段は強く受けて漸次力を拔き、輕くゆつたりと全曲を結ぶことにする。

(四)ククトは、第一拍子を受けて出る强聲の受方に始め、最後は「三拍」の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習　「菊の花」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 i 7 | 7 6 7 6 5 | 6 6 5 4 3 | 3 3 4 3 2 |
ド　　ヤ　　ラ　　ミ

3 4 5 6 5 | 5 6 7 i 7 | i 7 6 5 4 | 3 2 3 1 ||
ミ　　ソ　　ド　　ミ

(三)教材「木の葉」の練習……この歌は二十餘年の以前から隨分古く、又廣く歌はれて來てゐるものである。しかし、滿足に歌はれてゐるものは極めて尠く、大抵は適當に片づけられてゐる場合が多いやうである。兎に角、多少でも知つてゐる子供が多からうと思ふから、最初は極めて自由に、彼等の思ひのまゝに歌はせてみることにする。一通り謳つてゐれば、其儘仕上げにかゝつても宜敷い譯であるがなか〳〵さう簡單にはゆかない場合が多いやうである。

そこで、今度は更めて範唱を示して大體の輪廓を與へて置き、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初は、其儘の範唱によつて導いてゆき、第二回目から

は例によつて挿入當歌法によつて指導を進めてゆくことにする。例へば、

5 5 3 3 | 2 2 1 2 | 3 3 2 1 | 3 2 2 0 |
ドミから　キラノ　ス

• • • • | • • • • | 2 2 2 1 2 | 3 3 1 0 |
ラ　ス　ク　ス　イ　ン　ヲ　ク

點を以て示してあるところは、省略されたもので、其場所は子供達の方で、適當な旋律、適當な歌詞を挿入し、當歌めながら謳めてゆくのである。

かうしてゆけば、子供達の方でも油斷が出來ない。記憶を辿り、前後の關係を考慮してゆかねばならぬから、聊かでも緊張をゆるめることが出來ない。從つて倦怠がないから時間に無駄がない譯である。

かうして、漸次挿入の部分を擴げていつて獨り立ちに導いてゆくのである。

大體の節、大體の歌詞は全調染のものではあり、大したこともなからうとは思ふが、第二段の第四小節「ミミド」が「ミレド」になりやすく、第三段の後半「ドドソソ、ララソ」が「ドドシラ、ソラソ」等にならうとする傾向があり、又八分音符でゆつたり運ばれてゐるところに附點がついて、跳躍的になつては、ゆつたりとした氣分がなくなつて、すつかり感じが變つて來るので殊に注意して取扱つやうにゆかないものである。しかし、謳くなつてもいけないから、あつさりと切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を元氣よく齊唱せしむることによつて機緣を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を元氣よく齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の學習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 i 7 7 | 6 — 5 — | 6 6 5 4 3 4 | 3 — 2 — |
ド　　ラ　　ミ

3 4 5 6 7 i | 7 — 6 — | 7 i 7 6 5 4 | 3 2 1 0 ||
ミ　　ヤ　　ミ

(三)教材「木の葉」の練習……例によつて面白さうに彈いてゆく……子供達は愉快に歌ひながら從いて來る。しかし、前述の第二段と第三段、それから八分音符で畳んでゆくところがなか〳〵に旨くゆかない。この八分音符に附點がついて跳躍的になつては、ゆつたりとした氣分がなくなつて、すつかり感じが變つて來るので殊に注意して取扱つ

てほしいと思ふ。

第二段、第三段の難所も、二三回指導を繰りかへせば何とか謳めることも出來やうとは思ふが、若しも旨くゆかないやうであれば例によつて歌詞の取替式によつて變化をつけ面白く進めてゆくことにする。例へば、

「クーモノスニ、カカリ……」
「クーモノイトニ、カカリ……」
「カカリ、カカリ、クーモノスニカカリ……」
「デキタ、デキタ、ドーヤラデキタ……」
「大變上手に出來た……」
「クーモノスニ、カカリ……」

と、いふやうな工合に、歌詞を面白く取替へてゆけば、子供達は其變化につられて、何回も何回も面白く繰りかへしてゆくのであるから、大した苦勞をせずに、知らず〳〵の間に謳つてゆくものである。……第三段の方も旨くゆかないやうであれば、かうして片づけてゆけば譯なく謳めることが出來やうと思ふ。

一通り出來れば、分唱獨唱等によつてさらに仕上をなし

(四)既習歌曲の練習……「菊の花」を可愛らしく齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)旋律の誘導練習……これはある旋律の一部分を示して、それに續く旋律をつけさせる方法である。これは階名を用ひても、子供達の興味を引きさうな言葉でも、文章でもよからうと思ふ。例へば、

1 3 • • | 6 6 • • |
ド ミ　　ラ ラ

「ドミ••」と點のところは手拍子かなにかで、音だけを「ポン〳〵」と聽かせて置いて歌はせてみると、子供達は、「ドミソソ」又は「ドミソラ」「ドミソミ」等と勝手につける。「モー一回〳〵」と何回も繰りかへしてみると、何かに謳つて來るから面白いものである。又歌詞による場合には

1 3 5 6 | • • • • |
ミ ド リ ガ ナ イ タ

といふやうな工合にすると子供達は、

1 3 5 6 | 5 6 3 0 |
ミ ド リ ガ ナ イ タ
1 3 5 6 | 5 3 2 0 |
ミ ド リ ガ ナ イ タ

といふやうな工合に、いろ〳〵に受けて來るものである。かうした練習を一分でも二分間でも、少しづゝでも加へて置けば、子供達は知らず〳〵の間に於て旋律の動きといふものに、關心を持つやうになり、やがては讀譜を助け、

作曲の萌芽ともなる譯である。ながい時間は要らない。二分もあれば結構である。

(二)教材「木の葉」の練習……一二回齊唱せしめてみることにする。大抵は出來てゐやうと思ふ。そこで、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初一二回は極めて自由に歌はせてみることにする。第二歌詞の歌へるものは制に尠ないものである。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ讀んで聽かせては、それに旋律を附しては從唱せしめながら進めてゆくことにする。

旋律は出來てゐるから、こゝでは提供する必要はない。新しい要求だけを充たしてやれば澤山である。それを如何に取合せ、如何に取扱つてゆくべきかは、子供達の工夫に任せて置くべきものである。かうして、幾分づゝでも、子供達の活動の餘地、工夫の場所を殘して置くことは、私共指導者の常に考へて置くべきことであらうと思ふ。

三回も繰りかへせば、大抵は片づけることが出來やうと思ふ。そこで、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

最初が同一歌詞を以て初められてゐる關係から、どうも混亂して始末が悪い。しかも、どういふ風に混亂し、錯綜してみても、意味としてはどうにか通ずるので一層始末が悪いのである。しかし、焦つても仕方がないから、適當なところで切上げて、

(三)既習歌曲の練習……「僕の弟」を可愛らしく齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　總　整　理

(一)階名翻譯練習

1 3 5 i | 7 7 6 5 | 6 6 5 4 | 3 4 3 2 |
ド　　ジ　　ラ　　ミ

3 4 5 6 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 2 1 0 |
ミ　　ソ　　ゾ　　ミ

(二)教材「木の葉」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。しかし、第一歌詞と第二歌詞との混亂はどうにも旨くゆかないやうである。

そこで、今度は第一歌詞の組、第二歌詞の組に分け、お互に向ひ合つて、口形の運動に注目せしめながら、同時に併唱せしむることにする。

不安定な者は、確實味の多い者に引摺られて愈々混亂につき落され、どうにも收拾の出來ないまでになる譯である

から、自分の立場を護り、人に犯されない計りでなく、なほ進んで攻撃的にまで、乗り出すことに於て一生懸命である。かうして、交互に取かへて練習してゐる間にいつとなく調つて來るものである。

しかし、この方法は餘程注意を拂はないと餘りに一生懸命になるために、自己の統制を失ひ、暴聲に陷ることである。私のところでは、この暴聲を悲鳴といつてゐる。悲鳴は弱者の聲、しかも弱者の最後の聲として、退敗すべきもの、中止すべきものだとしてゐる。そこで自己の統制を保ち、堂々と一絲亂れずやつてのけるものでなければならぬ譯である。そこに、子供達の努力と苦心がある譯である。

一通り調つたところをみて、さらに分唱獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合をみて一同起立し、氣持よく齊唱せしめて本次の練習を終ることにする。

第二　「ニハトリ」の教授

一　教材及指導の要點

「ニハトリ」　小學新唱歌一

(一)區分　四同　二時間

(二)速度　メトロノーム84を以て示してあるから、一つの歌を十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)表現　可愛らしく、

第一段の「コケツコツコ〳〵」は明瞭に弱く取扱ひ「ニハトリオイデ」から漸次強めに歌ひあげてゆき「ミンナデオイデ、オコメヲアゲヨウ」は高く強聲に歌ひあげ「ナノハモミヅモ」は輕く受けて可愛らしく全曲を終ることにする。

(四)タクトは、第一拍を受ける強聲の受方に始め、最後は二拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一　歌詞

(一)既習歌曲の練習……「木の葉」を可愛らしく齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 6|5 5 5 5|6 6 7 7|i i i—|
F　　ソ　　ラ　　F

i i 7 7|6 7 6 6|5 4 3 2|1 1 1—|
F　　ラ　　ソ　　F

(三)教材「ニハトリ」の練習……この歌はあまり歌はれてゐないやうであるから、知つてゐる子供は尠からうと思ふ。或は一人もゐないかとさへ思ふ位である。例によつて

最初一二同は自由に、極めて氣楽に彈いて聽かせてみることにする。

かうして大體の輪廓を示して置き、それから更めて範唱を與へ、次に一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

大して六ケ敷い曲ではないが、「コケツコツコ」が、どうかすると「コツケコツコ」等になり、又第二段の第二小節「ラーララソ」が、大抵は「ラーラソソ」になつて「ラ」の音を保つことが、かなりに六ケ敷いやうであるから、何でもないやうではあるが、心得て置く必要があらうと思ふ。最初一同は其儘に模唱せしめながら引張つてゆき、第二同目からは例によつて挿入當歌法によつて指導を進めてゆくことにする。

かうして漸次挿入の部分を多くしてゆけば、獨立して歌へる迄に進めることは、大した困難はなからうと思ふ。しかし詩くなつてはいけない、あつさりと切りあげて心機一轉、

(四)旋律の指導練習……前同までは同一歌詞の音を並べる計りであつたが、今度は歌詞に變化をつけて歌はせてみることにする。例へば、

5 3 6 5|・・・・0|

この時の八分音符は半拍づゝに叩き込んでやらないと分り悪い。階名を用ひても宜敷いが、これでは答へる方で困難があらうと思ふから、適當な言葉を用ひたら一入面白くゆくであらうと思ふ。例へば「靜かになさい」とか「お話やめて」とか「よく出來ました」等とやれば、子供達はすつかり得意になつて喰ひ入つて來るものである。其の方法は前にも述べた通りに最初

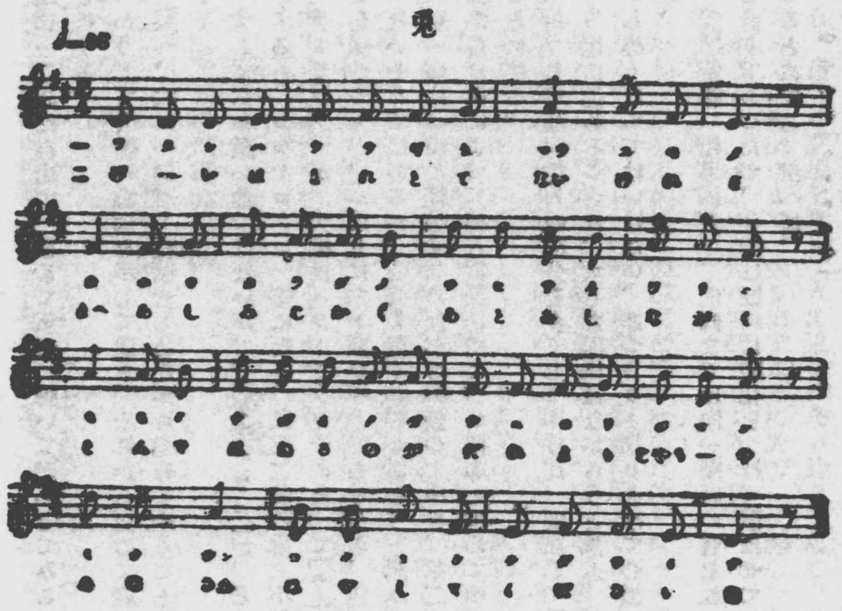
5 3 6 5|・・・・0|と叩けば

5 3 6 5|2 3 4 3 0|又は

5 3 6 5|2 3 2 1 0|等と思ひ〳〵に受けて出るものである。これもくどくなつてはいけない。ワイ〳〵といつて喜んでゐる間にさつと切上げて、

(五)既習歌曲の練習……「兵隊さん」を元氣よく齊唱せしめて朗らかに本次の練習を終ることにする。

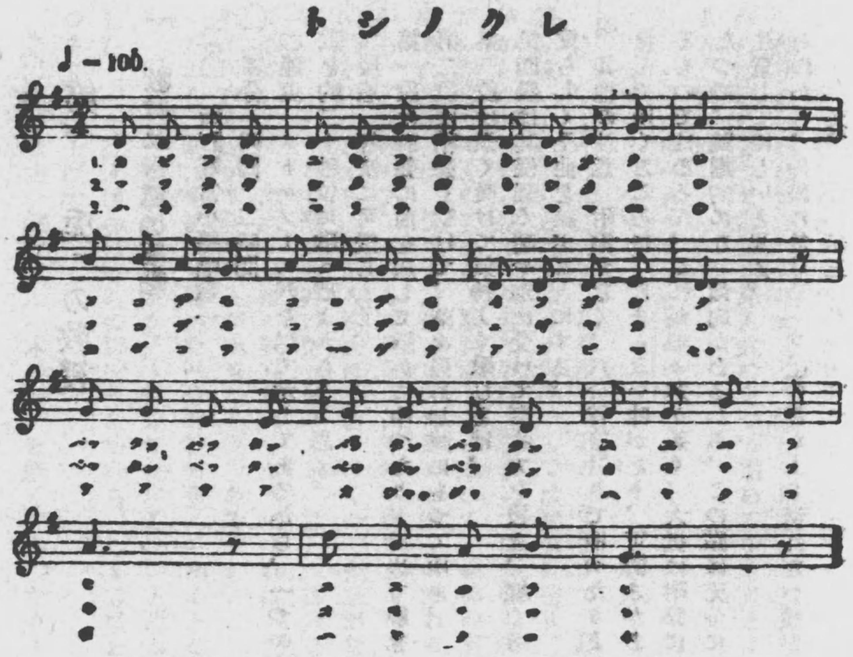
(以下省略)



兎

一　私は兎と申すもの、
　顔や體の小さい割に、
　耳の長いのが何より自慢。
　皆さんよく見て下さいな。

二　藪はこれとてないけれど、
　前脚短く後脚長く、
　飛んで跳ねるのが誰より上手。
　皆さん嗤して下さいな。



としのくれ

一　かぜふき、ゆきふる　年のくれ、
　そこでも　ここでも　いそがしく、
　バッタン　バッタン　バッタン　バッタン、
　すすはらひ、すすはらひ。

二　まつ、たけ、しめうる　としのくれ、
　そこでも　ここでも　にぎやかに、
　ペッタン　ペッタン　ペッタン　ペッタン、
　おもちつき、おもちつき。

三　はねつき　まりつき　こままはし、
　ゑだこを　あげて　あそびませう。
　さあ　さあ、お正月
　はやくこい、はやくこい。

第一「兎」の教授

一　教材及指導の要點

「兎」　新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム96を以て示してあるから、一つの歌を約二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕快に可愛らしく、

第一段は弱聲に曲を起して靜かにゆつたりと進めてゆき

第二段は稍强く受けて、漸次强め加減にもつてゆき、

第三段は强く受けて氣持よく歌ひあげ、

第四段は其儘强く晴やかに受けて漸次力を抜き、輕く可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意　附點がなく、八分音符計りでゆつたりと疊んでゆくところに、たまらない味があり、可憐さがあるものではあるが、これが却々六ケ敷く、大抵は附點になつて、跳躍的になる傾向があるから、この點は充分に注意してほしいと思ふ。

それから、各段に於ける「ファ」の音が上り切れない傾があり、又第四段の第三小節「レレミレ」が「レレミレ」になり易い傾向があるから、これも前以て心得て置く必要があらうと思ふ。

(五)タクトは第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして、輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ニハトリ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 6 5 | 6 5 6 5 5 6 | 6 6 6 7 7 | i i i —|

ド　ラ　ド　ラ　ド

i 7 i 7 7 | 6 7 6 5 5 | 6 5 4 3 3 | 2 2 3 1—‖

ド　ラ　ソ　ラ　ソ

(三)教材「兎」の練習……この歌は隨分古くから歌はれてゐるものではあるが、その割に普及せられてはゐないやうである。兎に角、最初は極めて自由に、思ひのまゝに歌はせてみることにする。

かうして子供達にある滿足を與へて置き、それから、一

句づつ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は其儘の範唱によつて導いてゆき、第二回目からは例によつて當欲め挿入式によつて進めてゆくことにする。例へば、

1 1 1 1 2 | 3 3 3 3 4 | 5 5 5 5 3 | 2・0 |

ツキぐう　ウサギア

と、いふやうな工合に、旋律計りを聽かせて置いて、歌詞を拔いてゆくことにする。子供達の方では記憶を辿り、前からの關係から推して適當な歌詞を當欲めては應唱しながら進めてゆくのである。歌詞計りを示されて、旋律の省略された場合は、旋律を當欲めながら進めてゆくのであるから、子供達の方では少しの油斷も出來ない譯であるから緊張を續けながら、しかも愉快に進めてゆくので倦怠がない。……かうして漸次省略の部分を多くし、挿入の部分を廣めていつて、漸次子供達の獨立に移すやうにすれば、自然に面白く捌いてゆくことが出來るやうである。

しかし、前にも述べて置いた八分音符で疊んでゆくところ、「ミファ」の關係は、なか〳〵簡單にはゆくまいと思ふしかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから、こゝではあつさりと切上げて、

(四)既習歌曲の練習……「木の葉」を輕く、ゆつたりと齊唱せしむることによつて氣分を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 3 5 5 | 6 5 5 6 | 6 5 6 7 i i | i i 7 7 6 7 |

ド　ラ　ド　ド　ラ

6 6 5 4 3 2 |

ラ

3 3 2 2 1 2 | 3 4 5 6 5 5 | i i 7 7 6 6 5 5 |

ミ　ミ　ド

4 4 3 2 1—‖

ファ

(二)旋律の誘導練習……これはある旋律の一部分を示して置き、それに續く旋律は、音符の長さだけを示して、それに適當した旋律を當欲めしめながら、進めてゆくのである。例へば、

1 3 5 6 | ・・・0 |

と、いふやうな工合にして第一小節は旋律を示し、第二小節は鞭で拍數だけを叩いて聽かせるのである。さうすれば子供達の方では、

1 3 5 6 | 5 5 5 0 |
5 3 1 0
i 6 5 0
5 3 5 0

等と、思ひ〳〵の旋律をつけるのである。多人數だから思ひ〳〵になるのは仕方がない。しかし、同一主題を三回も繰返してみると、何かの一つに統一せられるから面白い譯である。又は、

1 3 5 6 | • • • • | • • • • | • • • •

まりをつけ、次に第一歌詞の組と第二歌詞の組とに分け、いつもの通りに向ひ合はせ、相手方の口形の動きに注目せしめながら同時に併唱せしむることにする。餘程しつかりしないと、相手方の口形の動きに引摺り込まれて、何をどう歌つてゐるのか分らない迄に、混亂に叩き落されるのであるから、各自一生懸命に奮闘する。であるから、相互交替で一通りやれば、大抵は片づけることが出來やうと思ふ。

しかし、餘り眞劍に、一生懸命になるので、自己の統制を失ひ、どうかすると暴聲を張り上げて吠へ狂ふやうなものが現れないともかぎらない。さうした時には悲鳴を上げたものとして、オミツトすることにしておけば、敵に乘ぜられないやうに、あくまでも統制をみださないやうに、自己を引締め〳〵奮闘する有樣は、可愛らしくも亦いぢらしいものである。

かうして一通りの纏まりをつけ、さらに分唱獨唱等によつて發想方面にまでの整理を施し、適當なる頃合をみて齊唱せしめ、可愛らしく愉快に本教材の纏まりをつけることにする。

第二「トシノクレ」の教授

一　教材及指導の要點

「トシノクレ」　小學新唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム100を以て示してあるから、一つの歌を十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　晴やかに氣持よく、

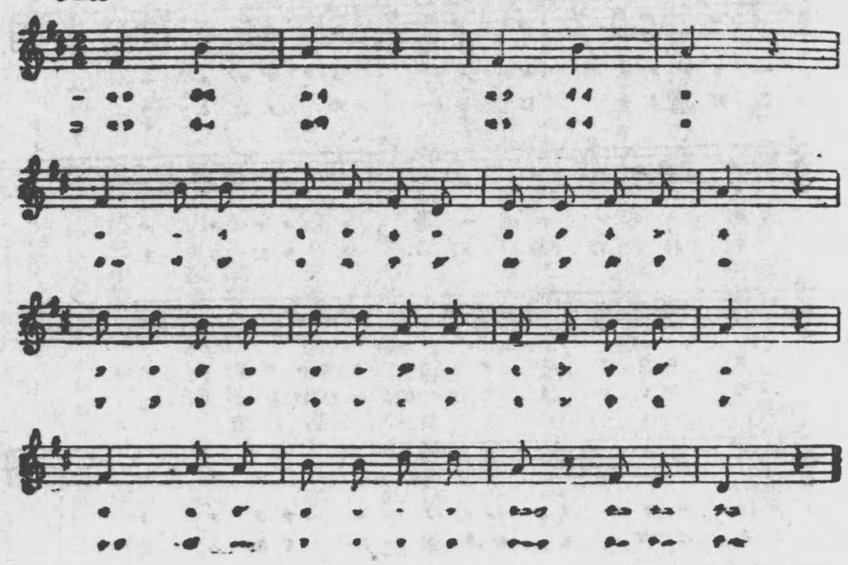
第一段は弱く曲を起してゆつたりと靜かに運んでゆき、第二段は稍强く受けて漸次力を拔いて收めて置き、第三段は弱く、しかし明瞭に取扱つて輕快に運んでゆき第四段の「ススハラヒ」は稍速度を緩め晴やかに歌ひあげて全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意　第一段の第二小節「ソンドラ」が、第一小節同樣に「ソソラソ」になつて「ド」の音に跳躍する事がかなりに六ケ敷く、又第三段第三小節「ドドミド」が、大抵の場合「ドレミド」にならうとする傾向があるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。それから、この曲にも附點がない。八分音符計りでゆつたりと畳んでゆくところは、却々に旨くゆかないものであるから、そのつもりで指導にかゝつてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は、三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際（省略）

ネズミノモチヒキ

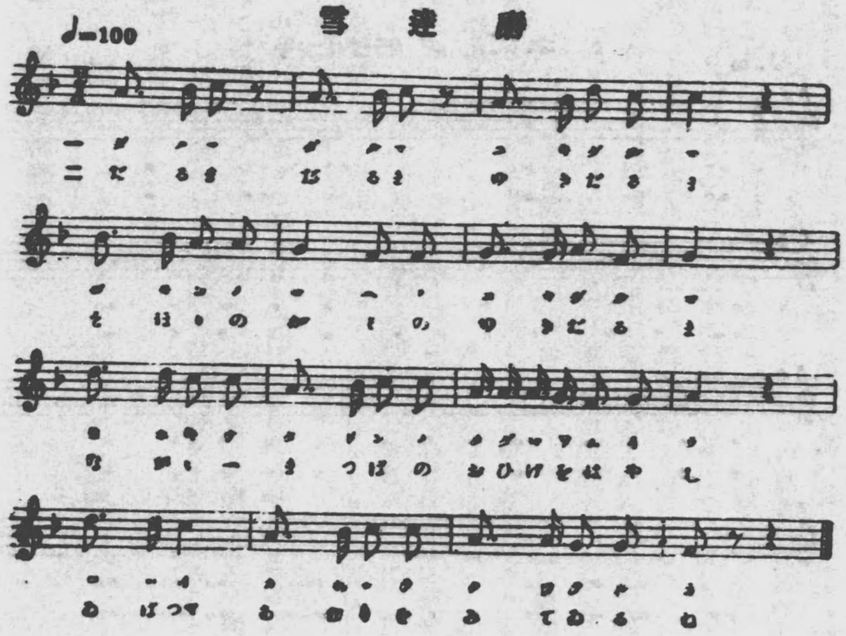


ねずみのもちひき

一　もういいかい。もういいよ。
　こはいみけねこ、よくねんね。
　そらでろ　やれでろ
　みんなでろ。
　おひげをそろへて
　チユツ　チユ　チユ　チユ

二　もういいかい。もういいよ。
　うまいぞ　おもちだ、がつたりこ。
　そらひけ　やれひけ
　みんなひけ。
　しつぽふりふり
　チユツ　チユ　チユ　チユ

雪達磨



一　達磨、達磨、雪達磨、
　御門の前の雪達磨、
　大きな炭團の目玉をむいて、
　こはい顔して立つてるね。

二　達磨、達磨、雪達磨、
　通の角の雪達磨、
　長い松葉のおひげをはやし、
　ねばつてあたりを見てゐるね。

第一　ネズミノモチヒキの教授

一　教材及指導の要點

「ネズミノモチヒキ」　新等常小學唱歌一

(一)區分　三回　一時間半

(二)速度　メトロノーム96を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく、

第一段の前半二小節は弱聲に、しかも靜かに取扱ひ、後半二小節は、より弱聲に、即ち最弱聲に歌つてこれに應へ、

第二段は弱くはあるが、稍々普通の狀態に復してゆつたりと運んでゆき、

第三段は强く受けて晴やかに歌ひあげてゆき、

第四段は其儘受けて漸次力を抜き、輕快に、可愛らしく全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　第二段の第三小節「レレミミソ」が、どうかすると、「レドレミソ」になつて「レレ」「ミミ」と同音を繰りかへすところが旨くゆかず、

第三段第一小節「ドドララ」が「ドドソソ」になつて「ラ」を保つことが六ケ敷く、又

第四段第二小節「ララドド」が「ラソドド」にならうとする傾向があるから、これらは前以て心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出る、强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

　　拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一　歌調

(一)既習歌曲の練習……「トシノクレ」を齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 4 3 4 | 3 2 | 2 1 2 3 2 3 | 2 | 0 |
ド　　レ　　ミ　　ソ　　ラ　　ド

3 4 5 5 6 6 | 5 4 | 3 4 3 2 3 2 | 1 | 0 |
ミ　　ソ　　ラ　　ド

(三)旋律誘導練習……この練習は、旋律の動きをそれとなく理解せしめやうといふもので、讀譜をたすけ、作曲の準備ともなるべきもので、かなりに重要であり、又面白い

ものである。例へば

5.5 3 5|• •̲ •̲ • 0|　といふやうな工合に最初の旋律を歌つて聽かせ、後は鞭を以て其拍子だけを聽かせることにする。子供達は、其拍子に合せて、自分の好む旋律を當欲めながら歌つて來るのである。例へば

ソソミソ　ソソミソ　ソソミソ　ミソ　ミミミミ

5.5 3 5|• •̲ •̲ • 0|……と聽かせるものもあれば

i 7 6 5 0|……と聽かせるものもあれば

6 i 6 5 0|……と聽かせるもの、或は

3 4 4 3 0|……歌と共に來るものもある

各自各樣に、隨分面白く出て來るものである。變つたものが一齊に歌はれるので困るだらうとの心配もあるかも知れないが、それは少しも差支はない譯である。ところが、三回も同じものを繰りかへさせて置けば、其内の一の旋律に統一せられるから面白いものである。

かうして各種の動機に、變つた拍子をあしらつて指導を進めてゆけば、かなりに面白い結果が見られるやうであるしかし、餘りながくなつてはいけない。せい〳〵二三分で結構、あつさりと切上げて、

（四）教材「ネズミノモチヒキ」の練習……この歌はまだ新しいせいか、一般的に普及せられてはゐないやうであるが、相當によろこばれる歌であるから、或は知つてゐるものもあるかも知れない。兎に角最初は、子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。

次に更めて範唱を示して大體の輪廓を知らせて置き、それから、一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする

最初の一回は、歌曲其儘の範唱によつて指導してゆくことにするが、第二回目からは例によつて、挿入當欲法によつて進めてゆくことにする。例へば

3 6 6|5 5 3 1|2 2 3 3|5 0|

ミソ　ネ　ズ　ミ

と、いふやうな工合に、ある部分は歌詞を省略して、たゞ旋律だけを聽かせて進めてゆくことにする。子供達は、その省略せられた部分に、記憶を辿り、前後の關係から推して、適當な歌詞を塡補しては進めてゆくのである。

かうしたことにすれば、子供達の方では、油斷が出來ない。一言一句も聽漏らすまいと從いて來る。從つて効果的である。しかも倦怠がない。かうして、漸次省略の部分を多くしてゆき、獨立して歌へる樣に纏めてゆくのである。

この方法は歌詞を省略する計りでなく、歌詞を示して旋律を省略し、其除かれた部分を塡補挿入せしめることにするのも面白いやうである。兎に角、右から左から、いろいろに手段をかへて氣分をあらたにし、面白く愉快に引廻すことに努めたいと思ふ。

かうして二三回歌はせて置けば、何とか纏るものである仕上げは次回にゆづり、あつさりと切上げて置いて、

（五）既習歌曲の練習……「兎」を可愛らしく齊唱せしむることによつて氣分を直し、晴やかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第二歌詞

（一）既習歌曲の練習……「ニハトリ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に進入る準備とする。

（二）階名翻譯練習

1.3 5 4|3.4 3 3|2.1 2 3|2—0|
ド　　ヒ　　ト　　リ

3.4 5 5|6.6 5 4|3.4 3 2|1—0|
ニ　　ワ　　ニ　　ワ

（三）教材「ネズミノモチヒキ」の練習……例によつて面白さうに彈いてゆく……子供達も嬉しさうに歌ひあげながら從いて來る。なほ不完全なところは指導を加へ、間違つてゐるところには訂正を施して一通りの纏りをつけ、兎に角、今日は第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて、子供達の思ひのまゝ歌はせてみることにする。次に一回の範唱を示し、それから一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。曲の方は出來てゐるのであるから、もう指導する必要はない。こゝでは、新しい歌と、その歌が旋律に對して、どういふ工合に關係づけられてゐるか、これを捌いてゆくことが、子供達に殘された、一つの問題となる譯であるから、子供達も一生懸命である。そこで、緊張した學習がつゞけられるのである。餘り出過ぎた世話はしないものである。

三回も繰りかへせば一通りは片づけることが出來やうと思ふ。さらに分唱獨唱等によつて纏りをつけ、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

一節づゝ歌つてゐた時には何のこともなかつたものが、さて兩節をつゞけて歌はせてみると却々に思ふやうにゆかないものである。すつかり混亂錯綜して始末にならないものである。しかし、あせつてみても、どうにもならない譯であるから、仕上げは次回にゆづり、心機一轉、

(四)旋律の誘導練習……によつて氣分を直し、
(五)既習歌曲の練習……「トシノクレ」を愉快に斉唱せしめて晴やかに本次の練習を終ることにする。

第三次　練　習　理

(一)既習歌曲の練習……「兎」を愉快に斉唱せしむることによつて學習訪問をつくり、本次の練習に這入る準備とする。
(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 i 7 6 | 5 5 6 6 | 5 4 3 2 |
ド　　ソ　　ソ　　ソ

3 4 5 6 | 5 i 7 6 | 5 4 3 3 | 2 2 1 — |
ミ　　ソ　　ソ　　ド

(三)教材「ネズミノモチヒキ」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供達も得意に歌ひあげながら從いて來る。しかし、混亂は依然として直らない。それはそれとして、今度は階名唱法に導入することにする。大して六ケ敷い音程でもなく、左程速い歌でもないから、何とか捌いて來ることも出來やうと思ふ。勿論、正確に歌はせやうといふのは無理である。何とか見當をつけて從いて來ることが出來れば、それで滿足することにして……元の歌詞にかへして、改めて置き、愈々仕上げに取かかることにする。

先づ、第一歌詞と第二歌詞とを再び切離して練習を仕直して繰りをつけ、次には、いつもの通りに第一歌詞の組、第二歌詞の組の二組に分け、兩組を向ひ合せて、各々相手方の口形の運動に注目せしめながら同時に併唱せしむることにするのである。

不安定な組は、確實味の多い組に引摺り込まれて、何を歌つてゐるのか、何をいつてゐるのか、全く分らないまでに混亂に陥らしめられるものである。子供達は一生懸命である、しかも勝つても敗けても大笑で濟む至つて朗らかなものである。

かうして相互二回も繰りかへせば、大抵のものは片づくものである。しかしこの練習では、どうかすると暴聲を張り上げるものが飛び出すので、驚らされる事も尠くない。しかし、これは悲鳴と呼んで敗者とすることにすれば、さうしたものも尠くなるやうである。

兎に角、かうして練習を重ね、適當な機會をみて、輕く可愛らしく心ゆく計りに斉唱せしめて、本教材の練習を結ぶことにする。

第二　雪達磨の教授

一　教材及指導の要點

「雪達磨」　新訂尋常小學唱歌一
(一)區分　三回　一時間半
(二)速度　メトロノーム 100 を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。
(三)發想　輕快に、元氣よく、
第一段は強めに曲を起して晴やかに歌ひあげてゆき、
第二段は稍力を抜いてゆつたりと運んでゆき、
第三段は強く受けて元氣よく押してゆき、
第四段は強く高らかに歌ひあげて、勇ましく全曲を結ぶことにする。
(四)其他の注意　各段に使用せられてゐる「ミーファソ」がなか〳〵に旨くゆくものでなく、大抵は「ミーミソ」になつて「ファ」音の存在が明瞭を缺く場合が多いやうであるから、この點は前以て心得て置いてほしいと思ふ。
それから、第三段の第三小節の十六分音符で躓んでゆくところがかなり六ケ敷いやうであるから、これも考へて置いてほしいと思ふ。
(五)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌調

(一)既習歌曲の練習……「ネズミノモチヒキ」を可愛らしく斉唱せしむることによつて學習氣分をあふり、本次の練習に這入る準備を整へる。
(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 2 3 4 5 i | 7 6 5 6 5 | 4 3 2 — |
ド　　レ　　ミ　　ファ

3 4 5 6 5 | 6 5 i 7 6 | 5 6 5 4 3 | 2 3 2 1 — ‖
ミ　　ラ　　ソ　　レ

(三)教材「雪達磨」の練習……この歌も發表せられてから、まだ間もないものであるから、知らない子供が多からうと思ふ。兎に角、最初は子供達の思のまゝに歌はせてみることにする。
次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。
最初の一回は例によつて其儘の範唱を與へ、第二回目か

らは挿入當欲式によつて指導を進めてゆくことにする。
（前歌村參照）

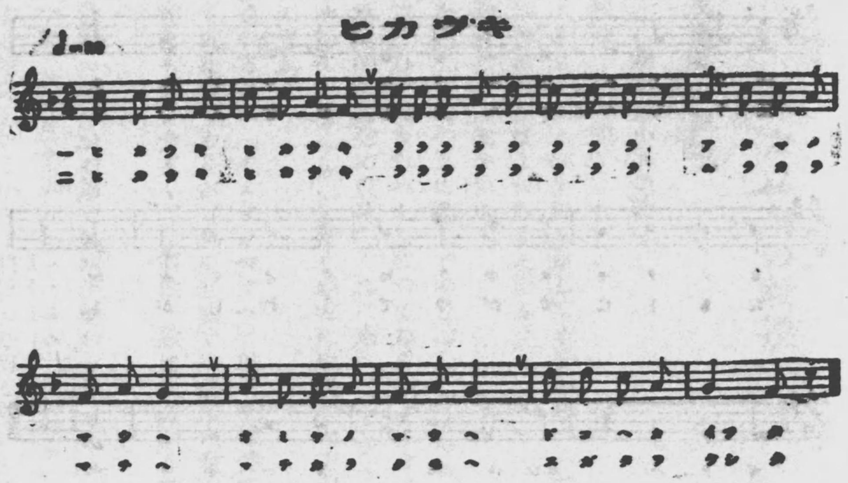
大して六ケ敷い歌ではないが、「ミーファソ」の「ファ」の音が上り切れずに「ミーミソ」になつて、如何にも締りのない味のないものにならうとする傾向がある。二三回指導してもどうしても旨くゆかないやうであれば、階名と比較させながら歌はせてみると、大抵は覺めることが出來るやうである。例へば、

「ミーファソ、グールマ。ミーファソ、グールマ。ミーファラソソー、ユーキグルマー」

と、いつたやうな工合に、階名で歌つた後を、追つかけるやうにして歌詞で歌はせてゆくやうにするのである。一年とはいひながら、音の關係も餘程飲納せられて來てゐる頃であるから、何とか、片づけてゆくことが出來やうと思ふ。しかし、あせつてはいけないから、くどくならない程度に切上げて、心機一轉、

（四）拍子練習

（五）既習歌曲の練習……「ネズミノモチヒキ」を再び齊唱せしめて愉快に朗らかに本次の練習を終ることにする。

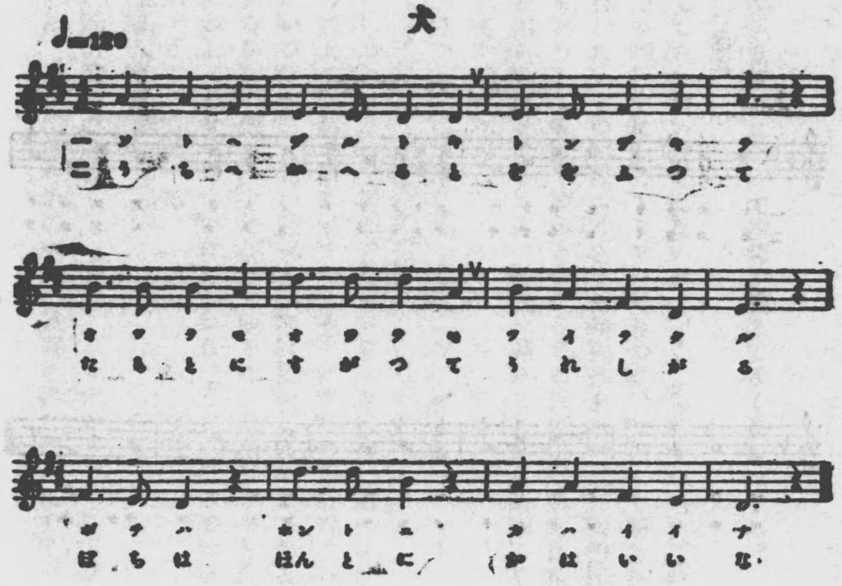


ヒカウキ

一　ヒカウキ　ヒカウキ、
　　ララララ　ラララ、
アタマノ　マウヘ、
オミヤノ　マウヘ、
　　ドコヘカ　イツタ。

二　ヒカウキ　ヒカウキ、
　　ララララ　ラララ、
ムラカラ　マチヘ、
マチカラ　クモヘ、
　　スガタヲ　ケシタ。

犬



第一　ヒカウキの教授

一　教材及指導の要點

「ヒカウキ」　新尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム88を以て示してあるから、一つの歌を十三秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　勇ましく、晴やかに、
強めに曲を起して晴やかに墨んでゆき「アタマノマウヘ」を强聲に取扱ひ、繰りかへしになつてゐる「オミヤノマウヘ」は反響的に弱聲に受けてこれに應へ、「下チラヘ」を強く晴やかに、「イツタ」を輕く弱聲に取扱つた方が面白いやうに思ふ。
但し、原曲の方では「オミヤノマウヘ」以下を强聲に歌はせるやうになつてゐるが、私の經驗では前述の發想の方が子供達にも分りやすく、又面白く歌はれるやうである。

(四)其他の注意　第一段の第三第四小節の　♪♪♪

〳〵に、

3 1 2 3 | 5 5 5 5 |
. . . . | 5 6 5 5 |
. . . . | 6 6 5 5 |
. . . . | 2 2 2 2 |
. . . . | 2 3 1 0 |

等と、いろ〳〵に續けて來るものである。一齊に同旋律に來ないのは止むを得ない。しかし、同問題を三回も繰りかへせば、ある勢力のある旋律に統一せられるから頗白い譯である。拍子も同一のものでは面白くない。

3 1 2 3 | . . | . . . 0 |
或は 3 1 2 3 | . . | . . . 0 |

等と變化をつけてみると、

3 1 2 3 | 5 i 6 5 0 |
3 1 2 3 | 5 i 7 6 5 0 |

等と、隨分面白く出て來るものである。尋常一年だといつてもなか〳〵馬鹿には出來ないものである。

かうした練習を重ねる事によつて音の動きといふものに注意を向け、拍子の變化といふものに關心を持つやうになり、知らず〳〵の間に作曲にまで進んでゆくのである。世間では兒童作曲といへば、新しがりの張上りもの〻やるものであるかのやうに考へてゐる方も尠くないやうであるが幾尾の指導にはかうした時代から系統的に準備せられてゐるのである。しかしこの仕事もくどくなつてはいけない。(二)、(三)の基本的作業をせい〳〵五分間位で片づけたいと思ふ。五分間もあれば、かなりの仕事が出來るものである。

(四)教材「ヒカウキ」の練習……この歌は發表せられてから大して古い譯ではないから、知つてゐる子供は尠からうと思ふ。兎に角、最初の一二回は自由に彈いてみて、心のまゝに歌はせてみることにする。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は歌曲其儘のものによつて指導をなし、第二回目からはいつもの通りに挿入式當欲法によつて指導を進めてゆくことにする。例へば

3 5 5 6 | 1 3 2 | . . . . | . . . . |
ヒカウキ　　ヤマセノ

と、いつたやうな工合に、旋律を示して歌詞の省略された場合には歌詞を挿入し、歌詞を示して旋律の省かれた場合には、旋律を附して唱へしめ、兩方を省き、たゞ拍子のみを示された場合は、其の拍子に乘せて歌曲を唱へしむるものである。

旋律を示す場合には樂器或は階名唱法、タタ、ララ等でも宜敷い譯ではあるが、私は昔唱法によつて指導することにしてゐる。譜から譜に移す計りでなく、最も圓滑に運ぶやうに思ふ。

歌詞をしめして旋律を當欲める場合は、たゞ歌詞を拍子に合せて讀めば宜敷い譯であるから、問題にならない。又拍子だけを示す場合には指揮棒又は手拍子のやうなもので叩いてやれば宜敷い。

兎に角、かうして子供達の考へねばならぬ部分を殘して置くことによつて、彼等は前後の關係又は記憶を辿つて、適當な歌詞、適當な旋律を當欲めながら捌いてゆくのであるから、緊張をゆるめる譯にゆかない。從つて倦怠がなく面白く効果的に進めてゆくことが出來るのである。

大して六ケ敷いものではないが、第一段の第三小節のところが、どうかすると旨くゆかないものであるから、この點を注意して指導を進めてゆけば一通りは纏める事が出來やうと思ふ。しかしくどくなつてはいけない。大抵のところであつさりと切上げて、

(五)既習歌曲の練習……「ネズミノモチヒキ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名譜譜練習

1 2 3 4 | 5 i 7 6 | 5 5 6 6 | 5 4 3 2 |
ド　　ソ
3 4 5 6 | 5 i 7 6 | 5 4 3 3 | 2 2 1 0 ‖
〃　　ソ

二小節づゝ一纏めにすることが困難であれば、一小節づゝにしても差支はないが、漸次二小節づゝに進めるやうに取扱つてほしいと思ふ。

(二)旋律誘導練習……前次參照

(三)教材「ヒカウキ」の練習……面白さうにダン〳〵と彈いてゆく、子供達は得意になつて從いて來る。大抵は間違はなからうと思ふが、どうかすると第一段の第三小節のところをすつかり忘れてしまふやうな場合も尠くない。

かうした折には、其所だけの部分を特に速度を緩めて取扱ひ、漸次所定の速度に導いてゆくやうにすれば大したことはなからうと思ふ。なほ分唱、獨唱等によつて整理をなし、適當な頃合を見て

(四)既習歌曲の練習……「雪達磨」を晴やかに斉唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ネズミノモチヒキ」を可愛らしく斉唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 3 2 3 1 | 2 2 3 4 | 5 i 7 6 |
ド　ミ　ソ　ソ

7 7 6 6 | 5 6 5 4 | 3 2 3 1 | 2 3 1 — ||
ド　ソ　ミ　ソ

(三)教材「ヒカウキ」の練習……一二回極めて自由に歌はせてみることにする。もう大抵は、大丈夫であらうと思ふ。適當な頃合をみて階名唱法に導入することにする。大して速い曲ではないが、何だか速いやうな心持のするいそがしい曲であるから、旨く捌いて來ることは六ケ敷からうと思ふ。どうせ滿足にはゆける譯のものではない。かうしたことの習慣、かうしたことに興味を與へ、關心を持たせることが目的であるから、間違つてゐても、勝手なことを並べてもこれは要領よく片づけてゆき、程よいところで元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて、子供達の思ひの儘に歌はせてみることにする。次に更めて一回の範唱を示し、それから、一句づゝ歌詞を讀んで聽かせてはそれに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。

前段は第一歌詞と同樣のものを繰りかへすので問題にならず、第二段だけが新しくなる譯であるから、二回も繰りかへせば一通りは纏まるものである。

そこで、今度は第一歌詞から續けて歌はせてみることにする。似たやうなものであり、何から何處へ、どうつぎ合せてみても意味をなすことが反つて厄介なもので、兩歌詞がすつかり混亂してしまつて、大抵の場合手古摺らされるものである。

かうした時には例によつて、第一歌詞の組、第二歌詞の兩組に分ち、相互を向ひ合せ、互に口形の動きに注目せしめながら、同時に併唱させることである。この方法によれば、子供達は一生懸命になり、愉快に面白く遊びの内に纏めることが出來るのである。しかし、あせる必要はない。仕上げは次回にゆづり、

(四)既習歌曲の練習……「雪達磨」を愉快に斉唱せしめて本次の練習を終ることにする。

以下省略

第二　犬の教授

一　教材及指導の要點

「犬」　新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム 120 を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく、ゆつたりと

第一段は靜かに曲を起して、ゆつたりと進めてゆき、第二段は強く受けて高らかに歌ひあげて第三段に備へて置き、

第三段は第一小節は極めて弱く第二小節は強く、後半二小節は普通の強さにして、ゆつたりと全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　第三段の第一小節及第二小節にある休止の一拍を保つことがかなりに六ケ敷いやうで、大抵は拔きにして次の小節に移らうとする傾向がある。

それから、同じく第二小節の「ドードラ」が「ドードソ」に下つて「ラ」の音を保つことが困難のやうであるからこれも前以て心得て置く必要があらうと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出るところの强擊の受方に始め、最後は「元止め」にして靜かに「流す」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ヒカウキ」を勇ましく斉唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の練習に移る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 4 3 2 3 1 | 2 1 2 3 4 | 5 i 7 6 5 0 |
ド　ファ　レ　ソ

i 7 6 7 7 | 6 5 6 5 4 | 3 2 3 1 2 | 3 2 3 1 0 ||
ド　ラ　ミ　ミ

(三)旋律の誘導練習……前に述べたのは階名唱法を採つたものであつた。しかし、階名計りでなく歌詞或は言葉による方法は一入興味があり面白いやうに思ふ。例へば

5.5 6 6 | • • • 0 |
サダヒメ　サイタ

と、いふやうな問題を投げることにする。子供達は思ひ思ひの旋律を附して來る。例へば

5.5 6 6 | 5 3 2 0 | 又は 5.5 6 6 | i 6 5 0 |
ウグヒス ナイタ　　ウグヒス ナイタ

等と出て來る。又少し複雜にして

5.5 6 6 | ・ ・ ・ ・ | ・ ・ ・ ・ ・ 0 |
ウグヒス ナーイータ

と、やれば、子供達は

5.5 6 6 | 5 3 1 2 3 0 | 又は 5.5 6 6 | 5 i 7 6 5 0 |
ウグヒス ナーイータ　　ウグヒス ナーイータ

等と、隨分面白く歌つて來るものである。しかし、くどくなつてはいけない。せいぜい二三分位で切上げて置き、

(四)教材「犬」の練習……に進入ることにする。……この歌は隨分古くから歌はれてゐるものではあるが、滿足に歌はれてゐるものは極めて尠ないやうである。兎に角、大抵子供は調樂がある譯であるから、最初の一回は思ひのまゝに、自由に歌はせてみることにする。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。……第一段、第二段は問題はないが、第三段の第一第二の二小節が、却々旨くゆかないものである。あの一拍の休止が待つてゐられないで、直ぐに飛び込まゝとする傾向があるから思ひ切つて三四拍も休ませて充分に落つかしめて置いて、次の小節を歌はせる位のところから始めていつたら、大抵は片づけることが出來やうと思ふ。隨分思ひ切つたことをやらねば普通の方法では、なか〳〵に譯まるものでない事を承知して置く必要はあらうと思ふ。兎に角、この時間に於ては一つ〳〵休止が置ける位のところで滿足して

(五)既習歌曲の練習……「ヒカウキ」を朗らかに齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

以下省略

花咲爺

♩=84

一 ハマウ ー ダ ゝ ゲ ゲ イ ガ ー と ッ ゝ ば
二 し ち の る ら ら い が は ひ ま げ ば

ノ ハ ウ モ マ マ も ー ナ ゲ カ リ ケ
の は な も く ら も は ひ だ ら け

ト ノ サ マ カ イ ウ ヨ ロ コ ン デ
と の さ ま に い そ は ら を に て

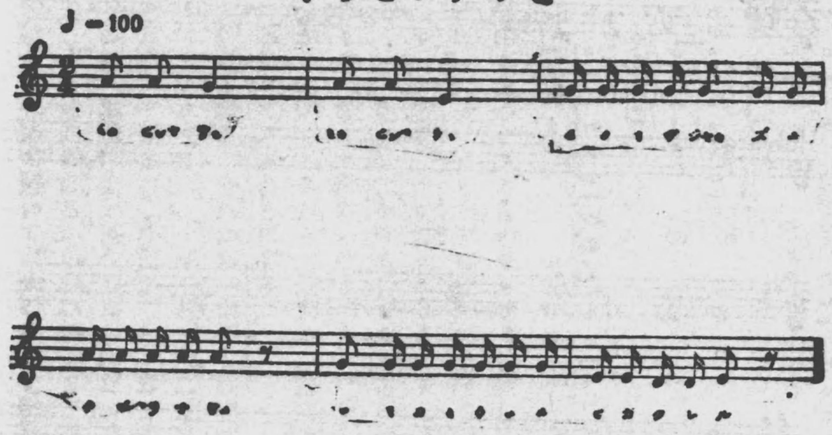
ダ ダ ッ ー ク と ッ ゲ カ サ レ ル
な な じ に ち は を か け ら れ る

花咲爺

一 正直爺が灰まけば
野原も山も花ざかり。
殿樣大層よろこんで
ちぢいに褒美を下される。

二 意地惡爺が灰まけば
目鼻も口も灰だらけ。
殿樣大層はらを立て
ちぢいに縄をかけられる。

イウビンアソビ



いうびんあそび

いうびんやさん、
いうびんやさん、
いそいでじやうずに
くばりなさい。
ときがおくれる、
日がくれる。

第一　花咲爺の教授

拙著「私の唱歌教授」参照

一　教材及指導の要點

「花咲爺」　新訂尋常小學唱歌一

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム84を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　晴やかに、ゆつたりと

第一段は普通の强さに曲を起して晴やかに進めてゆき、第二段は强く受けて漸次力を抜き一先づ曲を收めて置き第三段は弱聲に起して漸次强め加減に押してゆき、第四段は强く高らかに歌ひあげて、晴やかに全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　各段の第一小節及第三段の第二小節は第一拍が附點になつてゐるにも拘らず、各段の第三小節はすべて第二拍が附點になつてゐる。これが混同してなか〳〵に旨くゆかないものである。無理からぬことではあるが、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

(五)ククトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は三拍の「元止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「犬」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名調譜練習

1 2 3 4 | 3 2 2 3 1 | 2 2 3 4 | 5 i 7 6 |
ド　ミ　　レ　　ソ

7 7 6 6 | 5 6 5 4 | 3 2 3 1 | 2 3 1 — |
ど　ソ　　ミ　　レ

(三)教材「花咲爺」の練習……この歌は隨分古くから歌はれてゐるものであるから、大抵の子供達は何とか歌へるであらうと思ふ。そこで、最初は子供達の思ひのまゝに、極めて自由に歌はせてみることにする。

殆んど完全に出來てゐれば、其儘に纏めて仕上げをしても宜敷い譯ではあるが、さう旨くゆく場合は極めて尠く、隨分勝手に歌はれてゐるものである。

そこで更めて範唱を示し、それから例によつて一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。最初の一回は其

僅の範唱を以て導いてゆき、第二回目からは、いつもの通りに、挿入當欲法によつて調めてゆくことにする。例へば

3・ 3 2 1 | 3 5 5 5 | 3 5 6・5 | 5・0 |
セッヴーチャ チチイサ

・・・・・ | ・・・・・ | 2 2 3・2 | 1・0 |
ンンヤキ ンヤキガ リ

のやうな工合に省略された部分に適當なる歌詞、或は旋律を挿入せしめながら進めてゆくのである。詰り、歌詞を省略された場合は、樂器又は鼻聲によつて旋律だけを聽かせ、それに適當な歌詞を附して復唱せしめながら進めてゆくのである。

又旋律の省略される場合は、歌詞に拍子を附して讀んで聽かせ、それに適當な旋律を當嵌め、歌にして復唱せしめながら調めてゆく方法である。

それから歌詞、旋律の何れも省略し、たゞ拍子だけ（鞭又は手拍子によつて）を聽かせる場合は、それに適當な歌曲を當嵌め挿入せしめながら進めてゆくのである。

かうして指導を進めてゆくことにすれば、子供達の方では油斷が出來ない。常にある緊張を以て迎へて來る譯であるから倦怠がなく、從つて効果的である。……かうして漸次省略の部分を加へてゆき、獨立して歌へるやうに調めてゆくやうにすれば、大した困難もなく片づけることが出來やうと思ふ。

しかし、前にも述べた通りに、附點の取扱はなか〳〵に旨くゆかないものではあるが、あせつても仕方がないから仕上げは次回にゆづり、

(四)既習歌曲の練習……「ヒカーキ」を輕く、愉快に齊唱せしむることによつて機嫌を直し、朗らかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 3 1 2 3 2 | 2 1 2 3 4 | 5 i 7 6 5 —|
ド ミ レ ソ

i 7 6 7 7 | 6 5 6 5 4 | 3 4 3 2 2 | 2 2 3 1 — ||
ド ラ ミ レ

(二)旋律誘導練習……ある旋律の一部分を與へ、それにつゞくものは拍子だけを示して置き、その拍子にのせて思ひ〳〵の旋律をつゞけてゆくのである。多人數の子供達がやるのであるから、千差萬別とまではゆかないとしても、同一といふ譯にはゆかない。しかし、大抵は何とか調めてゆくもので、あまり見當違のものを持つて來ないから面白

いものである。例へば

3 3 5 6 5 | ・ ・ ・ 0 | といふ調子を與へたとすれば

ソ ミ ソ ラ ソ　ド、ド、ド、ド、　ド、子供達は、

i 6 5 0 |
3 5 2 0 |
3 4 3 0 |
1 2 3 0 |
3 3 1 0 |

等と歌ひ終ひに是ひて來る。又是に

3 3 5 6 5 | ・ ・・・・・ 0 | と、調子を與へれば、

ソ ミ ソ ラ ソ　ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、子供達は、

i 7 6 5 6 5 0 |
3 5 6 5 3 2 0 |
2 1 2 3 5 2 0 |
1 2 3 5 6 5 0 |
6 5 4 3 2 1 0 |

等と何とか調めて來るから、面白く又可愛いものである。かうした練習を重ねてゆけば、音の動き、卽ち旋律の動きについて、ある關心を持つと共に、何時となく旋律についてのある理解を持つやうになるものである。殊に、拍子の變化（歴時の變化）について、かなりの注意を促すものであるから、これらが讀譜、さらに進んで作曲の重大なる役割を演じてゐることを思はねばならぬ譯である。

(三)教材「花咲爺」の練習……例によつて面白さうにダン〳〵と彈いてゆく……子供達も得意になつて歌ひあげながら從いて來る。大體の形は調つてゐやうとは思ふが、附點の位置が混亂して旨くゆかないであらうと思ふ。一二三回繰りかへしても旨くゆかないやうであれば、今度は、

「最初は初めを引張り、終りは最後を引張る」

詰り各段の初めは第一拍を附點にして取扱ひ、各段の終りは第二拍を附點にして最後の音を引張る、といつたやうな說明を加へて指導してゆけば、大抵は譯なく捌いてゆくことが出來るのである。しかし、これは最後の手段で、この程度の學年に於ては、出來るだけ理屈抜きに、說明抜きにして、子供達の主觀のみに訴へて解決してゆきたいのが私の主張であり、希望である。

一通り歌へるやうになれば、更に分唱、獨唱等によりて調りをつけ、次に階名唱法によつて歌はせてみることにする。大して六ケ敷いものとも思はないが、どうせ滿足には出來るものではない。大體の見當がついてゐればそれで辛抱することにして朗らかに切上げて、元の歌詞にかへして

改めて置き、

(四)既習歌曲の練習……「犬」を可愛らしく斉唱せしむることによつて心機一轉、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ネズミノモチヒキ」を愉快に可愛らしく斉唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 3 2 | 3 — 1 — | 2 2 3 4 5 i | 7 6 5 0 |
ド　　ミ　　レ　　ヂ

6 6 7 i 7 6 | 5 6 5 4 | 3 2 3 1 2 3 | 1 — 0 ‖
ラ　　ソ　　ミ

(三)教材「花咲爺」の練習……一二回愉快に歌はせてみることにする。大抵は大丈夫であらうとは思ふが、なほ不完全なところへは指導を加へ、間違つてゐれば訂正を加へて、愈々本次は第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて子供達の思ひの儘に歌はせてみることにする。次に更めて範唱を示し、それから、一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。……旋律は出來てゐる譯であるから、もう其の必要はない。要は新しい歌にどういふ工合に旋律を當嵌めるかゞ子供達に殘された問題である。之は教師の方から押しつけるものではなくて、子供達の方に於て解決すべき問題である。

大して六ケ敷い歌でもなく、筋が充分に呑み込めてゐる譯であるから、三回も繰りかへせば、大抵は出來やうと思ふ。しかし、各回共同一のことを繰りかへしてゐたのでは飽りに曲がなさすぎる。それは例の挿入當嵌法によつて注意を引つけながら進めてゆくのである。例へば、

「いちゐるちちいが……ば」

「……はひだらけ」

最初の第一回は勿論ありのまゝの歌詞を與へ、第二回目からはある部分の歌詞を省略して適當な歌詞を當嵌め、挿入せしめながら進めてゆくのである。省略された部分は腰又は手拍子によつて拍數だけを示して置くことにするのである。譯なく他愛もないものでも、子供達は自分の力で解決してゆくといふことに飽からぬ誇りと興味を持つものであるから、これを旨く利用して、指導を進めてゆくのである。一二三回も繰りかへせば大抵は出來上るものである。そ

こで、今度は第一歌詞からつゞけてみることにする。

一つづゝ歌はせてみると大抵は旨くゆくものであるが、渡けて歌はせてみると、どうも混亂して始末に終へないものである。しかし、くどくなつてはいけない。適當な頃合をみてあつさりと切上げて置き、

(四)既習歌曲の練習……「ヒカーキ」を愉快に斉唱せしむることによつて氣分を變へ、朗らかに本次の練習を終ることにする。

第四次　練　整　理

(一)既習歌曲の練習……「犬」を可愛らしく斉唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 3 2 3 1 | 2 2 3 4 | 5 i 7 6 |
ド　　ミ　　レ　　ソ

7 7 6 6 | 5 6 5 4 | 3 2 3 1 | 2 3 1 0 ‖
ヂ　　ソ　　ミ　　レ

(三)旋律誘導練習……この練習は階名唱法によるほかに歌詞による方法も、一つの手段として面白いやうに思ふ。

例へば、

1 1 2 | · · · | 　と野蕗を沢山、子供達は
サクラ　サクラ

1 1 2 | 3 3 2 |
サクラ　サクラ

5 5 3 2 | 1 1 2 |
キレイナ　サクラ

等と、一つの曲として纏つてゆくから面白いのである。之もくどくなつてはいけないから、あつさりと切上げて置き

(四)教材「花咲爺」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく。子供達は愉快に歌ひあげながら從いて來る。多少の混亂はあらうとは思ふが、元々筋の通つてゐるものであるから、少し落着いて來れば漸次混亂も整つて纏つて來ることゝ思ふ。

なほ、例によつて第一歌詞、第二歌詞の二組に分け、相互口形の運動に注目せしめながら同時に併唱せしむることにする。不安定のものは確實味の多いものに引摺り込まれて、すつかり混亂にたゝき落されるのであるから、一生懸命に自己を護ると共に他に向つて挑戰するので、かうして面白く奪鬪してゐる間に、愈々確實味を加へて來る譯である。しかし、この方法はどうかすると暴聲を張上げる恐が

ある。私はこれを悲鳴と称してオミットすることにしてゐる。これには子供達も困つてゐるやうである。

かうして一通り出來上つたものにさらに分唱、獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合をみて一同起立し、朗らかに齊唱せしめて愉快に本教材の練習を終ることにする。

第二　いうびんあそびの教授

一　教材及指導の要點

「郵便遊び」　小學新唱歌一……三木楽器店發行

(一)區分　二頁　一時間

(二)速度　メトロノーム 100 を以て示してあるから、一つの歌を七秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發聲　輕く可愛らしく、

第一小節及第二小節は、晴やかにゆつたりと取扱ひ、

第三小節から第四小節は、靜かに輕く曲を起して漸次強め加減に取扱ひ、

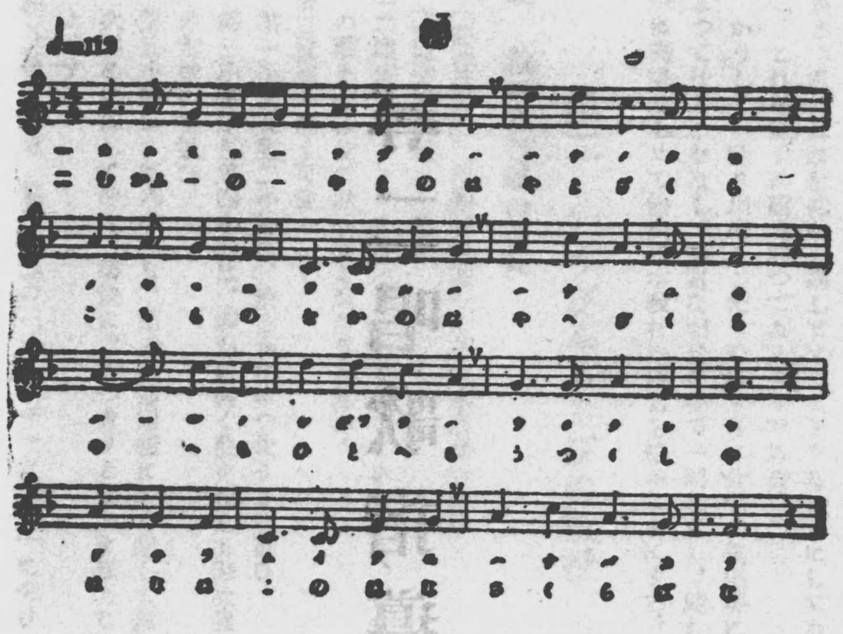
第五小節から第六小節も、前二小節同樣に輕く起して漸次強めに押してゆき、輕快に、すつきりと全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　第三小節の「イソイヂ」を「ソ」に受けるところがかなりに六ケ敷く、大抵は「ラララソーソソ」にならうとする傾向があり、

又、最後の小節「ミミレレミ」が、どうかすると「ラララソ」又は「ララララミ」などになつて、なか〳〵に思ふやうにゆかないものであるから、よく心得て置いてほしいと思ふ。

(五)ククトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は二拍の「ヤ止め」にして輕く「切捨て」

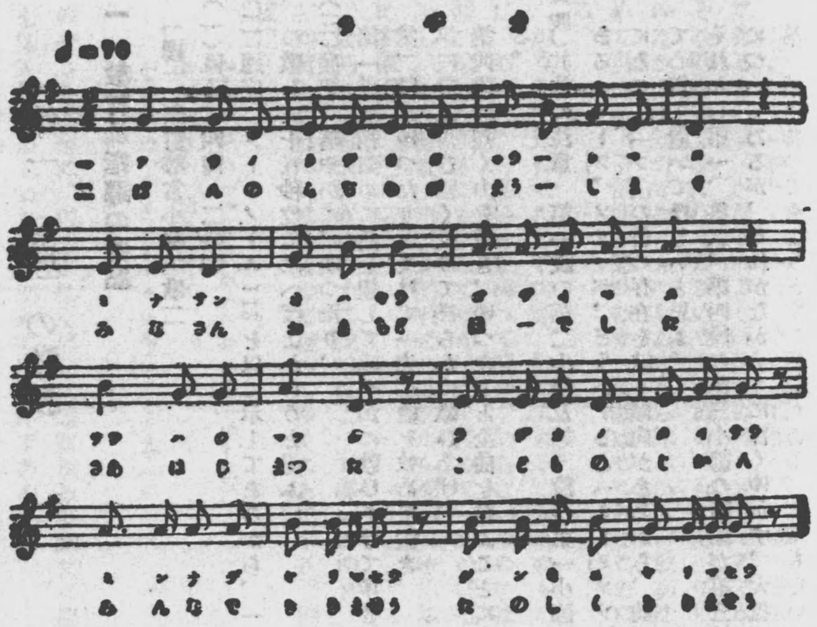
尋二唱歌指導の實際



櫻

一　餅につゞくは花の雲、
　野山につもるは花の雪、
　春の四月はうつくしや、
　どちら向いても花ばか

二　向ふの山は山櫻、
　こちらの岡のは八重櫻、
　八重も一重もうつくしや、
　花はこの花、櫻花。



ラヂオ

一　朝のラヂオが申します、
　「皆さんお早うございます。」
　さあ始まつた、ラヂオの體操。
　みんなでやりませう、
　元氣にやりませう。

二　曉のラヂオが申します、
　「皆さんお待ちどほでした。」
　さあ始まつた、子どもの時間。
　みんなで聞きませう、
　楽しく聞きませう。

第一「櫻」の教授

一　教材及指導の要點

「櫻」　新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム 112 を以て示してあるから、一つの歌を三十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　晴やかに、ゆつたり、

第一段は稍强めに曲を起して晴やかに歌ひあげてゆき、第二段はゆつたりと受けて一先づ曲を收めて置き、第三段は再び强く受けて高らかに歌ひあげ、第四段は輕く力を抜き、ゆつたりと全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意　第一段の第二小節及第三段の第一小節にある「ミーファソソ」が、どうかすると「ミーミ|ソソ」になつて「ファ」の香の存在を缺く傾向があるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

それから第一、第二、第四段の第三小節の附點が第三拍についてゐるが、これがなか〳〵に旨くゆかず、大抵は第一拍に持つて來ようとする傾向がある。無理もないことであるが、これも心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして輕く「流す」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 i | 7 7 0 5 | 0 0 5 4 | 3 4 3 2 |
ド　ど　　ラ　　ら

3 4 5 6 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 2 1 — ||
〃　ソ　　ど　　〃

最初の一音だけは階名を示し、それにつゞく數音は音だけを聽かせて置き、復唱せしむる場合には、全部を階名によつて唱へしめながら進めてゆく方法である。どうせ最初から旨くゆくものではない。大體の見當がついてゐれば滿足することにして、あまり神經過敏にはならずに朗らかに進めてゆくことにする。

(三)教材「櫻」の練習……この歌は隨分古くから歌はれてゐるもので、かなりによく出來てゐると思つてゐるが、その割に旨く歌はれてゐないやうである。しかし、子供達のなかには知つてゐるものもあらうと思ふから、最初は極めて自由に、子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。

かうして知つてゐる子供達、知つてゐるつもりのものには、ある誇りと滿足とを與へて置き、知らないものには大體の輪廓を示すことにして置き、次に更めて一回の範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回はありのまゝに範唱によつて導いてゆき、第二回目からは挿入法によつて進めてゆくことにする。例へば、

3.3 2 1 2 | 3.4 5 5 | 6 6 5.3 | 2 — 0 |
ヤ ヨ ヒ ノ ヤ ヨ ヒ ノ

3.3 2 1 | • • • • | • • 3.2 | 1 — 0 |
ヽ ナ イ ト ヽ ボ ク ヽ　ヽ ト キ

のやうな工合に、省略された部分に適當なる歌詞又は旋律を挿入當嵌めしめながら進めてゆくのである。

歌詞を省略して旋律計りを聽かせる場合には、樂器又は鼻音を以て進めてゆき、旋律を省略する時はその拍子によつて歌詞を讀んで聽かせ、歌詞、旋律を共に省略する場合は、たゞ拍子のみを示して進めてゆくことにする。

子供達は前後の關係から推し、記憶を辿つて適當なる旋律、適當なる歌詞を當嵌めながら謳めてゆくのであるから少しの油斷も出來ない。從つて倦怠がないので効果的である。かうして漸次省略の部分を增してゆくことにして、獨立して歌へるやうに導いてゆくのである。

三回も繰りかへせば、一通りの旋律は謳めることが出來やうとは思ふが、前にも述べた通りに附點の位置と「フ」の音の決定が、なか〳〵に旨くゆかないものである。しかし、あせつても仕方がないから、仕上げは次回にゆづり、今日はあつさりと切上げて、

(四)既習歌曲の練習……得意の一曲を齊唱せしむることによつて機緣を直し、愉快に本次の練習を終ることにする

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 3 5 i 7 | 1 7 7 6 5 | 6 5 5 4 3 | 3 4 3 2 — |
ド　　ド　　ラ　　〃

3 4 5 6 6 | 5 6 7 i i | i 7 6 5 4 | 3 2 3 1 ||
〃　　ソ　　ド　　〃

第一小節の「ドシ」が、三和音の關係から「ドソ」に飛ばうとする傾向があり、又同音を並べることが、何んでもないやうではあるが、最初はなか〳〵に旨くゆかないものであるから、そのつもりで指導してほしいと思ふ。

(二)旋律の誘導練習……これは最初の一小節の旋律を聽かせ、これにつゞく旋律は、たゞ拍子だけを示して置き、その拍子に乘せて、思ひ〳〵の旋律をつゞけさせる練習である。例へば、

5 3 5 5 3 5 | • | • • • • 0 |
ど ん ど ん ど ん ん ん ん ん (着地)

と、いふやうな問題を與へることにすると、子供達は各自思ひのまゝに、

5 3 5 5 5 5 | 1 2 3 5 0 |
• • • • • • | i 7 6 5 0 |
• • • • • • | 3 1 2 3 0 |
• • • • • • | 2 4 3 2 0 |
• • • • • • | 2 3 2 1 0 |

等をつけて來るのである。思ひ〳〵に歌ふのであるから、齊唱にはならない。勿論まち〳〵である。それで宜敷い。强いて揃へる必要はない。かうして問題を入れずグン〳〵と引廻してゆくのである。これによつて音の動きについてある關心をもつ習慣をつくり、理解に導くことによつて、讀譜を助け、作曲にまで導くのである。

(三)教材「櫻」の練習……晴やかに、面白さうに彈いてゆく。子供達も得意になつて從いて來る。大抵は出來てゐやうとは思ふが、例の附點の位置が混亂することであらうと思ふ。二三回指導してみて旨くゆかないやうであれば、「初めは初めを引張り、おしまひは、おしまひを引張る」といふやうにして導いてゆけば、大した困難もなく纏まるものである。但し第三段目は、さうでもないが……

しかし、かうした指導法は最後の場合の手段であつて、出來るならば子供達の理解によつて解決するやうに導きたいものである。決して巧みな指導振りではないが、止むを得ない。

それから「ミーフ|ソソ」の「ファ」の確立は理屈ではゆかない。全く子供の主觀による譯であるから漸次に纏めることにして、一通りのかたをつけて置き、

(四)既習歌曲の練習……例によつて得意の一曲によつて心機一轉、晴やかに本次の練習を結ぶことにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて唱歌氣分をたかめ、本次の學習に進

入る準備とする。

(二)階名讀譜練習

1 3 5 i 7 7 | 6 — 5 — | 6 6 5 4 3 4 | 3 — 2 — |
ド　　ラ　　ド

3 4 5 6 5 6 | 7 — i — | 7 7 6 5 4 3 2 | 1 — 0 ‖
ミ　　ド

二小節づゝを一纏めにすることにはしてゐるが、どうしても旨くゆかないやうであれば、先づ一小節づゝにして、漸次二小節づゝに進めてゆくやうにしてほしいと思ふ。

(三)教材「櫻」の練習……面白さうに晴やかに彈いてゆく、子供達は得意になつて從いて來る。大抵は纏めてゆくことが出來やうと思ふ。一通り歌はせて置いて、途中から階名唱法に導入することにする。大して速い曲でもなく、音程としても左程六ケ敷いものでもないから、何とか揃いて來ることが出來やうと思ふ。揃くといつても正確には出來るものではないが、それは仕方がない。大體の見當がついてゐれば滿足することにして進めてゆき、適當な頃合をみて元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は、子供達の思ひのまゝに、極めて自由に歌はせてみることにする。次に更めて一回範唱を示し、それから一句づゝ歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。もう旋律は出來てゐる譯であるから、それを指導する必要はない。要はこの旋律に對して、新しい歌詞が如何に取扱はれてゐるかである

大して六ケ敷い歌でもないから、三回も繰りかへせば大抵は纏めることが出來やうと思ふ。さらに分唱獨唱によつて仕上げをなし、今度は第一歌詞からつづけて歌はせてみることにする。

別々に歌はせてみれば、極めて順調にいつたものでも、さてつゞけてみると兩歌詞が混亂錯綜してなか〳〵に旨くゆかないものである。しかし、あせつても仕方がないから仕上げは次回にゆづり、心機一轉、

(四)旋律の誘導練習……に機緣を直し、

(五)既習歌曲の練習……得意の一曲を愉快に齊唱せしめ朗らかに本次の練習を終ることにする。

第二「ラヂオ」の教授

一　教材及指導の要點

「ラヂオ」　新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム76を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　ゆつたりと可愛らしく、

第一段は弱めに曲を起して靜かにゆつたりと進めてゆき

第二段は其儘受けて靜かに押へて置き、

第三段はすつかり感じをかへて強く晴やかに、グン〳〵と盛んでゆき、

第四段は前半二小節は強く高らかに歌ひあげ、後半二小節は輕く弱聲に取扱つて、すつきりと全曲を結ぶ事にする。但し、弱聲といつても力を拔かず、充實的弱聲といつたやうな、力のこもつた弱聲にしてほしいと思ふ。

(四)其他の注意　第一段の第三小節「レミドラ」が、大抵の場合「ドミドラ」になつて「レ」に上り切れない傾向があり、又

第二段第二小節「ドミミミー」が、どうかすると「ドレミミー」にならうとする傾向があるから、心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は四拍或は二拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「櫻」を晴やかに齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 i | 7 7 6 5 | 6 6 5 4 | 3 4 3 2 |
ド　　ラ

3 4 5 6 | 5 6 7 i | 7 6 5 4 | 3 2 1 — ||
ミ　　ド

(三)教材「ラヂオ」の練習……この歌は發表せられてからまだ新しいだけに、知つてゐる子供も尠からうと思ふ。兒童に角、最初は面白さうに彈いてゆき、子供の思ひのまゝに極めて自由な氣持によつて歌はせてみることにする。

次に更めて範唱を示し、それから、一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。最初の一回はありのまゝの範唱によつて導いてゆき、第二回目からは前教材同樣に、適當に省略挿入法を用ひて、子供達の注意を引締め〳〵面白く進めてゆくことにする。

大して六ケ敷い歌とは思はないが、第一段の第三小節の「レ」で受けるところが、どうも旨くゆかない場合が多い。之は二三回繰りかへしても旨くゆかない時には、第二小節と第三小節との間を暫く置いて、更めて出直すやうな心持で受けるやうにすれば、大抵は纏まるものである。

それから、第二段の第二小節「ドミミミー」が「ドレミミー」にならうとするのも止むを得ないが、これは二三回も繰りかへせば、大した問題ではない。

次は第三段の第二小節にある、八分の休止を保つことである。これがまた、なか〳〵厄介なものである。しかし、この休止によつて、たまらない可愛らしさと、味が出る譯であるから、これをごまかさないやうに叮嚀に取扱つてほしいと思ふ。

兎に角、大して六ケ敷いものでもないから、三回も繰りかへせば、一通りは纏めることが出來やうと思ふ。

(四)旋律の誘導練習……によつて氣分をかへ、

五)既習歌曲の練習……得意の一曲を齊唱せしむることによつて、愉快に本次の練習を終ることにする。

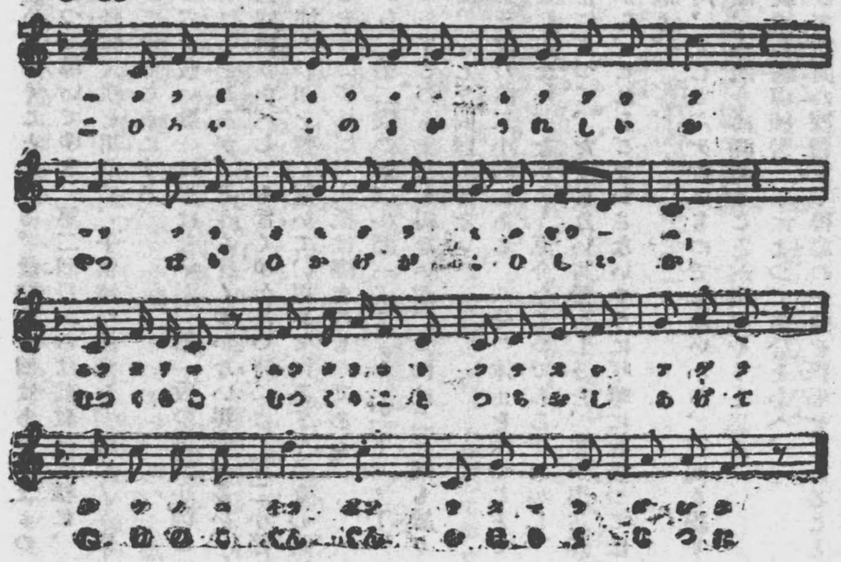
第二次　第一歌詞の整理
第三次　第二歌詞
第四次　總整理

「ラヂオ」指導上の注意

(一)ラヂオは近來頓に進歩發達した文明の利器である。大正の終り頃から發達したラヂオは、急激に今では如何なる山間僻地でもきかれるやうになつた。兒童にとつてはその生活に最も近接した教材である。特にラヂオのないやうなところでは、學校にラヂオを設置して直觀させることが大切であらう。

(二)歌詞は七五、七五、七七、七八調の混合形式で、四句二節からなつてゐる。第一節は朝のラヂオ體操の時間のことを歌ひ、第二節は夕方の子供の時間のことを述べたものである。「オマチドホデシタ」「はオマチドホサマデシタ」といふところ。この教材は「ラヂオ體操の歌」とむすびつけて、あくまでたのしく愉快に歌ふやうに導くことが大切である。

竹の子

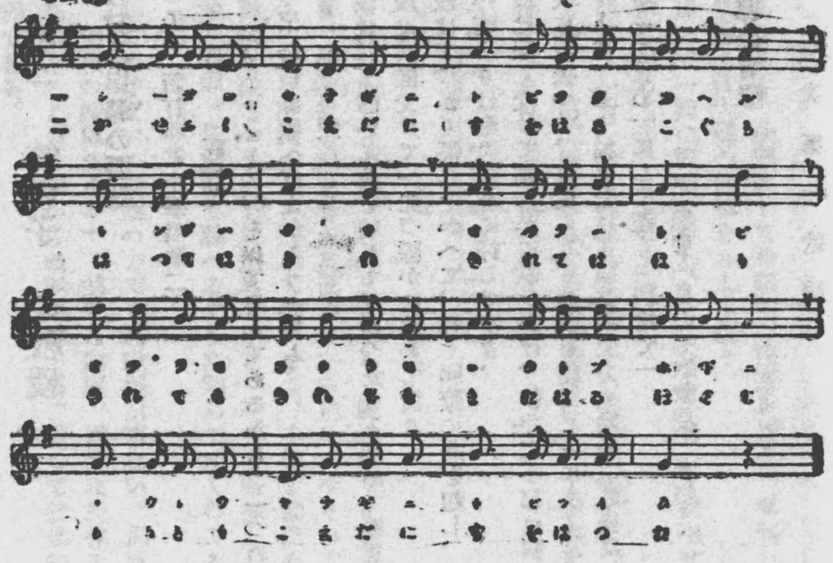


竹の子

一　くらいおうちの戸をあけて、
　こつそりおもてを見るやうに、
　むつくりこ、むつくりこと
　土おしあげて、
　竹の子一本頭を出した。

二　廣いこの世がうれしいか、
　やつぱり日影がこひしいか、
　むつくりこ、むつくりこと
　土おしあげて、
　竹の子ぐんぐん大きくなつた。

蛙と蜘蛛



蛙と蜘蛛

一　しだれ柳に
　飛び着く蛙、
　飛んでは落ち、
　落ちては飛び、
　落ちても、落ちても、
　また飛ぶほどに
　とうとう柳に
　飛びついた。

二　風吹く小枝に
　巣を張る小蜘蛛、
　張つてはきれ、
　きれては張り、
　きれても、きれても、
　また張るほどに、
　とうとう小枝に
　巣を張つた。

第一「竹の子」の教授

一　教材及指導の要點

「竹の子」　新訂尋常小學唱歌二

(一)配分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム84を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕く可愛らしく、

第一段は弱く靜かに曲を起して、ゆったりと進めてゆき

第二段は其儘受けて一先づ靜かに收めて置き、

第三段はすつかり感じをかへて、輕く明瞭に曲を起し、

第三小節よりは漸次强めに押してゆき、

第四段は强く受けて高らかに歌ひあげ、後半二小節は弱く輕快に取扱つて、可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は四拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ラヂオ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に導入する準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 6 | 5 5 5 5 | 6 6 7 7 | i i i —|
ド　　ソ　　ラ　　ド

i i 7 7 | 6 7 6 6 | 5 4 3 2 | 1 1 1 0 ||
ド　　ラ　　ソ

第一小節の「ドミソラ」の「ラ」の音が、どうかすると「ド」に飛び上らうとする傾向がある。三和音の關係で無理からぬことではあるが、この矯正も本課の目的の一つであるから、その心持で取扱つてほしいと思ふ。

それから、同音の繰りかへしである。これが何でもないやうで、なか〳〵に馬鹿にならないものであるから、其心組で當つてほしいと思ふ。

(三)教材「竹の子」の練習……この歌詞は發表せられてから間もないものであるから、知らない子供が多からうと思ふ。しかし、二三は歌へる子供もあらうと思ふから、最初は子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。即ち面白さうにダン〳〵と彈いてゆくのである。歌へる子供達は勝手に從いて來る。

かうして歌へるもの、歌へるづもりの子供達にある滿足を與へると共に、全體としての既習の程度を探り、又知らない子供達には大體の輪廓を示して置き、

次に更めて一回の範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

第一回目は一音一句も省略しない、その儘の範唱によつて導いてゆき、第二回目からは省略省欠法によつて指導を進めてゆくことにする。例へば

0 1 1 1 | 7 1 2 2 | 1 2 3 4 | 5 0 |
ド　　ラ　　ソ　　ド

と、いふやうな工合に、歌詞を省略し、旋律計りを聽かせて置き、適當な歌詞を挿入當欠めながら進めてゆくのである。ある時は歌詞のみを讀んで聽かせて、旋律を當欠めしめる方法を採るやうにして進めてゆき、漸次省略挿入の部分を多くして、獨立して歌へるやうに導めてゆくのである。

かうしてゆけば、子供達の方でも油斷が出來ない。記憶を辿り、前後の關係からみて、適當な歌詞、適當な旋律を挿入することによつて飽からぬ興味がある。從つて効果的である譯である。

しかし、この歌は相當に六ケ敷い。第一段の第二小節の「シ」の音、第三段の第二小節、第四段の後半二小節「ソレドレ、ミミド」等はなか〳〵に六ケ敷く、大抵は「ソドシド、ミレド」等にならうとする傾向があつて、どうも思ふやうにゆかないものである。しかし、あせつても、どうにもなる譯ではないから、仕上げは次回にゆづり、

(四)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に、朗らかに本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

(一)階名翻譯練習

1 3 5 6 5 | 6 5 6 5 | 6 5 6 7 7 | i i i 0 |
ド　　ラ　　ラ

i 7 i 7 7 | 6 7 6 5 5 | 6 5 4 3 3 | 4 3 2 1 0 ||
ド　　ラ　　ラ　　ファ

(二)旋律誘導練習……これはある旋律の一部分を示し、それにつゞくものはたゞ拍子だけを示して置き、その拍子に乘せて適當なる旋律を思ひ〳〵につゞけさせる練習である。例へば

5 5 3 5 | · · | · · · 0 |
ソソミソ　ポポポポ　（唱う時）

と、いふやうな工合に問題を提供すると、子供達は思ひ〳〵に

5 5 8 5 | i 7 6 5 0 |

6 i 6 5 0 |

3 1 2 3 0 |

2 4 3 2 0 |

2 3 2 1 0 |

などと受けて來るのである。大勢が思ひ〳〵に受けて來るので一齊になる譯にはゆかない。それは止むを得ないことで、又そこに面白味もある譯である。

かうして拍子に變化をつけ、いろ〳〵に問題を取替へてゆけば相當に面白い練習が出來るのである。この練習によつて子供達は普の動向にある理解が與へられ、拍子の變化に注意することから理解に導かれるやうなもので、これが他日讀譜を助け、作曲となるべき萌芽となることは勿論である。

(三)教材「竹の子」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供も得意になつて從いて來る。しかし、大抵は前述の誤りを繰りかへすことであらうと思ふ。

最も困難なのは第三段の第二小節を受けるところ。これは第一小節を歌つて、しばらく息を抜き、更めて第二小節を受けるやうにすればかなりやさしく謂まるやうに思ふ。かうして一通り謂めて置いて、後は繰りかへして謂れるやうに練習することである。しかし、同じものを繰りかへすのでは倦が來る。そこで、

「ムックリコ、ムックリコト……」

「ヤッコラショ、ヤッコラショト……」

「ドッコイショ、ドッコイショト……」

「エンヤラヤ、エンヤラヤト……」

「イマイクソ、イマイクソト……」

など子供の感興をひきさうな言で以て、取りかへ〳〵繰りかへすやうにすれば、面白くヤイヤイいつて喜んでゐる間に出來上るものである。なほ、分唱、獨唱等によつて謂さりをつけ、適當な頃合を見計つて、

(四)既習歌曲の練習……「ラヂオ」を晴やかに齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて學習氣分をあふり、本次の練習に導入る準備とする。

(二)階名調譜練習

1 3 5 6 5 5 | 6 5 6 7 i i i | i i 7 7 6 5 |

6—5 4 | 3 4 5 6 5 5 4 3 | 2—1—‖

(三)教材「竹の子」の練習……例によつて朗らかに彈いてゆく……子供達も、大抵は大丈夫、諳しさうに歌ひあげながら從いて來る。一通り引廻して置いて、適當な頃合をみて階名唱法に導入することにする。

相當に六ケ敷いものである。なか〳〵に容易に捌いてゆけるものではない。しかし、あまり面倒に考へないで、かうした習慣をつける位の考へでグン〳〵と進めてゆくことにする。子供達はまことに調法なもので、正確味三分に誤り七分位の割合で、平氣で捌いてゆくから可愛いものである。いつまでも三分七分の割合でゆくものではない。四、六に進み、五、五に押しつけ、漸次謂さつて來るものであるから、かうした練習に興味を持たせ、關心を持たせて習慣に導き、生活に繰り込むのを目標として、餘り神經過敏にならないやうに、大局からみて漸次遠卷きに謂めるやうに取扱つてほしいと思ふ。……兎に角、かうして一耳り引廻してから、元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に這入ることにする。

最初は極めて自由に、子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。

次に更めて一同の範唱を示し、それから一句づゝの歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を付し復唱せしめながら進めてゆくことにする。

旋律は一通り出來てゐる譯であるから、こゝでは其指導を繰りかへす必要はない。要は新しい歌詞を如何に旋律に當嵌むべきかゞ殘されてゐる問題である。あたら、この大切な問題を教師の方で解決して置いて、其結果を子供に押しつけるやうでは、子供達の方では、全く立場がない譯である。要らない世話は差控へた方が宜敷い……。

大して六ケ敷いものでもないから、二三回繰りかへせば大抵は謂めることが出來やうと思ふ。

さらに幾組かに分けて歌はせてみて訂正を施し、なほ獨唱等によつて仕上げをなし、愈々謂さつたところをみて、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

第二歌詞だけ練習した場合は聊かの危つ氣もなく片づいたものが、さて、第一歌詞からつゞけてみると、なか〳〵に旨くゆかないもので、大抵は兩歌詞が錯綜混亂して始末に終へないものである。然し、くどくなつてもいけないか

ち、仕上は次回にゆづり

(四)既習歌曲の練習　子供達の得意の一曲を斉唱せしむることによつて氣分を更へ、愉快に晴やかに、本次の練習を終ることにする。

第二「蛙と蜘蛛」の教授

一　教材及指導の要點

「蛙と蜘蛛」　新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム80を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　ゆつたりと落つきを以て、

第一段は靜かに曲を起してゆつたりと運んでゆき、

第二段は强く明瞭に取扱つて高らかに歌ひあげ、

第三段は稍力を抜いでゆつたりと揃いてゆき、

第四段は共鳴受けて輕くゆつたりと全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意、第一段の第二小節「ラソソド」の「ラ」に受けるところが相當に六ケ敷く、大抵は「ソソソド」とならうとする傾向があるから、前以て注意して置いて

ほしいと思ふ。

それから、第二段の第二小節「レド」に受けるところが「ミド」に、

又、第四段第一小節「ドードシラ」がどうかすると「ドードドラ」になつてなか〳〵「シ」の音が明瞭に保てないものであるから、これらも前以て心得て置いてよからうと思ふ。

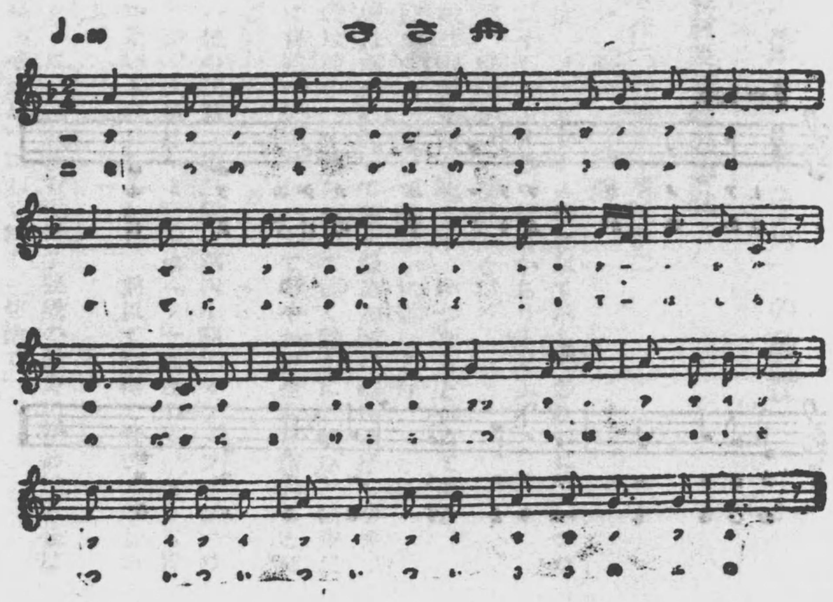
(五)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして、輕くゆつたりと「切捨て」

二　階名譜譜練習

(1) 1 8 5 6 | 5 5 5 5 | 6 6 7 7 | i i i 0 |
　　ド　　ラ　　　　　　　　　　　　　　
　　i i 7 6 | 5 6 5 5 | 6 5 4 3 | 2 2 1 0 ‖
　　ド　　ラ

(2) 1 8 5 4 | 3 4 3 3 | 2 1 2 3 | 2 2 2 0 |
　　ド　　ミ　　ヒ　　ヒ
　　3 4 5 5 | 6 6 5 4 | 3 4 3 3 | 2 2 1 0 ‖
　　ミ　　ラ　　ミ　　ヒ

ささ舟

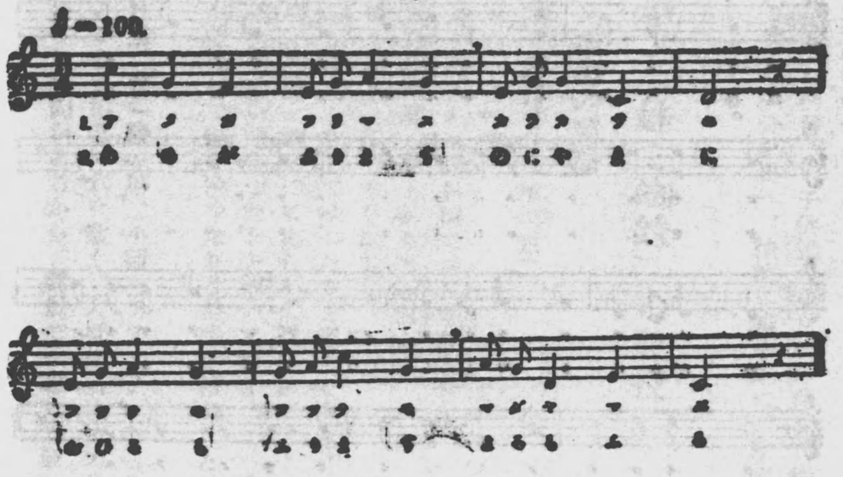


一　なつの　小川の
　　ささのふね、
　　風に　ふかれて
　　どこまではしる。
　　ふの花　よけろよ
　　そつちはあさいぞ。
　　ついつい　ついつい
　　ささのふね。

二　なつの　小川の
　　ささのふね、
　　風に　ふかれて
　　どこまではしる。
　　めだかに　まけるな
　　こつちはふかいぞ。
　　ついつい　ついつい
　　ささのふね。

雨

♩=100



雨

一　雨が　ふります
　　からかさ　に
　　ふつて　も　ふつて　も
　　まだ　やまぬ。

二　雨が　ふります
　　野　に　山　に
　　おひる　も　ふります
　　よる　も　ふる。

第一　「ささ舟」の教授

一　教材及指導の要點

「ささ舟」　新尋常小學唱歌二

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム80を以て示してあるから、一つの歌を二十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　晴やかに、伸びりと、

第一段は弱聲に曲を起して、ゆつたりと進めてゆき、

第二段は強めに受けて晴やかに歌ひあげ、

第三段は靜かに起して漸次強め加減に歌ひあげてゆき、

第四段は前半二小節を極めて弱く靜かに取扱ひ、後半二小節は普通の強さにかへして晴やかに全曲を結ぶことにする。

(四)其の他の注意　第三段の第四小節「ミ|ファ|ファ|ソ」の「ファ」が、大抵は「ミ」或は「ソ」になつて、どうも旨くゆかないものであるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受ける強聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く一切拾て」

二　指導の實際

編著「私の唱歌教授」參照

第一次　第一　歌詞

(一)既習歌曲の練習……「蛙と蜘蛛」を晴やかに齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名讀譜練習

1 3 5 4 | 3 4 3 2 | 2 1 2 3 | 2 2 2 0 |
ド　ミ　ソ　ミ　ド　ド

3 4 5 6 | 6 6 5 4 | 3 4 3 2 | 2 2 1 0 ||
ミ　ソ　ソ　ミ　ド

(三)教材「ささ舟」の練習……この曲はかなり面白く出來てゐる、立派なものだと思つてゐる。隨分音く歌はれてゐるやうであるから、知つてゐる子供も多くはなからうと思ふ。最初は例によつて、子供達の思ひの儘に、自由に歌はせてみることにする。

次に一二回の範唱を示して大體の輪廓を與へて置き、それから一句づつ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は其儘の範唱によつて導いてゆき、第二回からは省略法によつて、適當に補填させながら謂めてゆくこ

とにする。例へば、

3 5 5 | 6.6 5 3 | 1.1 2 3 | 2.0 |
ナツノ ワガヤノ

3 5 5 | 6.6 5 3 | ・・・・ | ・・・0 |
ゆれも　　ゆれもゆれて

と、いつたやうな工合に、あるところは歌詞を省略し、ある部分は旋律を省略し、その省略せられた部分に、適當に歌詞又は旋律を常欽め、挿入せしめながら進めてゆくのである。

歌詞の省略せられた場合は、楽器又は鼻音唱法によつて旋律のみを聴かせて置き、旋律の省略せられた場合には、其拍子に乗せて歌詞を讀んで聴かせるのである。又この二つを省略する場合は拍子のみを（鞭音によつて）聴かせて復唱させることにするのである。

かうして進めてゆけば子供達の方では油斷が出來ない。又、適當に常欽めてゆくところに興味があるから倦怠がない。從つて効果的である。

かうして三四回も繰りかへしてゆけば一通りを覺めることが出來やうと思ふ。しかしくどくなつてはいけないから仕上げは次回にゆづり、

（四）既習歌曲の練習……「竹の子」を晴やかに齊唱せしむることによつて氣分をかへ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

（一）階名翻譯練習

1.3 5 4 3 | 3 4 3 2 — | 2 1 2 3 4 | 3 3 2 0 |
ド　　ミ　　レ　　ミ

3.4 5 6 5 | 6 5 6 5 4 | 3 4 3 2 2 | 1 — 0 ||
ド　　ラ　　ミ

（二）旋律誘導練習……これは旋律の一部分を示し、これにつゞくものは拍子だけを聴かせて置き、その拍子に乗せて適當なる旋律を思ひ〳〵に續けさせる方法である。例へば、

3 1 2 3 5 | ・ ・ ・ 0 | 0 西風が圧ふく
ミ ドレミソ　ミミミミ　（竹の子をたゝへる）

| 6 i 6 5 0 |

| i 7 6 5 0 |

| 2 1 2 3 0 |

| 6 5 3 2 0 |

| 2 3 2 1 0 |

等と思ひ〳〵に續けて來るのである。勿論思ひ〳〵であるから齊唱といふ譯にはいかない。そこに又面白味もある譯である。

かうした練習によつて知らず識らずの間に旋律の動きといふものによる理解を持つことによつて、讀譜、作曲の基礎としてかなりに重要なる役割を務めてゐる譯である。

（三）教材「ささ舟」の練習……一二回歌はせてみることにする。大抵は片づけて來ることが出來やうとは思ふが、どうかすると第三段の第四小節の「ファ」の音が明瞭を缺く恐があらうと思ふ。二三回指導してみても旨くゆかないやうであれば、階名を使用し、これと比較させながら進めてゆけば、大したことはなく覺めることが出來やうと思ふ。例へば、

「レードレ、ミファソ」

「レードレ、ミファファソ」

「ソツチヘ、アサイソ」

この三つを數回繰りかへさせてみると、其の内には安定して來るものである。なほ分唱獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合を見て一同起立し、晴やかに齊唱せしめて本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

（一）階名翻譯練習

1 3 5 4 3 4 | 3 — 2 — | 2 1 2 3 4 3 | 2 — 0 |
ド　　ミ　　レ

3 4 5 6 5 5 | 6 — 5 4 | 3 4 3 2 3 2 | 1 — 0 ||
ミ　　ラ　　ミ

（二）旋律誘導練習

（三）教材「ささ舟」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供達は得意になつて歌ひあげながら從いてくる。一通り歌はせて置いて途中から階名唱法に導入することにする。六ケ敷い曲ではないが、滿足に歌つて來ることは出來なからうと思ふ。それは仕方がない。大體の見當がついてゐれば辛抱することにして朗らかに進めてゆくのである。神經過敏になつて、イラ〳〵してみたところで、どうにもなるものではない。「鳴くまで待たう時鳥」朗らかに進めてゆく事である。その内に漸次正確味が加はつて來るから可愛いものである。……かうして一耳り引廻して元の歌詞にかへして牧めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて一回の範唱を示し、それから一句づゝの歌詞を讀んで聴かせては、それに旋律を常欽め從唱せしめながら進めてゆくことにする。

旋律は出來てゐる譯であるから、こゝでは其必要はない新しい歌詞を如何に旋律に當嵌めてゆくかに子供達の工夫が殘されてゐる譯である。……といつても、第二歌詞に於て新しい部分は第三段目の一句に過ぎないのである。しかし、これをいつて仕舞つては面白くない。新しいものとして迎へさせ、これを見出させるところに面白味があり、又價値もある譯である。要らない言語はなるべくやらないことである。「年寄りの子は三文やすい」とは、かうしたところをいつたものであらうと思ふ。兎に角、變つた部分は三段目の一句、二三度も繰りかへせば、譯なく覺まるものである。

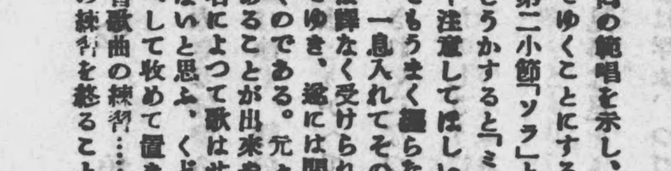
そこで、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせることにする。……僅かに一句の相違、譯なく片づくものと思つたゐれば大間違、三段目に來てペタト變へてゆくことがなかなかに六ケ敷く、ばうもうなくゆかないものである。しかしあせつても仕方がないから、あつさりと切上げて、心機一轉！

(四)既習歌曲の練習——「蛙と蜘蛛」を朗かに齊唱せしむることによつて氣分をかへ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　練　習　理

(一)既習歌曲の練習……「ラヂオ」を可愛らしく齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり本次の學習に進入することにする。

(二)階名翻譯練習



(三)旋律の誘導練習

(四)教材「さき舟」の練習……「二回歌はせてみる事にする。第三段目のところがうまくゆかないであらうと思ふ。そこで今度は、全體の子供を立たせて置き第一歌詞、第二歌詞の進行を與へすにダン〳〵と進めてゆき、第三段目に移らうとする勢つかけをみて、

「第一……或は第二……

と、いよやうな工合に先を示すことにする。子供達はこの間髪を入れない、突嗟の間に見當をつけ捌いてゆくのである。若しも間違つたり、間違ついたりしたものは罰をかけることにする。子供達は面白がつて、ヤイ〳〵と言んでゐる。しかし一生懸命である。……何といつても僅かに一段の問題、其間には安定するものである。さらに分唱、獨唱

等によつて調まりをつけ、適當な頃合をみて一同起立し、心ゆく許りに歌ひあげて本次の練習を終ることにする。

第二「雨」の教授

一　教材及指導の要點

「雨」　小學新唱歌二

(一)區分　三回　一時間半

(二)速度　メトロノーム100を以て示してゐるから、一つの歌を十五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕くゆつたりと、

第一段は晴やかに曲を起して、輕くゆつたりと進めてゆき、

第二段は弱く受けて漸次强め加減に歌ひあげてゆき、輕く最後を結ぶことにする。

(四)タクトは、第一拍を受ける强弱の受方に始め、最後は「元止め」にして輕く「流す」

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「さき舟」を愉快に齊唱せしむることによつて學習氣分に導き、本次の練習に移る準備とする。

(二)旋律の誘導練習

(三)教材「雨」の練習……この歌は餘分古くから歌はれてゐるものではあるが、あまり音く知られてゐないやうである。しかし、知つてゐるものもあるかも知れない。兎に角、最初は彈きながら、思ひのまゝに歌はせてみることにする。

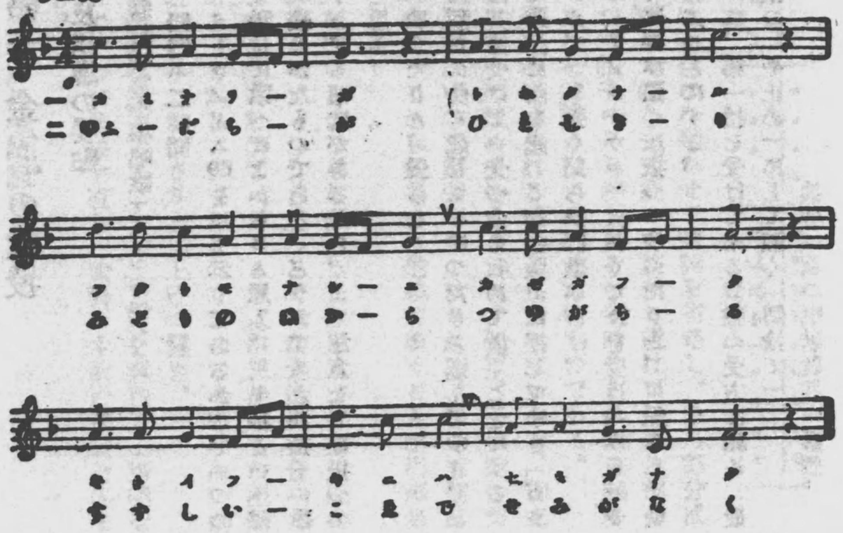
次に一回の範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。何んでもないやうであるが、第二段の第二小節「ソラ」と受けるところがなか〳〵うまくゆかず、どうかすると「ミソ」に下らうとする傾向があるからよく〳〵注意してほしいと思ふ。

どうしてもうまく謳らない樣であれば、第一小節を歌はせてから、一息入れてその高度を捉へて第二小節を起すやうにすれば譯なく受けられるものである。かうして漸次其間を縮めてゆき、遂には間隔を置かずに續けさせるやうに導いて行くのである。元々あまり六ケ敷い曲ではないから大抵は覺めることが出來やうと思ふ。

次に階名によつて歌はせてみることにする。どうせうまくはゆかないと思ふ、くどくならない程度に切上げて元の歌詞にかへして收めて置き、

(四)既習歌曲の練習……「蛙と蜘蛛」を齊唱せしめて愉快に本次の練習を終ることにする。

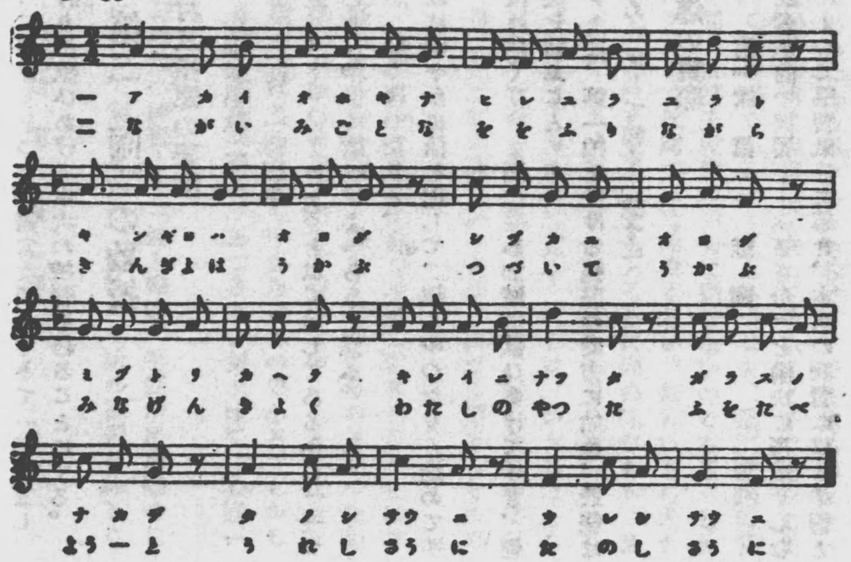
蟬



一　かみなりが
　遠くなる。
　　吹くともなしに、風が吹く。
　　木といふ木には、蟬がなく。

二　夕立が
　ひとしきり。
　　みどりの葉から、露がちる。
　　涼しい聲で、蟬がなく。

金魚



一　赤い大きな鯖ゆらゆらと
　金魚は泳ぐ、靜かに泳ぐ、
　　水とりかへて
　　きれいになつたガラスの中で、
　　たのしさうに、うれしさうに。

二　長い見事な尾をふりながら
　金魚は浮ぶ、つづいて浮ぶ、
　　皆元氣よく
　　私のやつた餌をたべようと、
　　うれしさうに、たのしさうに。

第一「金魚」の教授

一　教材及指導の要點

「金魚」新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　四四　二時間

(二)速度　メトロノーム69を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ。三十秒といへばかなりに緩やかなものである。どうかすると四拍子に歌はれやうとする傾向があるから、よく注意して取扱つてほしいと思ふ。

(三)發聲　ゆつたりと可愛らしく。

第一段は靜かに曲を起して、ゆつたりと運んでゆき、第二段は其後受けて一先づ曲を收めて置くことにする。第三段は腸聲に曲を起して漸次强めに押してゆき「ガラスノナカヂ」を强く朗らかに歌ひあげ、

第四段の「クノシナウニ」は弱くこれを受け「ウレシナウニ」は再び强く取扱つてゆつたりと、可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)ククトは、第一拍を受けて來る强聲の受方に始め、最後は四拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

抽著「私の唱歌教授」參照。

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「雨」を齊唱せしむることによつて學習氣分に導き、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 i 7 6 | 5 5 6 6 | 5 4 3 2 |
ド・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ |

3 4 5 6 | 5 i 7 6 | 5 4 3 3 | 2 2 1 — |
ミ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ | ド・・・ |

(三)教材「金魚」の練習……この歌は發表せられてからまだ間もないものであるから、知つてゐる子供も尠からうとは思ふが、兎に角、最初は極めて自由に彈いて聽かせて、子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。

次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は其後の範唱を與へることにするが、第二回目からは例によつて、省略當欲め法によつて運めてゆくことにする。例へば

3 5 4 | 3 3 3 2 | 1 1 3 4 | 5 6 5 0 |
ア ル イ | キキキキ | ・・・・・ | ・・・・・ |

| 3 2 1 0 |
| ・・・・・ |

| 3 3 3 3 |
| キ ク キ ン |

ある部分は旋律のみ聽かせて歌詞を省略し、ある部分は歌詞のみを讀んで聽かせて置いて旋律を避け、又ある部分は發音によつて拍子のみを示し、その省略せられたる部分に適當なるものを當嵌めながら運めてゆくのである。

かうして漸時省略せられる部分を增加していつて、獨立して歌ひ得るやうに進めてゆくことにすれば、子供達の方では油斷が出來ないので緊張がつよけられる。從つて能率がなく、面白く、しかも効果的に進めてゆくことが出來る譯である。

大して六ケ敷いところもなからうとは思ふが、第一段の第三小節「ドドミファ、ソラソ」のところが大抵の場合「ドレミファ、ソラソ」になつて「ドドミファ」が、かなりに困難のやうである、しかし、あまりくどくなつてもいけないから適當の頃合をみてあつさりと切上げて置き、

(四)既習歌曲の練習……「さき山」を氣持よく齊唱せしむることによつて餘韻を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の練習

(一)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 i 7 6 | 5 5 6 5 | 5 4 3 2 —
ド・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・

3 3 4 5 | 5 i 7 6 | 6 5 6 5 | 3 2 3 1 —
ミ・・・・ | ソ・・・・ | ラ・・・・ | ミ・・・・

(二)旋律誘導練習……これはある旋律の一部分を示し、これにつゞくものは拍子だけを聽かせて置き、その拍子に乘せて思ひ〳〵に適當なる旋律を續けながら歌ふさせるものである。例へば

i 7 6 5 | 3 ♯ ♯ ♯ ♯ | といつたやうな問題を與へたとする。さうすれば子供達は

i 7 6 5 | 3 i 6 5 0 | と受けるもの、或は

・・・・・・ | 2 3 4 3 0 | 又は

・・・・・・ | 5 4 3 2 0 | 或は

・・・・・・ | 2 3 2 1 0 | 等と

思ひ〳〵に受持て來るのであるから、齊唱といふ譯には

ゆかない。しかし、そこに又面白味もある譯である。

かうした練習によつて、いつとなく旋律の動向によつてある理解を與へ、又これについての關心を持つことによつて彼等に音樂的理解を深め、作曲、讀譜を進める上に多大の効果をもたらすもので、なか〳〵に馬鹿には出來ないものである。

(三)教材「金魚」の練習……一二回歌はせてみる事にする。大抵は何とか掴いてゆくことが出來やうとは思ふが、時によれば第一段の第三小節、例の「ドドミファ」のところがうまくゆかないやうな場合があらうと思ふ。

二三回繰りかへしてみるもうまくゆかないやうであれば例によつていろ〳〵に歌詞を取替へて繰りかへさせることにする。例へば

「ヒレュラュラト」
「フフュラュラト」
「フラブラブラト」
「メフキ・ロキ・ロト」
「ドドミファソラソ」
「ヨクヂキマシタ」
「ヒレュクュラト」

と、いふやうな工合に、子供達の感興をひきさうな言葉を取替へ引替へ繰りかへしてゆけば、子供達も興味につられて、知らず〳〵の間に覺められてゆくのである。

かうして一通り覺まつたところをみて、さらに分唱獨唱等によつて仕上をなし、適當なる頃合をみて、

(四)既習歌曲の練習……「雨」を輕く可愛らしく齊唱せしめて、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「蛙と蜘蛛」を齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名調譜練習

(三)旋律誘導練習

(四)教材「金魚」の練習……一二回齊唱せしめてみることにする。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。

今度は階名唱法によつて歌はせてみることにする。極めてゆつくりした曲であるから、何とか見當位はつけて來る

ことが出來やうと思ふ。勿論正確に掴いてゆくことは六ケ敷からう、それは致方はない。多少でも見當がついてゐれば滿足することにしてダン〳〵進めてゆく……。一耳り引離してから、元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は一回の範唱を示し、それから一句づつの歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。もう旋律は出來てゐる譯であるからそれを指導する必要はない。新しい歌詞を如何に旋律に當嵌めるかゞ疑されてゐる問題である。要らない世話は出來るだけ排除へるやうにしたいものである。……二回も繰りかへせば一通りは纏めることが出來やうと思ふ。

尙分唱獨唱等によつて仕上げをなし、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。第一歌詞の「金魚は泳ぐ」と、第二歌詞の「金魚は浮ぶ」のあたりから兩歌詞が混同錯綜し始めて、なか〳〵に思ふやうにゆかないものである。しかし、あせつてもどうにもならないから、仕上げは次回にゆづり、

(五)既習歌曲の練習……「さざ舟」を晴やかに齊唱せしむることによつて氣分をかへ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　練習

(一)既習歌曲の練習……「雨」を齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に進入る準備とする

(二)階名調譜練習

(三)旋律問答……これは旋律誘導と同趣のものではあるが、團體的に取扱ふ譯にはゆかない。どうしても「人づゝ」を相手にして進めてゆかねばならぬところに、多少の困難があり又面白味もある譯である。

即ち、教師はある旋律の一句を子供に投げる。子供はそれに適當する旋律を以てこれを受ける。教師は又それを受けて問題を與へる。かうして受けつ答へつ進めてゆくものである。例へば

教 1.3 5 5 | 6 i 6 5 — | と問題を投げると
児 6.5 3 1 | 2 — ・0 | と答へて來る、更に
教 6.5 6 5 | i 7 6 5 3 | とつゞけてゆけば
児 2.2 3 2 | 1 — ・0 | と纏めて來る

二小節づゝを一纏めにすることが六ケ敷いやうであれば先づ一小節づゝから弾らしてゆくやうにすればよからうと思ふ。

（四）教材「金魚」の練習……一二回斉唱せしめてみる事にする。第一歌詞は簡単であらうとは思ふが、第二歌詞になると混乱してうまくゆかない場合が多かちうと思ふ。そこで、今度は第一歌詞から引離してさらに練習を重ねることにする。一通り謳まつたところをみて、第一歌詞と第二歌詞の二組に分け、例によつてこれを同時に併唱せしむることにする。

これは相互相手方の目形に注目せしめて歌はすることにすれば一層効果的であり、又面白いやうに思ふ。不安定なものは興味の多いものに引摺り込まれて、何と歌つてゐるのか分らないまでに、混乱にたゝき落されるのであるから、子供達は一生懸命に自分を張り、他を切りくづすことに努めるのである。

かうして相互に張りかへしてゆけば、大抵は謳めることが出来やうと思ふ。

この曲はかなりにゆつくりとした曲である。謳れる上手つて来くなり、調子がかかつて来るにつれて、興味的になちうとする傾向がある。この点には附説がなく、ゆつたりと運んでゆくところに特長があり、ゆつたりとした味が出る謳であるから、この節をよく心して指導を進めてほしいと思ふ。急々謳まつたところをみて心機一転！　一同を起立せしめて充分に歌ひあげ、時決に本例の練習を結ぶことにする。

第二「蝉」の教授

教材及指導の要點

「蝉」新訂唱歌小學唱歌二

（一）區分　三回　一時間宛

（二）速度　メトロノーム96を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

（三）音想　明やかに、

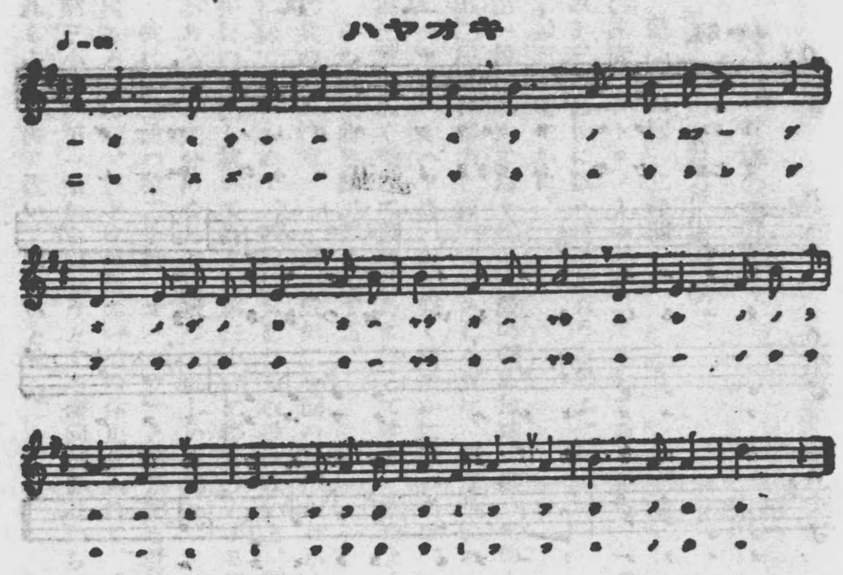
第一段は強く曲を起して明やかに進めてゆき、

第二段はぐつと力を抜いて優しく受けて静に進んでゆき

第三段は強く明やかに歌ひあげ、後半二小節は軽く静かに取扱つて、ゆつたりとすが〳〵しく全曲を結ぶことにする。

（四）其他の注意……第一段の第三小節、第三段の第一小節「ミーミレドミソー」が、大抵は「ミーミレドレソー」になちうとする傾向があるから前以て注意してほしい。

（五）クタトは、第一拍を受ける気持の変方に慣れ、最後は「元止め」にして静かに「終す」

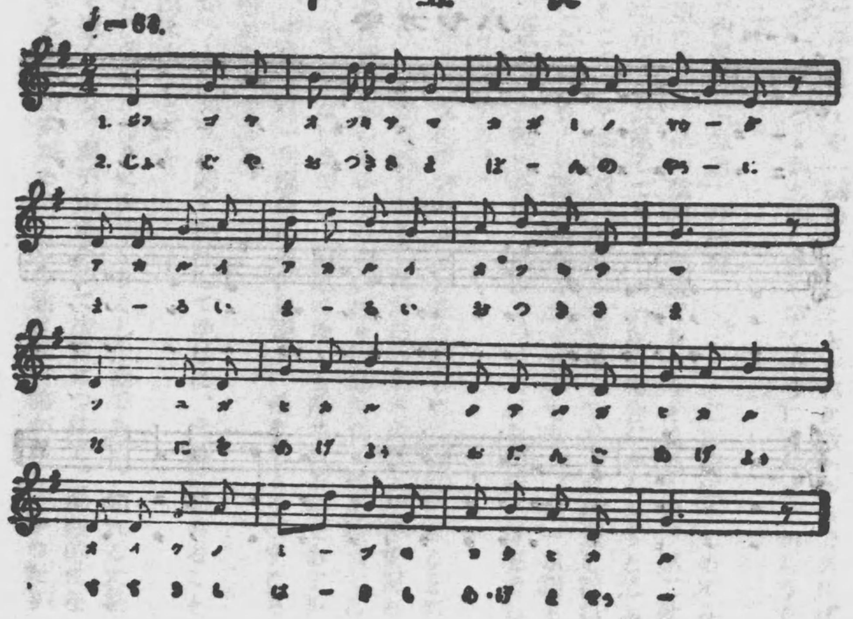


はやおき

一　おひさまは
　　もりのむかふで
　　おめざめよ。
「おはやう、おはやう。」
にしの　そらには
　　一つ二つ三つ　あけのほし。

二　こすずめは
　　やねにならんで
　　あさのうた。
「おはやう、おはやう。」
にはの　くさには
　　一つ二つ三つ　つゆのたま。

十五夜



十五夜

一　十五夜お月さま、かがみのやうだ。
　　あかるい　あかるい　お月さま。
二　つゆが光る、草葉が光る、
　　お池の水も　よく光る。
三　十五夜お月さま、ぼんのやうに、
　　まるい　まるい　お月さま。
四　なにをあげよう、おだんごあげよう、
　　すすきもはぎも　あげませう。

第一「はやおき」の教授

一　教材及指導の要點

「はやおき」新尋常小學唱歌二

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム88を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　晴やかに。

第一段は靜かに曲を起して漸時强め加減に歌つてゆき、第二段は再び力を抜いてやさしく受け、第二小節の「オハヤウ　オハヤウ」から强く晴やかに歌ひあげ、第三段は緩く受けて漸次强めに押してゆき、氣持よく高らかに全曲を結ぶことにする。

(四)其の他の注意……第一段第二小節の三拍がなか〳〵に保てないもので、餘程注意をして取扱はないと、第三拍目の休止を抜いて直ぐに第三小節に移らうとする傾向があるから充分に心して取扱つてほしいと思ふ。

次は第二段の第二小節「オハヤウ」と第三拍を受けて出るところが、前とは反對に一拍の休止を入れて、次の第三小節の第一拍から出やうとする傾向があるから、これもよく心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受けて出る强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして「流す」

　　拙著「私の唱歌教授」參照。

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

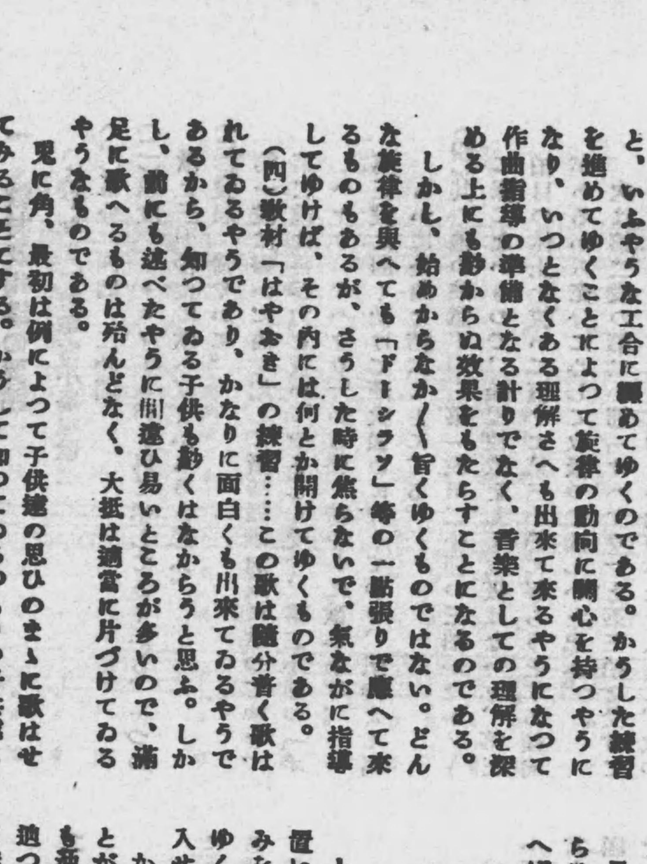
(一)既習歌曲の練習……「蝉」を愉快に齊唱せしむることによつて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 4 | 3 2 3 4 | 2 2 3 1 | 5̣ 1̣ 7̣ 6̣ |
ド・・・・ | ミ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ |
7 7 6 6 | 5̣ 1̣ 7̣ 6̣ | 5 4 3 2 | 3 2 1 0 ‖
ソ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ | ミ・・・・ ‖

(三)旋律問答……これはある子供を指名して、それに一小節位の旋律を投げることにする。その子供は、それに適當した旋律を以てこれを受けるのである。教師はさらに問題を投げる。子供は又それを受けて應へて來る。かうして受けつ應へつ、問答を入れず進めながら、經めてゆくのである。例へば、

　　實習　5̣.3 6 5……と譜面を投げると子供は



と、いよやうな工合に調べてゆくのである。かうした練習を進めてゆくことによつて旋律の動向に關心を持つやうになり、いつとなくある理解さへも出來て來るやうになつて作曲指導の準備となる計りでなく、音樂としての理解を深める上にも尠からぬ效果をもたらすことになるのである。

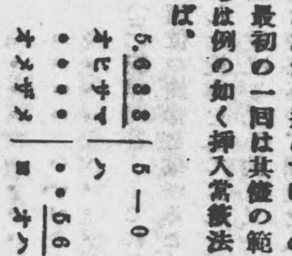
しかし、始めからなか〳〵旨くゆくものではない。どんな旋律を與へても「ドーシラソ」等の一點張りで唱へて來るものもあるが、さうした時に焦らないで、氣ながに指導してゆけば、その内には何とか開けてゆくものである。

(四)教材「はやおき」の練習……この歌は隨分昔く歌はれてゐるやうであり、かなりに面白くも出來てゐるやうであるから、知つてゐる子供も尠くはなからうと思ふ。しかし、前にも述べたやうに間違ひ易いところが多いので、滿足に歌へるものは殆んどなく、大抵は適當に片づけてゐるやうなものである。

兎に角、最初は例によつて子供達の思ひのまゝに歌はせてみることにする。かうして知つてゐるつもりの子供達にある滿足を與へて置き、知らない子供達にはその輪廓を示して置くことにする。

次に更めて正確なる範唱を示し、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくのである。

最初の一回は其儘の範唱によつて進めてゆき、第二回目からは例の如く挿入當歌法によつて調べてゆくことにする。例へば、



と、いふやうな塩梅に、ある部分は旋律計りを聽かせて置いて、歌詞を附して從唱せしめ、又あるところは歌詞のみを聽かせて置いて旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくのである。詰り、省略せられた部分に適當なものを挿入せしめ、當歌めながら調べてゆくのである。

かうして漸次省略の部分を擴げてゆき、獨立して歌ふことが出來るやうに進めてゆくやうにすれば、子供達の方にも油斷が出來ない譯で、前後の關係から推して、又記憶を辿つて、適當なものを當歌めてゆくので興味がある。從つて倦怠がない。效果的である。

一通り調べるには、大した困難はなからうとは思ふが、

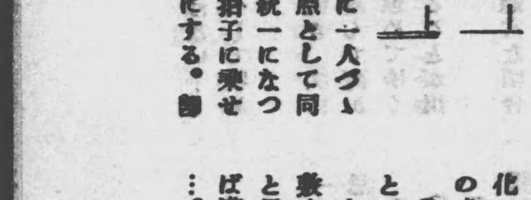
前述の二ケ所は或は簡單にはゆかないかも知れない。しかし、焦つても、どうにもなる譯ではないから、適當な頃合をみてあつさりと切上げて置き、

(五)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を斉唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

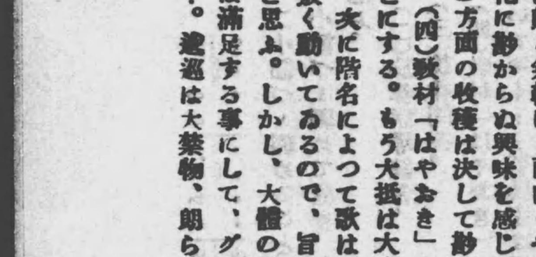
第二次　第一歌詞の整理
第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「金魚」を斉唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、愉快に本次の練習に進入することにする。

(二)階名調練習。



(三)旋律誘導練習……これは旋律問答のやうに一人づゝ指名するのも宜敷いが、こゝでは兒童全體を對照として同時に取扱ふことにする。しかし今回は、餘り不統一になつても困るから、拍子だけは指示して置き、この拍子に乘せて各自思ひ〳〵の旋律を以てつゞけさせることにする。御



思ひ〳〵に受けて來る譯であるから、斉唱といふ工合にはゆかないが、なか〳〵に面白く朗らかに捌いて來るものである。この練習は全體で行動するものであるから、子供は頗る氣輕に、面白くやつてのける計りでなく、拍子の變化に尠からぬ興味を感じ、關心を持つやうになるから、この方面の收穫は決して尠くはない譯である。

(四)教材「はやおき」の練習……一二回歌はせてみることにする。もう大抵は大丈夫で、あらうと思ふ。

次に階名によつて歌はせてみることにする。相當に六ケ敷く動いてゐるので、旨く捌いてゆくことは困難であらうと思ふ。しかし、大體の見當さへつけて來ることが出來れば滿足する事にして、グン〳〵と進めてゆくことにする……。遲遲は大禁物、朗らかに進めてゆく間に、幾分づゝか

は理解が深められてゆくのであるから焦る必要はない……

かうして一通り引題して置いて元の歌詞にかへして牧めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初の一回は子供達の思ひのまゝに歌はせて置き、次に更めて範唱を示し、それから一句づゝの歌詞を讀んで聽かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにする。三回も繰りかへせば一通りは謂めることが出来やうと思ふ。

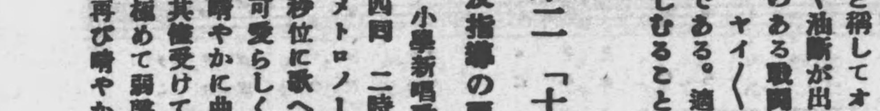
なほ分唱させることによつて仕上げをなし、適當な頃合をみて第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

第二歌詞も「おはやう」のあたりまでは大抵は無難にゆくものであるが、それから先はどうも混亂錯綜して、なか〳〵に旨くゆかないものである。しかし、例によつてくどくならない程度にあつさりと切上げて置き、

(五)既習歌曲の練習……「金魚」を可愛らしく齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次　総　整　理

(一)階名譜譯練習。



二小節づゝ纏めることが旨くゆかないやうであれば先づ一小節づゝ纏めて置き、漸次二小節づゝに進めてほしいと思ふ。

(二)旋律誘導練習。

(三)教材「はやおき」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく……子供達は得意になつて歌つて來る。しかし第二歌詞の後半は大抵は旨くゆくまいと思ふ。

そこで、今度は第一歌詞、第二歌詞を更めて練習し直して置き、それから例によつて第一歌詞の組、第二歌詞の組の二組に分け、これを向ひ合せ、相互に口形の動きに注目せしめながら、兩歌詞を同時に併唱せしむることにする。

かうすれば、不安定なものは正確味の多いものゝために引摺り込まれて、自分で何を歌つてゐるかさへ分らないまでに、混亂に叩き落されるのであるから、子供達は一生懸命に自分を護ると共に他に向つて挑戰を試みるのであるから、頓に緊張は加はり、活氣づいて來る譯である。從つて頗る効果的であることはいふまでもない。

しかし、どうかすると自分を忘れて乘り出して來るので

統制を失ひ、暴聲を張りあげる場合もないではない。私はこれを悲鳴と稱してオミットすることにしてゐる。子供達にはなか〳〵油斷が出來ない。自分自身、ある統制を保ちながら餘裕のある戯調を進めてゆかねばならぬ譯である。

かうして、ヤイ〳〵とやつてゐる間に何時となく纏まつて來るものである。適當なる頃合をみて一同起立し、朗らかに齊唱せしむることによつて本教材の練習を結ぶことにする。

第二「十五夜」の教授

一　教材及指導の要點

「十五夜」小學新唱歌二

(一)區分　四回　二時間。

(二)速度　メトロノーム84を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしくゆつたりと

第一段は晴やかに曲を起してゆつたりと運んでゆき、

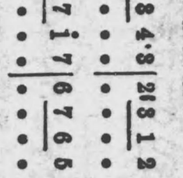
第二段は其儘受けて一先づ曲を牧めて置き、

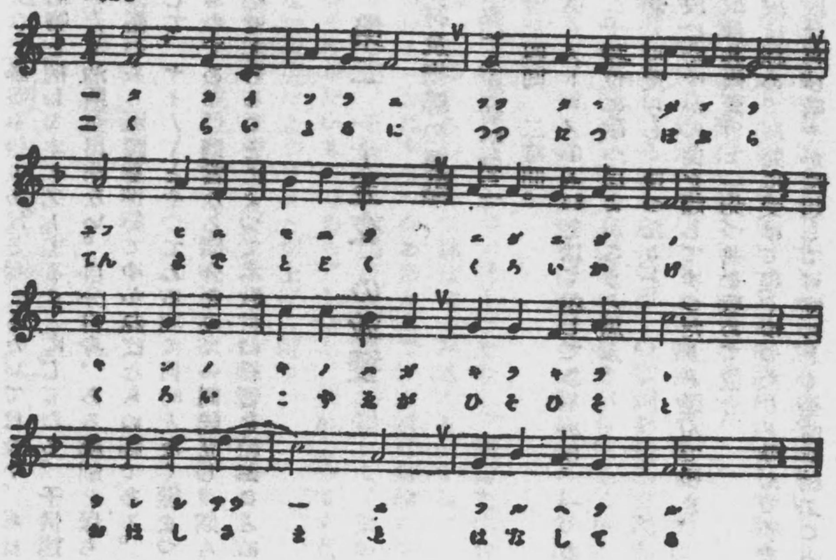
第三段は極めて弱聲に受けて輕くゆつたりと疊んでゆき

第四段は再び晴やかに起して可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意……この曲には附點がない。この附點を用ひず、ゆつたりと運んでゆくところに、たまらなく親しみがあり、なつかしさがある譯である。しかし、これがなか〳〵に六ケ敷く、どうかすると附點になり、跳躍的になつて、折角のなつかし味を喪なしにする恐れがあるから、この點特に注意して取扱つてほしいと思ふ。

二　階名譜譯練習

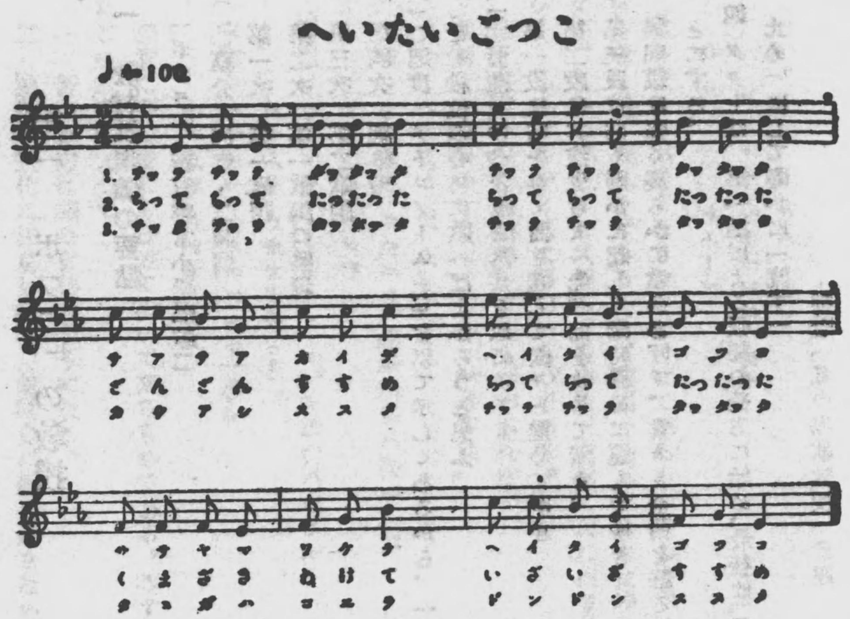




ぽぷら

一　高い空に　つつ立つポプラ、
夕日にもえて、枝枝の
金の木の葉が　きらきらと、
嬉しさうに　ふるへてる。

二　暗い夜に　つつ立つポプラ、
天までとどく　黒い影、
黒い梢が　ひそひそと、
お星様と　話してる。



へいたいごつこ

一　ちつて　ちつて　たつたつた、
　　ちつて　ちつて　たつたつた、
　さあさあ　おいで　へいたいごつこ。
　　ささ山　わけて　へいたいごつこ。

二　ちつて　ちつて　たつたつた、
　　ちつて　ちつて　たつたつた、
　どんどん　すすめ、
　　ちつて　ちつて　たつたつた。
　くまざさ　わけて　いざいざ　すすめ。

三　ちつて　ちつて　たつたつた、
　　ちつて　ちつて　たつたつた、
　かけあし　すすめ、
　　ちつて　ちつて　たつたつた。
　谷川　こえて　どんどん　すすめ。

第一　「ポプラ」の教授

一　教材及指導の要點

「ポプラ」　新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　四回・二時間

第一次　第一歌詞

第二次　第一歌詞の整理

第三次　第二歌詞

第四次　總整理

(二)速度　メトロノーム 126 を以て示してあるから、一段を七秒位の心持に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　ゆつたりと落着を以て

第一段は晴やかに曲を起して堂々と進めてゆき、

第二段は其後受けて一先づ曲を收めて置き、

第三段は弱く靜かに起して漸時强めに運んでゆき、

第四段は强く高らかに歌ひあげて、堂々と全曲を終ることとする。

(四)タクトは、第一拍による强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして靜かに「流す」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の最も得意とする一曲を齊唱せしむることによつて學習氣分をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 | 1 3 2 1 | 2 3 4 3 | 4 5 6 5 |
ド　　ド　　レ　　ファ

5 i 7 6 | 7 6 5 4 | 3 4 5 4 | 3 2 1 0 ||
ソ　　ジ　　ミ　　ミ

(三)旋律誘導練習……これは旋律の一部を示し(最初は一小節位)それにつゞくものは拍子だけを與へて置いて、敵當した旋律をこの拍子に乘せて歌はせる方法である。

普通は階名唱法によつて進めてゐるが、歌詞即ち童謡又は言葉に節付けさせながら綴めてゆくのも大變に喜ばれ、又効果も尠くないやうに思ふ。例へば

練習　5.5 i 7 6 | • • • • • • • 0 | と區切りを入れて

サクラガー　ホ、ホホホホ、(ヘ)

子供　5.5 i 7 6 | 5 5 6 5 0 | と受けるもの或は

サクラガー　サイーク

・・・・・・| 5 1 2 3 0 | 又は

サイーク

・・・・・・| 5 3 1 2 0 | 等と

サイーク

思ひ〳〵に相當するものをつゞけて來るものである。各自各樣に出て來るのであるから、齊唱といふ工合にはゆかない。しかし、そこに又極めて自由な、自然に流れ出る伸び〳〵しさがあつて殊に面白いものである。

又子供達の中で惡戯等をするものがあれば、

教師　5.5 3 1 | • • • 0 | とやれば

イタヅラ　ホ、ホホ、(ヘ)

子供　5.5 3 1 | 6 6 5 0 | 等と受けて來る。又

イタヅラ　ヤメテ

練習　5.5 3 1 | • • • • • 0 | と出してみると

イタヅラ　ホホホホホ、(ヘ)

子供　5.5 3 1 | 2 2 2 3 1 0 | 等と

イタヅラ　ヤヤメテヤイ

適當に字數までも合せて拵いて來るものである。要するにこの練習によつて

一　音の動向に關心を持つやうになる。

二　拍子の變化に注意を向け、無關心に聽き流さないやうになる。

かうしたことが知らず〳〵の間に彼等の生活に織り込まれてゆくことは決して見逃すことの出來ぬ、かなりに重大な問題であるのである。

(四)教材「ポプラ」の練習……この歌はまだ發表せられてから大して古い譯でなく、あまり普くも歌はれてはゐないやうであるから、恐らく知つてゐる子供達は尠からうと思ふ。兎に角、最初の一回は極めて自由に、歌へるもの、歌へるつもりの子供達には勝手に歌はせる位の心持で、氣樂に彈いて聽かせることにする。

次に更めて一回の範唱を與へて、正しい輪廓を示して置き、それから例によつて一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。大して六ケ敷いところはないが、第二段の第二小節「ファラソー」が、どうかすると「ミラソー」になり、又第三段の第二小節「ソソファミ」が「ソソミミ」等になつて一體に「ファ」の音が明瞭を缺く傾向があるから、これらは前以て心得て置いた方がよからうと思ふ。

しかし、あまり焦つては反つて効果があがるものではないから「コヂレ」て來たらあつさりと切上げて……

(五)既習歌曲の練習……「はやおき」を晴やかに齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終る

ことにする。

第二次　第一歌詞の練習

(一)階名唱譜練習

1 2 3 4 3 | 2 1 3 2 1 | 2 3 4 5 5 | 6 5 4 3 0 |
ド　　レ　　レ　　ラ

4 4 5 6 5 | 6 1 7 6 5 | 6 5 4 3 2 | 3 2 1 0 ||
ミ　　ソ　　ラ　　ミ

(二)旋律問答……これは旋律誘導のやうに多數の子供達を同時に相手にする譯にはゆかない。それは、ある子供を指名して、それにある旋律を以て呼びかけるのである。二小節位の區まつたものにすれば宜敷いが、馴れるまでは一小節位から初めることにする。

呼びかけられた子供は、直ちに適當したる旋律を以て應へて來る。教師はまたそれを受けてさらに投げかける。子供は又それを受けてかへして來る。かうして受けつ應へつ間髪を入れずに突き立てながら、曲として纏めてゆくのである。例へば

先唱　5 6 5 3 5 | 0 — 3 を投げたとすると
子供　1 7 6 5 0 | と受けて來る。さらに
先唱　5 — 1 6 1 と投げつけてやると

子供　5 3 2 0 1 といつたやうな工合で

受けて來るものである。しかし、何時も旨く應へて來る譯にはゆかず、隨分おかしなものも出るものではあるが、そこを辛抱して適當に誘いてゆけば、かなり面白い結果がみられるやうに思ふのである。

かうした練習によつて、自然に流れるやうな工合に旋律を捌いて行くやうに訓練して置いてこそ、作曲の第一歩にも入り得る譯であり、音楽としての理解も深められてゆくのである。

(三)教材「ポプラ」の練習……二三回齊唱させてみることにする。……大抵は捌いてゆくことが出來やうとは思ふが、時によると前にも述べて置いた通りに、第二段及第三段の第二小節にある「ファ」の音が旨く行かないやうなこともあらうと思ふ。二三回指導してみても旨くゆかないやうであれば、例によつていろ〳〵に歌詞を入替へて、子供達の氣分の轉換を行ひながら進めてゆくことにする。例へば

「夕日にもえて、えだえだの……」
「朝日を受けて、えだえだの……」
「ミーミドファラソ、ミミレミドー」
「もすこしたかく、うたひませう」
「今度は上手に、出來ました」

「ミーミドファラソ、ミミレミドー」
「夕日にもえて、枝々の……」

と、いふやうな工合にいろ〳〵に言葉をかへて引離してゆき、一通り纏まつたところをみて所定の歌詞にかへして收めることにすれば面白く、ヤイ〳〵と遊びの内に片づけることが出來るのである。一通り出來上つたところをみてさらに分唱猫唱等によつて纏まりをつけ、

(四)既習歌曲の練習……「十五夜」を靖やかに齊唱せしめ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名唱譜練習

1 2 3 2 1 3 | 2 — 1 — | 2 3 4 3 4 5 | 6 — 5 — |
ド　　レ　　レ　　ラ

5 1 7 6 7 6 | 5 — 4 3 | 3 4 5 6 5 4 | 3 2 1 0 ||
ソ　　ソ　　ミ

(三)旋律誘導練習
(四)旋律問答
(五)教材「ポプラ」の練習……面白さうに彈いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。一通り歌はせて置いて、今度は階名唱法によつて歌はせてみることにする。

餘り速い曲でもなく、大して六ケ敷い譜でもないから正確にはゆかないとしても、何とか見當位はつけて來ることが出來やうと思ふ。一旦引離して置いて元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は子供等の思ひのまゝ歌はせてみることにする。次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ歌詞を讀んで聽かせ、それに旋律を附しては復唱せしめながら纏めてゆくことにする。……大して六ケ敷い歌詞でもないから二三回も繰りかへせば、大抵は纏めることが出來やうと思ふ。

さらに分唱によつて仕上げをなし、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

大した問題はなからうとは思ふが、第二段のところで、どうかすると混亂を來たす場合が尠くないから、この點はよく注意して取扱つてほしいと思ふ。……兎に角、今仕上げねばならぬ譯でもないから、くどくならない程度に切上げて、

(七)既習歌曲の練習……「はやおき」を愉快に齊唱せしめて靖やかに本次の練習を終ることにする。

第二「へいたいごつこ」の教授

一　教材及指導の要點

「へいたいごつこ」小學新唱歌二

(一)區分　四回　二時間

第一次　第一歌詞

第二次　第二歌詞

第三次　第三歌詞

第四次　總整理

(二)速度　メトロノーム100を以て示してあるから一段を五秒位の心持で歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕く可愛らしく

第一段は弱く、しかし明瞭にスタッカート的に輕快に進めてゆき、

第二段はやさしく受けてゆつたりと運んでゆき、

第三段は强く受けて晴やかに全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　第二段の第二小節「ララ」が、どうかすると「ララソ」と「ソ」に滑滑かうとする傾向があるまことに無理もないことであるから、注意して置く必要があらうと思ふ。

この曲には附點が使つてない。このために如何にもゆつたりと、やさしくなつかしいやうな感じさへするものであるが、これがなか〳〵六ケ敷く、どうかすると附點になり、跳躍的にならうとする傾向があるから、この點は特に注意して指導してほしいと思ふ。

(五)ククトは、第一拍による强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕くやさしく「切捨て」

二　指導の實際

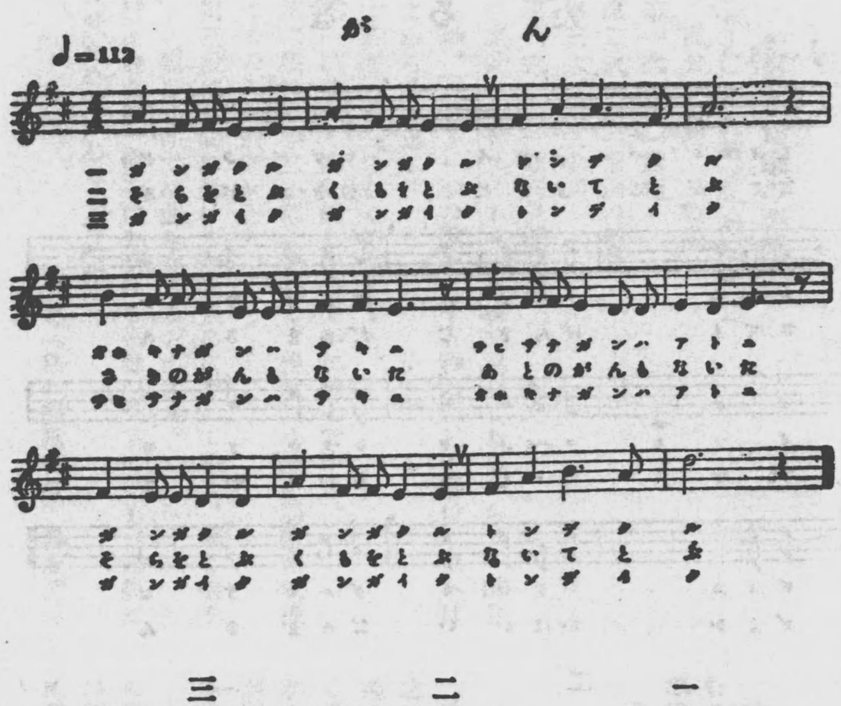
第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「十五夜」を晴やかに齊唱せしむることによつて學習動機を高め、本次の練習に入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1.3 5 4.3 | 3 4.3 2 — | 2 1.2 3 4 | 3 3 2 2 0 |

3.4 5 6 5 | 6 5 6 5 4 | 3 4.3 2 2 | 1 — · 0 |



がん

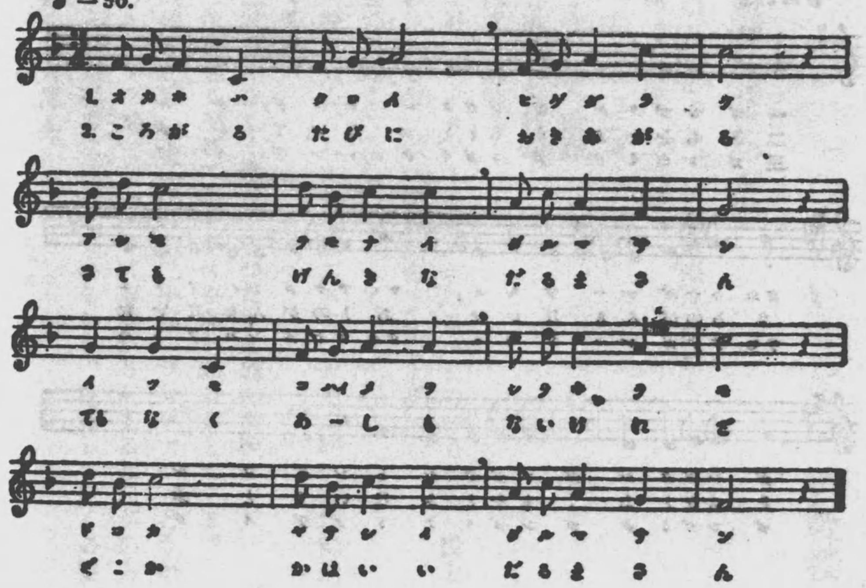
一　雁が來る、雁が來る、　飛んで來る。
　大きな雁はさきに、　小さな雁はあとに。
　雁が來る、雁が來る、　飛んで來る。

二　空を飛ぶ、雲を飛ぶ、　鳴いて飛ぶ。
　さきの雁も鳴いた、　あとの雁も鳴いた。
　空を飛ぶ、雲を飛ぶ、　鳴いて飛ぶ。

三　雁が行く、雁が行く、　飛んで行く。
　小さな雁はさきに、　大きな雁はあとに。
　雁が行く、雁が行く、　飛んで行く。

だるま

♩=96.



一　おかほはくろい　ひげだらけ、
　足も手もない　だるまさん、
　いつもこはい目をしてゐても、
　どこかやさしい　だるまさん。

二　ころがるたびに　おき上る、
　さても元氣な　だるまさん、
　手もなく足もないけれど、
　どこかかはいい　だるまさん。

第一「がん」の教授

一　教材及指導の要點

「がん」新訂尋常小學唱歌　二

(一)區分　四回　二時間

第一次　第一歌詞

第二次　第一歌詞の整理

第三次　第二歌詞

第四次　第三歌詞及總整理

(二)速度　メトロノーム112を以て示してあるから、一段を九秒、つまり一つの歌を二十五秒乃至三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく伸び〳〵と、

第一段は輕く曲を起して晴やかに進んでゆき、

第二段は前半二小節は強擊に、後半二小節は弱擊に取扱つてこれと對照をとり、

第三段は弱擊に受けて漸次强めに押してゆき、高く晴やかに歌ひあげて全曲を終ることにする。

(四)タクトは、第一拍を受ける强擊の受方に始め、最後は「元止め」にして「强結び」。

抽著「私の唱歌教授」參照。

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「ポプラ」を愉快に齊唱せしむることによつて學習氣分をたかめ、本次の練習に進入る準備とする。

(二)階名譜譯練習

3 2 1 3 | 2 3 4 3 | 2 3 4 5 | 6 7 i̇ 5 |
ま・・・・ | て・・・・ | て・・・・ | う・・・・ |

6 5 5 1 | 7 7 1 5 | 6 5 4 3 | 2 3 1 0 ‖
う・・・・ | ど・・・・ | う・・・・ | て・・・・ ‖

(三)旋律誘導練習……これは旋律の一部分を示し、之につゞくものはたゞ拍子だけを示して置き、其の拍子を辿りながら子供達各自思ひの儘の旋律によつてつゞけて來る練習である。各自思ひ〳〵のものをつけて來るのであるから齊唱といふ譯にはゆかない。しかし、いろ〳〵の旋律が同一のリズムに乘つてゆくところは又變つた趣きのあるもので面白いものである。

かうして多人數が同時に活動するのであるから、子供達の方でも至つて氣樂に捌いて來るのであるから、大體に思ひ切つた働きが出來る譯で、從つて頗る効果的であるやうに思ふ。

例へば

5 5 5 5 5 5 | ・ ・ ・ ・ ・ ・ |
ピ ラ ー ピ ラ ピ ラ ー ピ ラ

と、いつたやうな問題を與へたとすると、子供達は早速其の示された拍子に乘せて、

5 5 5 5 5 5 | 5 1 2 5 5 5 |
ピ ラ ー ピ ラ ピ ラ ー ピ ラ　又は

5 5 5 5 5 5 | 5 1 2 5 5 2 |
ピ ラ ー ピ ラ ピ ラ ー ピ ラ　又は

5 5 5 5 5 5 | i 7 6 5 5 5 |
ピ ラ ー ピ ラ ピ ラ ー ピ ラ　然と

思ひ〳〵に受けて來るものである。教師はその中の適當なものを捉へてさらに其の先に進めてゆく……かうして一曲として纏めてゆくのである。

かうした練習を始めることによつて子供達は、知らず識らずの間に於て旋律の動向に對して強い關心を持つやうになり、從つてその間にある、或る約束に對しての理解にまでも進められてゆく譯で、かなりに重大なる意義をもたらすものであるといへる譯である。

（四）教材「がん」の練習……この歌は發表せられてから三年目、まだ知らないものが多からうと思ふ。見に角最初は子供の思ひのまゝに歌はせてみることにする。

次に更めて一回の範唱を示して大體の輪廓を知らせて置き、それから一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。

最初の一回は其の儘の範唱によつて導いてゆき、二回目からは例によつて、ある部分を省略して、適當に挿入補塡せしめながら謳めてゆくことにする。例へば

5 5 5 5 2 2 | 5 5 5 5 2 2 | ・ ・ ・ ・ ・ ・ |
さくさくさ　・・・・・・　さくさくさ　さ

點を以て示したるものは省略された部分であるから、歌詞が省略された場合は歌詞を、旋律が省略せられた場合には旋律を、兩方共に示されないで、たゞ拍子のみを聽かされた場合は旋律に歌詞を附して捌いてゆくのである。つまり如何なる部分が省略せられても、完全なる「歌」として捌いてゆけば宜敷い譯である。

かうして漸次省略の部分を擴げてゆき、獨立して唱歌し得るやうに導いてゆくのである。

この方法による時には子供達には油斷が出來ない。たえず緊張をつゞけて進めて來る譯であるから、倦怠がなく、從つて面白味もあれば又効果的でもある譯である。

大して六ケ敷い曲でもないから、三回も繰りかへせば一

通りは謳めることも出來やうかとは思ふが、どうかすると第三段の「ミ」に受けるところが下り切れず、「ソ」に受けて第一段を其の儘に繰りかへさうとする傾向をもつてゐるから、この點は前以て充分に注意を拂つて指導を進めてほしいと思ふ。例によつてくどくならない程度にあつさりと切上げて置き、

（五）既習歌曲の練習……「兵隊ごつこ」を朗らかに齊唱せしむることによつて機嫌を直し、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

第三次　第三歌詞

（一）階名調譜練習。

3 2 1 3 3 2 | 1 2 3 4 3 | 2 3 4 5 6 7 | i — 5 0 |
ま・・・・・　ま・・・・・　ま・・・・・・・　ま　・

6 5 6 5 i | 6 7 i 5 5 | 6 5 4 3 4 | 3 2 1 0 ‖
ま・・・・・　ま・・・・・　ま・・・・・　ま・・・

（二）旋律問答……これは旋律誘導と大體似たやうなものであるが、教師と子供との間に、問答的に進めてゆくのであるから、多人數を一齊にして取扱ふ譯にはゆかない又間を置かずに突いて出るのであるから、この子供の程度に於ては拍子を示す餘裕がないので、大體は子供の自由旋律に任せることにするのである。例へば

樂譜　3 1 2 3 3 5 と西瓜を拵げると云れば
問題　6 i 6 5 0 拳と受けて來る。樂譜は西瓜
樂譜　6 — i 6 と拵らへて出ると、子供は
問題　6 5 5 3 2 0 拳と受けて來る

と、いつたやうな工合に、旋律を以て受けつ答へつ、一つのリズムに乘つてグン〳〵と進めてゆく間に、一つの曲としての纏まりをつけるのである。

決して始めから旨くゆくものではない。結果を急がず、其の道程に立場を認めて氣ながに指導を進めてゆけば、かなりに面白い學習が出來る譯である。

（三）教材「がん」の練習……一二回歌はせてみることにする。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。

適當な頃合を見計らつて階名唱法によつて歌はせてみる事にする。大して六ケ敷い譯ではないが、少し速いので旨く捌いてゆくことは困難であらうと思ふ。分らないところは分らないとして、何とか見當をつけて從いて來ることが出來ればそれ位で滿足することにして、グン〳〵と引張つてゆく……一耳り歌はせて元の歌詞にかへして收めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は一回の範唱を示し、次に一句づゝの歌詞を讀んで聽かせ、それに一々旋律を附して復唱せしめながら、纏めてゆく事にする。旋律は充分に纏まつてゐる譯であるからこゝでは更めて指導の必要はない。要はこの新しい歌詞を如何に旋律づけるかが子供達のために殘されてゐる唯一つの問題である。要らない世話は出來るだけ避けるやうにしたいものである。

何んでもないやうな歌ではあるが、かなりに間違ひ易い面倒なものである。僅かに二段を覺えれば宜敷いのであるが、それがなか〳〵思ふやうにゆかないものである。三回も繰りかへしても尙旨くゆかないやうであれば、

空、雲、鳴く
先、後

と、いつたやうな工合に區分して歌はせるやうにすれば、どんな呑氣な子供達でも一二回で大抵は纏まるものである

しかし、かうした手段を用ひるのは最後の問題であつて普通の場合に於ては子供自身の力と工夫とによつて解決せしむるやうに指導することを忘れないやうにしてほしいと思ふ。

一通り謂めることが出來れば更に分唱によつて仕上げをなし、適當な頃合を見計らつて第一歌詞から續けて歌はせてみることにする。

一つ〳〵歌はせてみれば立派に出來上つてゐたものであるが、さて、續けて歌はせてみると、すつかり混亂して、なか〳〵に思ふやうにはゆかないものである。

例へば「雁が來る」といつても「雁が飛ぶ」といつてみても「雁が鳴く」とつゞけてみても、大した無理がなく、何とか謂まつてゆくので、まことに厄介千萬である。

そこで、今度は第一第二の歌詞を別々にして、更に謂まりをつけ、それから、子供を第一歌詞の組、第二歌詞の組に分け、兩方の子供達を向ひ合ひに對峙せしめ、各自相手方の口形の動きに注目せしめながら、自分〳〵の持場を歌はせるのである。

不安定な自信のない子供達は、確實味の多い子供に引ずり込まれて、自分自身何を歌つてゐるかさへ考へる餘裕のないまでに混亂に叩き落されるのである。

子供達は自分を護ることに一生懸命である。かうして相互に組を取替へて一巡り歌はせてみれば、大抵は片づけることが出來るものである。

しかし、この練習法は餘程注意をしないと不統制な暴聲に陷ることである。私はこれを弱者の悲鳴と稱してオミットすることにしてゐる。壓迫されないで壓迫して、しかも

冷靜を保つて、……といふのであるから、子供達もなか〳〵に骨が折れる譯である。……一通り謂まつたところをみて一回起立し、今度は仲よく齊唱せしめて朗らかに本次の練習を終ることにする。

第四次　第三歌詞及總整理

第二「だるま」の教授

一　教材及指導の要點

「だるま」小學新唱歌　二（三木樂器店）

(一)區分　四回　二時間

第一次　第一歌詞

第二次　第一歌詞の整理

第三次　第二歌詞

第四次　總整理

(二)速度　メトロノーム96を以て示してあるから一段を七秒、つまり一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ

(三)發想　輕快に、

第一段は輕く曲を起して晴やかに進めてゆき、

第二段は前半二小節は輕く取扱ひ、後半二小節は晴やかに歌ひあげ、

第三段は弱く靜かに起して漸次强めに押してゆき、

第四段は第二段同樣に前半二小節は弱聲に輕く取扱ひ、後半は晴やかに歌ひあげて、愉快に全曲を終ることにする。

(四)其他の注意……第二段と第四段の前半二小節の「ラファソー、ラファソソ」の「ファ」の音が、大抵の場合「ミ」になつて「ラミソー、ラミソソ」にならうとする傾向があるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして輕く「流す」

二　指導の實際

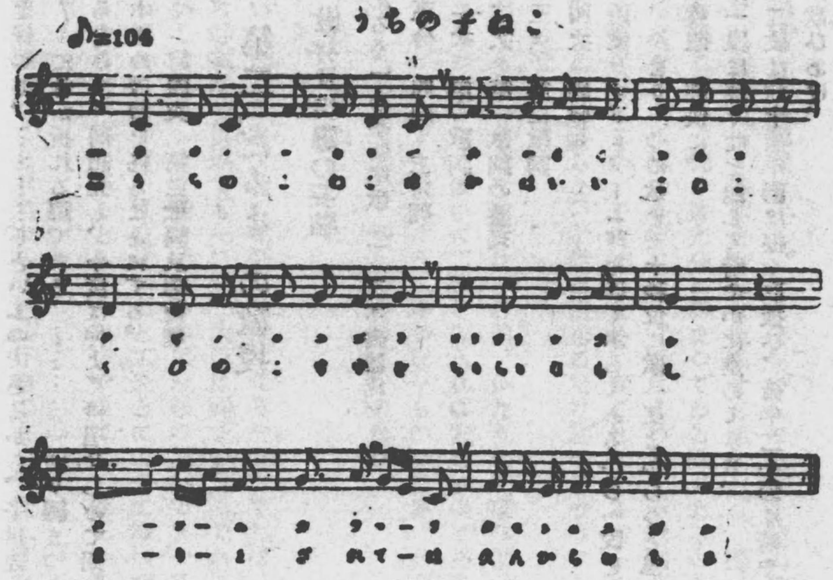
第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「へいたいごつこ」を晴やかに齊唱せしむることによつて學習動機を高め、本次の練習に入る準備とする。

(二)　階名翻譯練習

1 2 3 4 | 5 6 5 4 | 3 4 3 2 | 3 2 1 2 |
ド・・・・ | ソ・・・・ | ミ・・・・ | ミ・・・・ |
3 4 5 6 | 5 6 5 4 | 5 4 3 2 | 3 2 1— ||
ミ・・・・ | ソ・・・・ | ソ・・・・ | ミ・・・・ |

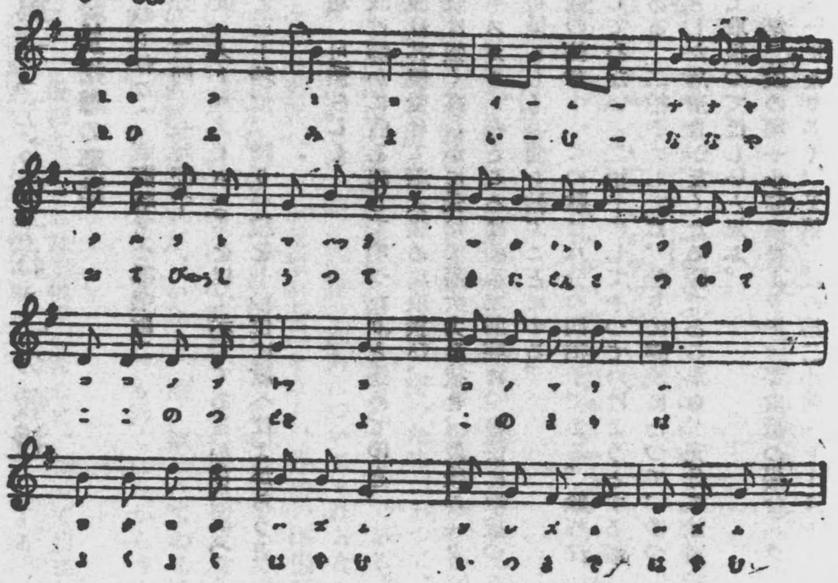
うちの子ねこ



一　うちの子ねこは
かはいい子ねこ、
くびのこすずを
ちりちりならし、
すそにからまり
たもとにすがる。

二　うちの子ねこは
かはいい子ねこ、
くびのこすずを
ちりちりならし、
まりとざれては
えんからおちる。

まりつき



一　一二三四、五六七八、
くるりと　まはつて
　また　とんと　ついて、
ここのつ　十　よ。
この　まり　は
　よく　よく　はずむ、
　それずに　はずむ。

二　一二三四、五六七八、
お手びやうし　うつて
　また　とんと　ついて、
ここのつ　十　よ。
この　まり　は
　よく　よく　はずむ、
　いつまで　はずむ。

第一「うちの子ねこ」の教授

一　教材及指導の要點

「うちの子ねこ」　新訂尋常小學唱歌二

(一)區分　三回　一時間半

(二)速度　メトロノーム104を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位、詰り一段を十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく

第一段は靜かに曲を起してゆつたりと進めてゆき、第二段は其儘受けて漸次强めに取扱ひ、第三段は强く高らかに受けて漸次力を拔き、最後の「タモトニスガル」のところは極めて弱聲に、輕快に取扱つて、可愛らしく全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意……この歌は八分の四拍子である。餘程注意をしてゐないと二拍子にしてやつてのけようとする傾向がある。二拍子にしては、餘りに輕快になつて、ゆつたりとした落着きがなくなる譯であるから、充分に注意をして取扱つてほしいと思ふ。

次に、第二段の第一小節「ラーソド」が大抵の場合「ラーソド」になり易く、又第三段の第二小節「レーミレソ」がなか〳〵に六ケ敷く、大抵は「レーミドラソ」等にならうとする傾向があるから、前以て知つて置く必要があらうと思ふ。

(五)タクトは第一拍を受けて出るところの强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして輕く「切捨て」

拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「がん」を愉快に齊唱せしむることによつて學習動機をつくり、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

8 2 1 8 2 8 | 4 — 3 2 | 2 8 4 5 6 7 | i — 5 0 |
ミ　　ファ　　レ　　ド

6 6 5 i 7 7 | i — 5 0 | 6 5 4 3 2 8 | 1 — 0 ||
ラ　　ド　　ラ

(三)旋律誘導練習……例によつて旋律の一部分を與へ、それにつゞく音は拍子だけ示して置き、其の拍子に乘せながら子供等各自思ひ〳〵の旋律によつてつけさせることにする。例へば、

譜例　8 12 8 5 | ·· ·· ·· 0 | の問題を出せば
ミドレミソ　ミミミミミミ　(拍子を示す)

子供　·····| i i 7 i | 6 5 0 | と受けるものもあれば
子供　·····| 6 5 4 3 2 0 | 又は
子供　·····| 2 4 3 2 1 0 | に受けるものもあるや

さう考へさせる。

かうした工合に、各自思ひの儘に受けて來るのであるから、齊唱といふ譯にはゆかない。しかし、變つた旋律が同じ拍子に乘つて進んでゆくところは、變つた味があつて、なか〳〵に面白く又子供達にも歡迎せられるものである。

かうして進めてゆく間に旋律の動向についてそれとなしにある理解を與へ、之が音樂の基礎をなし、作曲の準備工作の一つとして最も重大なる役割を務めてゐる譯である。

(四)教材「うちの子ねこ」の練習……この歌は發表せられてから古い譯ではないが、かなりに廣く歌はれてゐるやうであるから、恐らく知つてゐるものも尠くはなからうと思ふ。

そこで、最初はかうした子供達のために、極めて自由な輕い氣持に於て、思ひの儘に歌はせてみることにする。

かうして、知つてゐる子供達、歌へるつもりの連中に、ある誇りと滿足とを與へて落着かしめて置き、又知らない子供には大體の輪廓を示して置き、

それから更めて範唱を示し、次に一句づゝを從唱せしめながら進めてゆくことにする。

初めは歌曲其儘の範唱にて導いてゆき、二回目からは例によつて省略當鉄法によつて指導を進めながら謳めてゆくことにする。例へば、

6 6 5 | 1·1 6 5 | ·· ·· ·· | 5 6 5 0 |
ゆき　　　

情を追りながら、適當なるものを適當なるところに常鉄めてゆくのであるから少しの油斷も出來ない譯で、緊張し切つた音調をつゞけてゆくのであるから、從つて効果も尠くない譯である。

かうして三回も繰りかへしてみれば一通りは片づけることが出來やうと思ふ。尤も、第三段の第二小節は、一回や二回で調まるものではないが、それは仕方がない。仕上げは次回にゆづつて今日はあつさりと切上げて置き、

(五)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を斉唱せしむることによつて氣分の轉換を行ひ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……「がん」を伸び〳〵と斉唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

3̣ 2̣ 1̣ 3̣ | 2̣ 3̣ 4̣ 3̣ | 2̣ 3̣ 4̣ 5̣ | 6̣ 7̣ 1̣ 5̣ |
ド　　ド

6̣ 6̣ 5̣ 1̣ | 7̣ 7̣ 1̣ 5̣ | 6̣ 5̣ 4̣ 3̣ | 2̣ 3̣ 1̣ 1̣ —0‖
ラ　　ラ

(三)旋律誘導練習

(四)旋律問答……これは旋律誘導のやうな工合に、斉唱といふ譯にはゆかない。即ち子供のあるものを指名して、教師はその子供に對して旋律を以て呼びかけるのである。先づ最初は一小節位から始めて、漸次二小節位に進めてゆけばよからうと思ふ。

呼びかけられた子供はそれに適當した旋律を以て受けて來る。教師はさらにそれを受けて旋律を以て突いて出る。かうして受けつ答へつ、グン〳〵と進行しながら曲として纏めてゆくのである。しかも、寄へる譜も與へずに突いて來るものを、唱歌の間に捌いてゆくのであるから、かなりに六ケ敷い譯ではあるが、すべてが子供達の創造によつて解決してゆくところに多大の感興があるらしく、相當に歌迎せらるるものである。

(五)教材「うちの子ねこ」の練習……面白さうに歌いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。大抵はコナシて行く事が出來やうとは思ふが、例の紙三段の第二小節はどうも旨くゆかない場合が多いやうである。二三回繰りかへしてみても片づけることが出來ないやうであれば、階名唱法と比較させながら調めることにする。即ち、あれは五度の轉調「ヘ調」として取扱はれてゐる譯であるから

「カーラマーリ」「ソーラソミド」
「ソーラソミド」「ソーラソミド」
「カーラマーリ」「ソーラソミド」
「カーラマーリ」「カーラマーリ」
「ソーラソミド」「カーラマーリ」

と、いつたやうな工合に、漸次「カーラマーリ」の回數を増してゆき、而して調まりをつけるやうにすれば、大抵は解決することが出來るやうである。……かうして一通りの調まりをつけて置き、第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて子供達の思ひの儘に歌はせてみることにする。次に更めて範唱を示し、それから一句づゝ歌詞を讀んで聽かせてはそれに旋律をつけ、復唱せしめながら進めてゆくことにする。

第一段と第二段とは第一歌詞を共通繰りかへすのであるから全く問題はない、新しい歌詞は第三段の一句になる譯であるから、この一句に全力をそゝげば宜敷いのである。全力を注ぐといつても僅かに一句、二回も繰りかへせば一通りは調まるものである。

そこで、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。何でもない第三段の一段に於て兩歌詞が混同錯綜してなか〳〵に旨くゆかないものである。しかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから、適當なところで切上げて置いて、

(六)既習歌曲の練習……得意の一曲を斉唱せしむることによつて愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　總　整　理

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を斉唱せしむることによつて唱歌氣分に導き、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1̣ 2̣ 3̣ 4̣ | 5̣ 4̣ 3̣ 5̣ | 6̣ 5̣ 6̣ 7̣ | 1̣ 5̣ 5̣ 5̣ |
ド　ソ　　ド

6̣ 6̣ 5̣ 1̣ | 7̣ 6̣ 5̣ 4̣ | 3̣ 5̣ 4̣ 3̣ | 2̣ 3̣ 1̣ 0‖
ラ　ジ　　ド

(三)旋律誘導及旋律問答

(四)教材「うちの子猫」の練習……一二回歌はせてみることにする。旨くゆくやうであれば其儘仕上げにかゝり、相變らず第三段目が混亂するやうであれば、例によつて第一歌詞の組と第二歌詞の組とに分けて、同時に併唱せしむることにする。

相對立せしめて相互口形の動きに注目せしめながら歌はせることにすれば一入興味もあり効果的である。即ち、不

安定な子供は自信のある子供の口形に引摺り込まれて、自分が何を歌つてゐるかさへ分らないまでに、混亂に叩き落されるのであるから、自身を護ると共に相手を攻めることに一生懸命である。從つて効果的であることはいふまでもない。

しかし、この方法は餘程注意をしないと暴擊に陷り易いことである。私はこれを敗者の悲鳴と稱して敗退せしむることにしてゐる。子供達は極めて平靜を保ちながら、よく自己を護つてゆく、なか〳〵に六ケ敷い譯である。しかしかうして二三回も繰りかへせば大抵は出來上るものである

さらに分唱獨唱等によつて仕上げをなし、適當な頃合をみて一同起立し、可愛らしく齊唱せしめて愉快に本教材の練習を結ぶことにする。

第二「まりつき」の教授

一　教材及指導の要點

「まりつき」　小學新唱歌二

(一)區分　三回　一時間半

(二)速度　メトロノーム88を以て示してあるから、一つの歌を二十秒、一段を五秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく、ゆつたりと

第一段は弱擊に曲を起して稍强め加減に輕く疊んでゆき

第二段は强めに受けて漸次力を拔いてゆき、

第三段は再び弱く起して强めに歌ひあげてゆき、

第四段は强く高らかに歌ひあげ、漸次力を落して、輕くゆつたりと全曲を結ぶことにする。

(四)其他の注意……この歌には附點がない。八分音符で輕く疊んでゆくところに特徴がある譯であるから、注意してほしい。

(五)タクトは、第一拍を受ける强擊の受方に始め、最後は四拍の「や止め」にして「切拾」

二　指導の實際

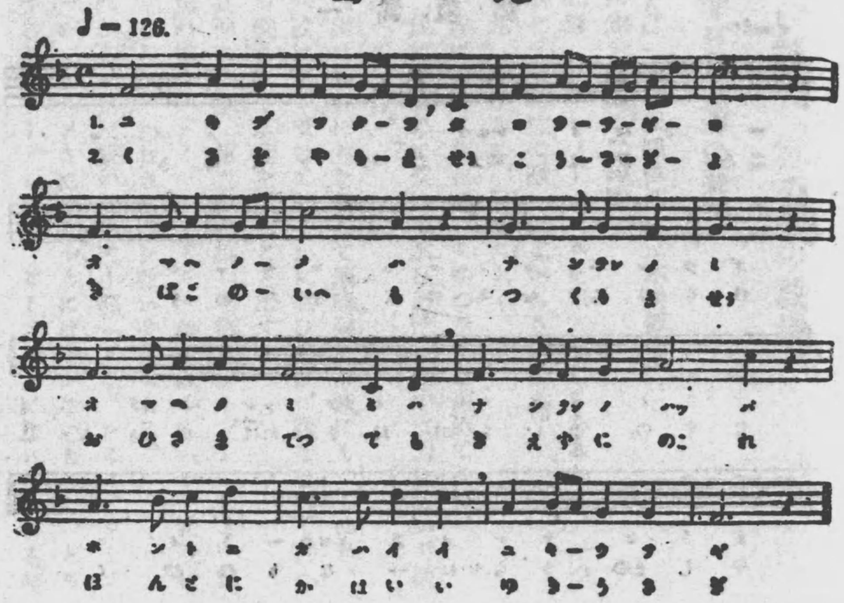
第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「だるま」を愉快に齊唱せしめることによつて學習氣分をたかめ、本次の練習に入る準備とする。

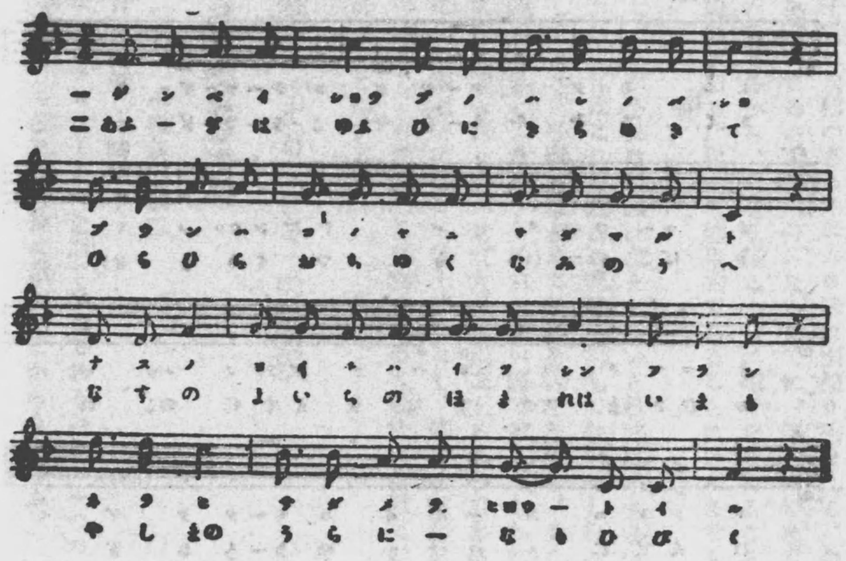
(二)階名翻譯練習

1 2 3 2 | 1 8 2 1 | 2 3 4 3 | 4 5 6 5 |
ド　　ド　　レ　　ファ
5 1 7 6 | 7 6 5 4 | 3 4 5 4 | 3 2 1 0 ||
ソ　ラ　シ　ド　レ　ミ

雪兎



那須餘一



一　源平勝負の晴の場所、
　武運はこの矢に定まると、
　那須の餘一は一心不亂、
　ねらひ定めてひようと射る。

二　扇は夕日にきらめきて、
　ひらひら落ちゆく波の上、
　那須の餘一の誉は今も、
　屋島の浦に鳴りひびく。

第一「雪兎」の教授

一　教材及指導の要點

「雪兎」　小學新唱歌四（三木楽器店）

（一）區分　四問　二時間

（二）速度　メトロノーム 120 を以て示してあるから、一つの歌を三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

（三）發聲　明やかに、可愛らしく、

第一段は靜かに曲を起してゆつたりと進めてゆき、

第二段は稍強めに受けて歌ひあげ、後半は力を抜いて輕く押へて進き、

第三段は弱聲に曲を起して漸時強め加減にもつてゆき、

第四段は強く受けて明やかに歌ひあげ、後半は輕く押へて可愛らしく全曲を結ぶことにする。

（四）其他の注意　第二段の第一小節「ドーッ レミレミ」が太鼓の場合「ドーッ レミドミ」等になつて「レ」に受けるところが、かなりに六ケ敷いやうである。

それから、第三段の前半二小節「ドーッ レミミ、ドーソラ」が、なか〳〵に思ふやうにはゆかないもので、どうかすると「ドーッ レミレ、ドーラソ」にならうとする傾向がある。まことに無理もないことではあるが、困つたものである。前以て心得て置く必要があらうと思ふ。

（五）タクトは、第一段を受ける强聲の受方に納め、最後は「尤止め」にして輕く「流す」

　　拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌問

（一）既習歌曲の練習……「まりつき」を可愛らしく齊唱せしむることによつて學習動機をつくり、本次の練習に進入る準備とする。

（二）階名翻譯練習

1 2 3 4 3 | 4 3 5 6 5 | 6 5 6 7 i | 5 5 6 5 0 |
ド　　ラ　　ソ

6 6 6 5 i | i 7 6 5 4 | 3 5 4 3 5 | 4 3 2 1 0 ||
ラ　　ド　　ミ　　ラ

（三）旋律誘導……これは旋律の一部分を示し、これにつゞくものはたゞ拍子だけを與へて置き、その拍子に乘せて子供達各自思ひ〳〵の旋律によつて續けさせる練習である例へば、

樂譜 5 6 5 3 5 | • 5 • • • 0 | の唱譜を譜作する。

ソラソミソ ネ、ネネネネ、ン　子供譜は

(1)

子供 5 6 5 3 5 | i 7 6 5 0 | 又は

• • • • • • | 2 1 2 3 0 | 鳥は

• • • • • • | 6 5 4 3 0 |

• • • • • • | 4 3 2 1 0 |

等と、思ひ〳〵に出て來るのであるから、齊唱といふ譯にはゆかない。しかし、變つた各種の旋律が同一リズムに乘つて進んでゆくのは又變つた面白味があるものである。兎に角、子供達は自分の創造？　によつて謳められてゆくところに多大の感興を持つやうで、効果も亦尠くはないやうである。

（四）教材「雪兎」の練習……この歌はまだ發表せられてから一年目、恐らく知つてゐる子供はなからうと思ふ。兎に角、最初は面白さうに彈いていつて、極めて自由に歌はせてみることにする。かうして大體の輪廓を示して置き、次に更めて範唱をしめし、それから、一句づゝ從唱せしめながら進めてゆくことにする。最初の一回は其儘の範唱によつて導いてゆき、第二回目からは例によつて省略挿入法によつて謳めてゆくことにする。例へば

1—3 2 | 1 2 1 6 5 | 1 3 2 1 2 3 6 | 5—• 0 |

ヨ ヤシ マツ ノ ヤ ブ ヤ ブ

• • • • | • • • • | • • • 0 | • • • • | • • • • | 2—• 0 |

ネイ〳〵ノ ヌ ン

と、いふやうな工合に、ある部分は歌詞を省略し、又ある部分は旋律を、又はこの兩方を省略して拍子のみによつて進めてゆき、この省略せられた部分に、記憶を辿り、前後の關係から推して、適當なる歌詞又は旋律を當嵌め挿入しながら謳めてゆくのである。

この方法による時には油斷が出來ない。絶えずある緊張を以て當つて來るのであるから、効果も亦尠くない譯である。

かうして、漸時省略の部分を擴大してゆき、獨立して唱歌し得るやうに導いてゆくのである。

前にも述べた通りに第二段の第一小節及び第三段の前半二小節は、かなりに困らせられるものではあるが、三四回も繰りかへせば何とか片づけることが出來やうと思ふ。若しも旨くゆかないとして無るべきものでもないから、詩くならない程度に切上げて、

（五）既習歌曲の練習……「うちの子猫」を可愛らしく齊唱せしむることによつて氣分の轉換を行ひ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　第一歌詞の整理

（一）既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて復習を兼ねて學習氣分をあふり、本次の練習に進入る準備とする。

（二）階名翻譯練習

1 2 3 4 5 4 | 3—5— | 6 5 6 7 i 7 6 | 5—0 |

ド　レ　ミ　ファ　ソ　ラ

6 6 6 6 5 i | 7—6 5 | 6 5 4 3 5 4 3 | 2—1 0 ‖

ラ　ラ　ラ　ラ　ソ　ファ

（三）音程視唱練習……これは音を記號に移すべき最初の練習である。其の方法は數字によつて横書の音階を記し、其の數字を腹を以て指示しながら進めてゆくのである。其の材料としては、階名翻譯練習に使用したもので宜敷い譯ではあるが、始めの内は長短の關係はつけないがよからうと思ふ。即ち

1 2 3 4 5 6 7 i

最初はこれで充分である。不足すれば前後に書き足してゆけば宜敷い。音階圖表を掲げたり、階段圖等を持出す必要は少しもない。黑板は何所の教室にもある譯であるから必要に應じて使用するやうにすれば澤山である。

讀ませる時には勿論「ドレミ」を以て唱へさせることにする。數字を「ドレミ」に等と大問題のやうに論ずる人もあるが、事實は等二位の子供に於てさへ三分乃至五分間で立派に解決せられる問題である。

これによつて音程の練習を進めると共に數字と音との關係に馴れしめて置き、愈々略譜の視唱練習に進入ることにする。

（四）略譜の視唱練習……最初は四分音符になる極めてやさしいものから進入ることにする。例へば

5 5 5 3 | 1 2 3 5 | 6 6 i 6 | 5—• 0 |

6 5 i 6 | 5 3 1 2 | 3 5 3 2 | 1—• 0 ‖

と、いつたやうなものを與へることにする。大抵は一回で捌いてゆくことが出來やうと思ふ。一拍に數へる……等と理屈はいはない方が宜敷い。「歩くやうな心持で」位に注意して黑板を叩いてやれば譯なくやつてのけるものである。

次には八分音符によつて變化を與へてみる。二分音符でも宜敷譯ではあるが、八分音符の方が景氣が宜敷いので、

子供達の感興が湧き易い。これは「下に滑り臺をつけるから、滑るやうに……」位の注意で歌はせてゆくことにすれば、案ずる程でもなく解決してゆくものである。例へば

5 5 5 5 5 5 | i 7 6 5 5 | 5 5 5 1 3 | 3 — 5 — | 0

のやうなもので、二分の一拍に數へる等の說明は要らない。滑るやうに速く……と注意すれば三連音にも、十六分音符にも決して歌ふものではない。正直に二分の一拍に揃いて來るから面白くも亦可愛いものである。

次は二分音符の取扱である。これは、横に棒がついてゐればゆつくりと延ばして歌ふのだ……位の注意を與へて置けば充分である。大丈夫！　一拍半に切上げ、三拍に引張らうと頑張るものはない。旨く二拍に數へて進んでゆくから妙である。

これだけの仕事で五分間乃至十分間を當てゝ置けば充分である。理屈は抜きにして何時とはなしに慣めてゆく、これが私のいふところの「非公式的取扱方」である。

(五)教材「雪見」の練習……面白さうにグン〳〵と彈いてゆく、子供達は得意になつて從いて來る。大抵は何とか揃いて來ることが出來やうとは思ふが、若しも旨くゆかないやうな場合には、特に其部分を取り出して歌詞にいろいろの變化をつけて練習することにする。例へば

「オーマヘノミーミハ」
「オーマヘノオメメハ」
「オーマヘノアクマハ」
「ドーレミミドーソラ」
「オーマヘノミーミハ」

と、いつたやうな工合に、子供達の感興を惹きやすい言葉を、取り替へ引替へ常欲めて練習を重ねてゆくことにするのである。

子供達はこの言葉の變化につられて、何回も〳〵緊張を以て從いて來る。然も其の變化にある期待さへかけて來るやうになるのであるから倦怠もなく續けてゆくことが出來るのである。從つて極めて効果的であることはいふまでもない譯である。

かうして面白くヤイ〳〵といつてゐる間に大體の揃まりはつけることが出來やうと思ふ。更に、分唱獨唱等によつて一通りの仕上げをすることにする。

次に階名唱法によつて歌はせてみることにする。かなりに速く、又音程もあまりやさしい譯ではないから、旨く揃いて來ることは困難であらうと思ふ。しかし、かうした習慣をつけるのが主眼であるから、大體の見當がついてゐれ

ば滿足することにしてグン〳〵と遠慮なく引張つてゆくことにする。

一旦引離して置いて元の歌詞にかへして收めて置き、

(六)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて氣持を更へ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第三次　第二歌　同
第四次　總　整　理

第二「那須餘一」の教授

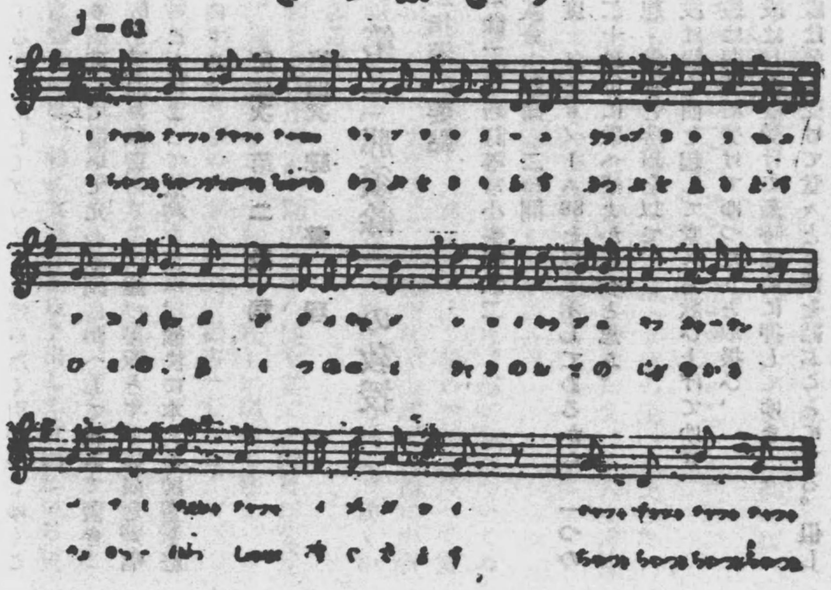
教材及指導の要點

「那須餘一」　新訂尋常小學唱歌二
(一)　區分　四回　二時間
(二)速度　メトロノーム88を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。
(三)發想　堂々と落着を以て、
第一段は强く曲を起して堂々と歌ひ上げてゆき、
第二段は弱音に受けてゆつたりと取扱ひ、
第三段は其の後受けて漸時强めに押してゆき、
第四段は强く受けて堂々と全曲を結ぶことにする。但し第一次の場合に於て「ヒョウートイル」の「ヒョウー」の部分は特に極めて弱聲に取扱ふやうにすれば、一層面白く又効果的であるやうに思ふ。

(四)其他の注意……第二段の第一小節の「ファーッファミミ」に受けるところが可なりに六ケ敷く、どうかすると「ソーッソミミ」或は「ミーッミレレ」等になつてかなりに混亂を來たす場合が尠くないから、前以て心得て置く必要があらうと思ふ。
それから、第三段の第二、第三小節「レーッレドド、レーッレミ」が、どうかすると「レーッレドレ、ミーッミミ」にならうとする傾向が多分にあるから、これも心得て置いて樣しいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして、輕く「切捨て」

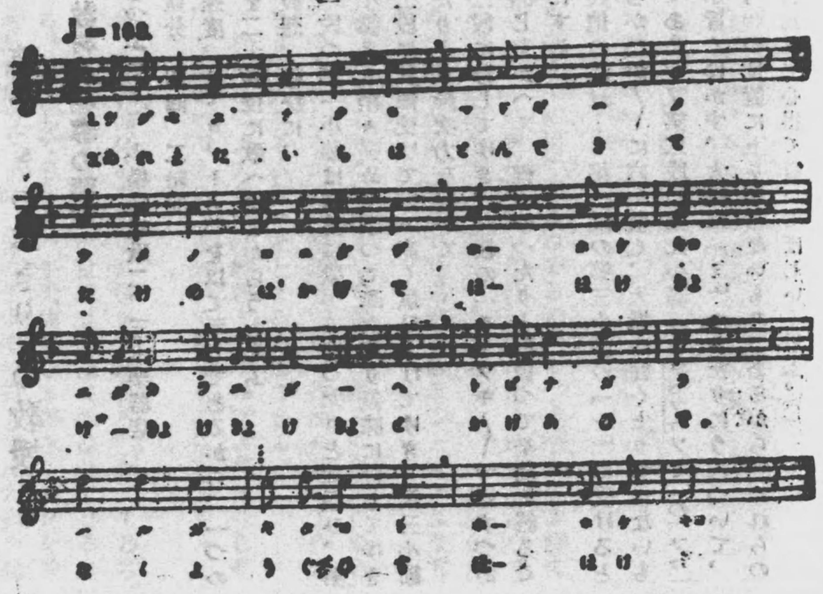
きつぶきり



一　ちやつき　ちやつき
　　ちやつき　ちやつき。
　　きつぶをきります、
　　きつぶをきります。
　　赤いきつぶ、青いきつぶ、
　　白いきつぶに　きふからけん
　　はさみちやつきちやつき　いそがしい。
　　ちやつき　ちやつき
　　ちやつき　ちやつき。

二　ちやつき　ちやつき
　　ちやつき　ちやつき。
　　きつぶをきります。
　　きつぶをきります。」
　　人の聲、くつの音、
　　きてきの音の　にぎやかさ。
　　きふかうれつしやが　すぐです。
　　ちやつき　ちやつき
　　ちやつき　ちやつき。

うぐひす



一　うぐひす鳴くよ、まどぎはの
　　梅のこえだで　「ホーホケキョ」。
　　えだからえだへ　とびながら、
　　春がきたよと　「ホーホケキョ」

二　あれまた一は　とんできて、
　　竹のはかげで　「ホーホケキョ」。
　　「ケキョ、ケキョケキョ」とかけあひで、
　　鳴くようぐひす　「ホーホケキョ」

第一「きつふきり」の教授

一　教材及指導の要點

「きつふきり」　小學新唱歌二、三木楽器店

(一)區分　四回　二時間

(二)速度　メトロノーム63を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕快に、

第一段の第一小節は弱聲に歌つてゆつたりと取扱ひ、第二小節より稍々強めに歌つて漸次焦り氣味に押してゆき第二段は其儘受けて愈々高く歌ひ上げてゆき、第三小節あたりより漸次力を抜いて、

第三段に移してゆき、最後の「チヤツキ〳〵」はすつかり感じをかへて、輕くゆつたりと取扱つて全曲を終ることにする。

(四)其他の注意……第一段の第三小節の「レ」に受けるところがなか〳〵に六ケ敷く、大抵は旨く上り切らないものである。又第二段の第二小節「ミファファソミ」の「ファ」音が旨くゆかず、大抵は「ミ」のあたりにうろついて、「ファ」の位置に上り切らないものであるから、これらの點は前以て心得て置いてほしいと思ふ。

(五)タクトは、第一拍による强聲の受方に始め、最後は特に八分音符を一拍に取扱つて四拍の「や止め」にして輕く「切捨て」

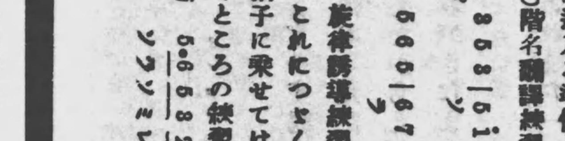
拙著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

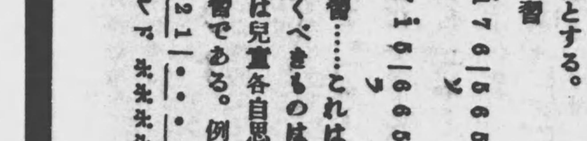
第一次　第一　歌調

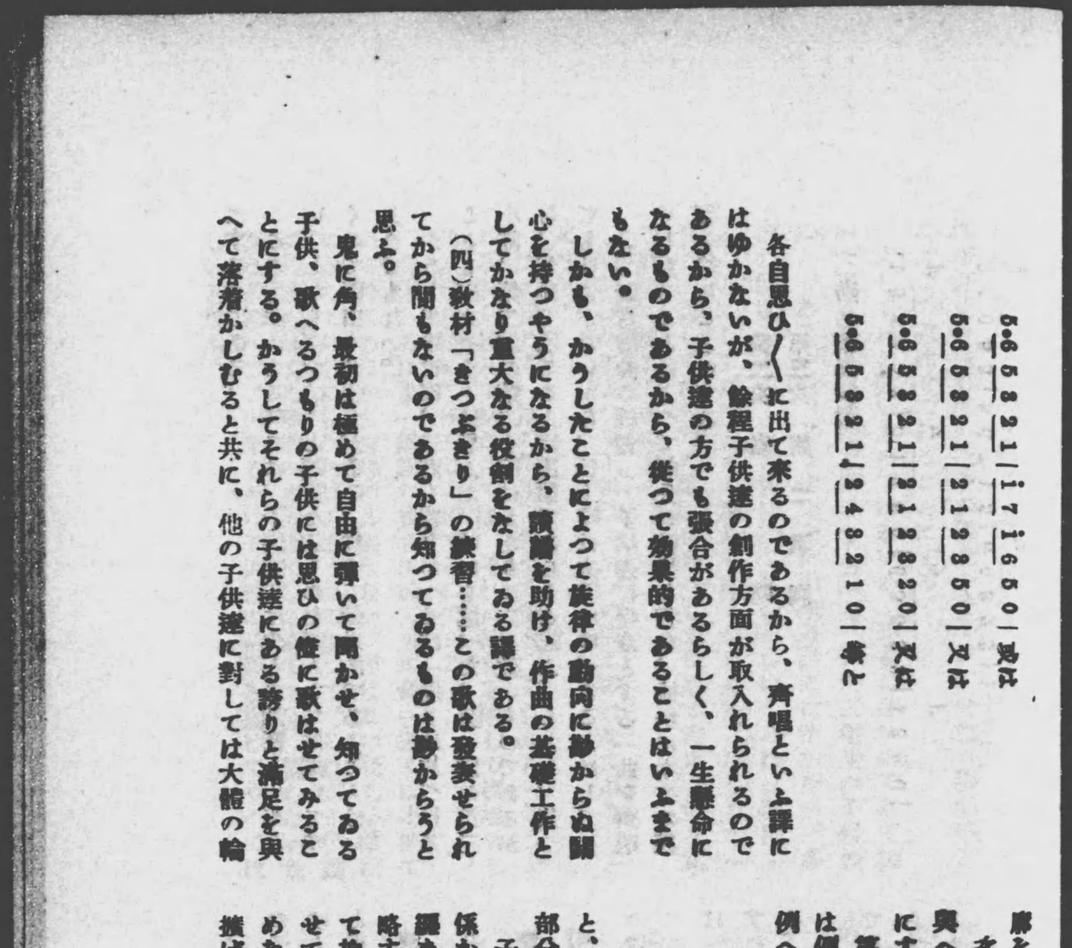
(一)既習歌曲の練習……「那須與一」を斉唱せしむることによつて學習動機をたかめると共に複習を兼ねて本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名調譜練習



(三)旋律誘導練習……これは例によつて旋律の一部分を與へ、これにつゞくべきものはたゞ拍子の變化のみを示し其の拍子に乘せては兒童各自思ひの儘の旋律によつて進めてゆくところの練習である。例へば、





各自思ひ〳〵に出て來るのであるから、斉唱といふ譯にはゆかないが、餘程子供達の創作方面が取入れられるのであるから、子供達の方でも張合があるらしく、一生懸命になるものであるから、從つて効果的であることはいふまでもない。

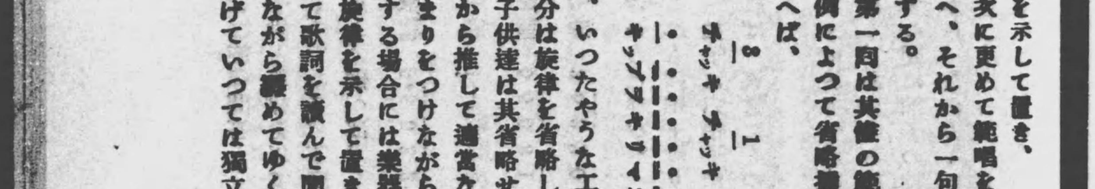
しかも、かうしたことによつて旋律の動向に飽からぬ關心を持つやうになるから、讀譜を助け、作曲の基礎工作としてかなり重大なる役割をなしてゐる譯である。

(四)教材「きつふきり」の練習……この歌は發表せられてから間もないのであるから知つてゐるものは尠からうと思ふ。

鬼に角、最初は極めて自由に彈いて鳴かせ、知つてゐる子供、歌へるつもりの子供には思ひの儘に歌はせてみることにする。かうしてそれらの子供達にある誇りと滿足を與へて落着かしむると共に、他の子供達に對しては大體の輪廓を示して置き、

次に更めて範唱を示して正確なる姿を示すと共に反省を與へ、それから一句〳〵從唱せしめながら進めてゆくことにする。

第一回は其儘の範唱によつて導いてゆき、第二回目からは例によつて省略挿入法によつて進めてゆくことにする。例へば、



と、いつたやうな工合に、あるところは歌詞を省き、ある部分は旋律を省略しながら進めてゆくのである。

子供達は其省略せられた部分に、記憶を辿り、前後の關係から推して適當なる歌詞又は旋律を當嵌め、挿入しては謡ひをつけながら進めてゆくのである。即ち、歌詞を省略する場合には樂器又は鼻音唱法乃至は階名唱法等によつて旋律を示して置き、旋律を省く場合には拍子の變化に乘せて歌詞を讀んで聞かせ、これに旋律を附しては復唱せしめながら謡めてゆくのである。かうして漸次省略の部分を擴げていつては獨立して唱歌し得るやうに導いてゆくこと

にするのである。

この方法による時には、子供達には少しの油斷も出來ない。しかもグン〳〵と適當なるものを挿入しては捌いてゆくので面白く又張合がある。從つて効果的であることはいふまでもない。

かうしてゆけば、三回も繰りかへせば一通りは片づけることも出來やうとは思ふが、前にも述べた、第一段の第三小節、第二段の第二小節はかなりに六ケ敷いものであるから、無難で通ることは困難であらうと思ふ。しかし、焦つても仕方がないから、仕上げは次回にゆづることにして

(五)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を齊唱せしむることによつて氣分の轉換を行ひ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次　省　　略

第三次　第　二　歌　詞

(一)階名翻譯練習

1 3 2 3 5 5 3 | 5 i 7 6 5 | 6 5 6 3 3 | 1 3 2 0 |
F　　ソ　　ラ　　F
3 5 6 5 3 | 5 6 7 i 5 | 6 5 3 2 3 | 1 — 0 |
ミ　　ソ　　ラ

(二)旋律問答……これはある一名の兒童を指名して、その子供と旋律を以て問答しながら曲として纏まりをつけてゆくのである。丁度昔の達歌といつたやうなものであらうと思ふ。例へば、

教師　5.6 5 3 2 1 | を以て問題を投げるとする。

子供　i — 6 0 | を以て受けて來る、教師は

教師　5 6 5 3 1 2 | と答へて出る、子供はそれを

子供　3 5 3 2 0 | といつたやうな工合で進めてゆくやうなものである。

これも四拍子計りでは面白くない。或時は二拍子に、又は三拍子に六拍子に、いろ〳〵の拍子で奏いてゆくやうにすれば、適當にその拍子で應へて來るから可愛いものである。

こゝに於て子供達の旋律は愈々創作的になつて來る計りでなく、あらゆる拍子を經驗することによつて、知らず識らずの間に拍子の持つ特徴に關心を持つことになるのであるから、なか〳〵に馬鹿には出來ないものである。

(三)教材「きつよきり」の練習……一二回面白く齊唱させることにする。もう大抵は大丈夫であらうとは思ふが、

なほ不滿足な點があれば指導を加へ、間違つてゐる點があれば訂正を施して一通りの纏まりをつけ、今度は階名唱法によつて歌はせてみることにする。

大して六ケ敷いものではないが、相當に遠いので旨く捌いて來ることは困難であらうと思ふ。まだ二年生の子供のことであるから、どうせ完全に出來る譯にはゆかない。多少の間違があつても大體に於て見當がついてゐれば辛抱することにしてグン〳〵と進めてゆくのである。かうして一巡り引廻してから元の歌詞にかへして改めて置き、愈々第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて子供達の思ひの儘に歌はせてみることにする。

次に更めて一回の範唱を與へて置き、それから一句づゝの歌詞を讀んで聞かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら進めてゆくことにするのである。

旋律の方は第一歌詞の場合に於て兎に角一通りは出來てゐる譯であるから指導の必要はない。要はこの新しい歌詞に對して如何に旋律付けてゆくかであつて、これが子供達に投げられてゐる唯一の問題になる譯である。要らない世話は差控へて、出來るだけ子供達の活動を援けてやつてはしいと思ふ。

變つてゐるのは第二段と第三段の前半二小節、要するに半分は第一歌詞を繰りかへす譯であるから、二三回も繰りかへせば、一通りは纏めることが出來やうと思ふ。

なほ分唱によつて仕上げをなして充分に纏まりをつけ、愈々第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

大抵は旨くゆかないものである。繰りかへす共通の部分が多いだけ厄介なもので、兩歌詞が混亂錯綜して、どうも無事にゆかない場合が多いやうである。

二三回繰りかへしてみても、旨く捌けないやうであればあつさりと切り上げて、

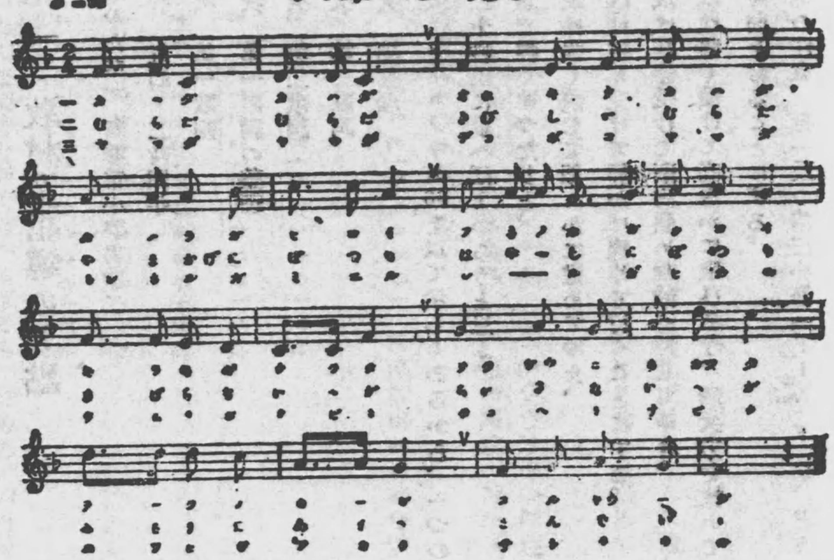
(四)既習歌曲の練習……「雪兎」を可愛らしく齊唱せしむることによつて氣分を直し、朗らかに本次の練習を終ることにする。

第四次　練　　整　　理

(一)既習歌曲の練習……「那須與一」を高らかに齊唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の練習に進入する準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 3 5 i | 7 — 6 5 | 5 6 5 3 1 3 | 2 — 0 |
F　　ソ



この問題はこれで三回目である。歴時に変化は施されてゐるが、音程としては同一のものが繰りかへされてゐるのであるから、二小節づゝに纏めるやうにしてほしいと思ふ。しかし旨くゆかなければ一小節づゝに纏めて置いて、二小節づゝに進めるやうに取扱つてほしいと思ふ。

(三)旋律誘導及旋律問答

(四)教材「きつよきり」の練習……面白さうにグン〳〵と弾いてゆく……子供達は得意になつて従いて来るであらうと思ふ。旨くゆけば宜敷いが、前例様、大抵は混亂して旨く纏まらないものである。

そこで、今度は更めて第一歌詞及第二歌詞を纏めて置きそれから、例によつて子供達に第一歌詞及第二歌詞の二組に分け、これを向ひ合つて對立せしめ、相手方の口形の運動に注目せしめながら、同時に併唱せしむることにする。

不安定な子供は、確實味の多い自信のある子供の口形に引摺り込まれて、何をどう歌つてゐるのかさへ分らなくなるまでに、混亂に叩き落されるものである。子供達は自分を護り相手を陷れることに一生懸命に努力するわけであるから、ヤイ〳〵と面白く騒いでゐる間にすつかり出来上るのである。

しかし、餘りに夢中になるために、どうかすると暴聲に陥り易い傾向がある、私はこれを弱者の悲鳴と稱してオミットすることにしてゐるので、子供達は聲の調節を旨くとりながら奮闘するのであるから、かなりに骨が折れる譯である。從つて効果的であることはいふまでもない。

一通り出來上つた頃合をみて一同起立、朗らかに歌ひあげて本教材を結ぶことにする。

第二「うぐひす」の教授

教材及指導の要點

「うぐひす」　小學新唱歌二、三木楽器店

(一)區分　三同　一時間半

(二)速度　メトロノーム108を以て示してあるから一つの歌を二十五秒乃至三十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　可愛らしく、

第一段は靜かに曲を起して、ゆつたりと運んでゆき、

第二段は前半二小節は朗らかに歌ひあげ、後半二小節は極めて弱聲に取扱ひ、

第三段は輕く弱聲に起して漸次強めにもつてゆき、

第四段は強く高らかに歌ひあげ、後半は弱聲に取扱つてゆつたりと全曲を終ることにする。

(四)タクトは、第一拍を受ける强聲の受方に始め、最後は「元止め」にして靜かに「流す」

汽車のたび

一　河だ、河だ、大きな河だ。
　かはらがひろい。船のほが白い。
　汽てきが鳴つた。てつけうにかかつた。
　　かみなりさまが　なるやうだ。

二　村だ、村だ、さびしい村だ。
　山かげにぽつり。林にぽつり。
　まばらな家が、小さな家が、
　　見るまにあとへ　とんでいく。

三　山だ、山だ、でこぼこ山だ。
　トンネルが見える。レールがひかる。
　けむりがなびく、谷へとなびく。
　　夕日が赤く　さしてゐる。

一　教材及指導の要點

「汽車のたび」　新尋常小學唱歌二

(一)區分　五回　二時間半

第一次　第一歌詞

第二次　第一歌詞の整理

第三次　第二歌詞

第四次　第三歌詞

第五次　總整理

(二)速度　メトロノーム96を以て示してあるから、一つの歌を二十秒位に歌へばよからうと思ふ。

(三)發想　輕くゆつたりと、

第一段は强く起して朗らかに進めてゆき、

第二段は輕く受けて靜かに進めて行くことにする。

第三段は其儘受けて漸次强め加減に押してゆき、

第四段は强く受けて高らかに歌ひあげ、漸次力を拔いて輕く全曲を終ることにする。

(四)其他の注意　第一段の第三小節「ドーシッド」が、どうかすると「ドードッド」になつて「シッ」の音が明瞭を缺く傾向があるから、前以て心得て置いてほしいと思ふ。

又、第三段後半二小節「レーミッレ、ミラソ」が「レーミッド、レラソ」にならうとする傾がある。

それから、第四段第二小節「ミッミレ」が大抵は「ファッミレ」になるものであるからこれらの點も前以て知つて置く必要があらうと思ふ。

(五)タクトは、第一拍による强聲の受方に始め、最後は三拍の「や止め」にして輕く「切拾て」

　　捕著「私の唱歌教授」參照

二　指導の實際

第一次　第一歌詞

(一)既習歌曲の練習……「きつふきり」を齊唱せしむることによりて學習動機をたかめ、本次の練習に這入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 3 5 8 | 2 4 3 2 | 3 5 6 5 | i 7 6 5 |
ド　　レ　　ミ　　ド

6 5 3 1 | 2 3 5 6 | 5 3 2 4 | 3 2 1 0 |
ラ　　レ　　ソ　　ミ

(三)旋律誘導練習……例によつて旋律の一部分を示し、之に續くものは其の拍子即ち、歴時の變化だけを示して置き、子供達各自の思ひの儘の旋律を當欲めさせては進めてゆくのである。例へば、

尋常　3 3 2 1 2 3 | ・ ・ ・ ・ | ・ ・ ・ 0 |　とうつたそうが四
　　ミミレドレミ　ミミミミ　ミミミミ　ミミ　　四を歌唱したとす

る。子供達はそれを受けて

3 3 2 1 2 3 | 5 5 . 6 5 0 |　に受けるものもあれ

ば

3 3 2 1 2 3 | 5 6 i 5 0 |　又は

3 3 2 1 2 3 | 5 4 3 2 0 |　又は

3 3 2 1 2 3 | 6 5 4 3 0 |　又は

3 3 2 1 2 3 | 2 1 2 3 0 |　又は

3 3 2 1 2 3 | 5 3 2 1 0 |　等と

隨分いろんな旋律を以て迎へて來るものである。申合せて出て來るのではないから、齊唱といふ譯には行かない同一の拍子に乘つて進行して行くのは、又變つた味があるものでかなりに面白いものである。

しかし、有力な子供に引摺られる場合も尠くはない。かうした時には同じ旋律で受けて來るのであるから、同一問題を何回も〳〵突つかけることにしてゐるのである。同一旋律は一回に限り使用することになつてゐるので、どうしても一回一回變つた旋律を以て受けて來ることになる……其の中には迎へやうにも種切れになつてどうにも出來なくなつて來る。其の頃合を見計つて新しい問題を投げることにするのである。

かうして子供達の旋律に誘ひをかけてゐる間に、何時となく旋律の動向が歸納せられてゆき、子供達の創造性は愈々活動を始め、從つて音樂の理解も愈々深められて行く譯である。

(四)教材「汽車のたび」の練習……この歌は發表せられてからかなりの年月を經てゐるので知つてゐる子供も多少はあらうと思ふ。最初は、さうした者のために思ひの儘に

歌はせてみることにする。

次に更めて一回の範唱を示し、それから、一句づゝ従唱せしめながら進めて行く事にする。第一回は其の儘の範唱に依つて導いて行き、第二回からは例によつて省略法により、適當に挿入させながら謂めて行くやうにするのである

例へば、

1.1 5 | 6.6 5 | 1 7.1 | 2 3 2 |
ゆうぐれ ゆうぐれ

・・・・・ | ・・・・ | 5 3 3 1.2 | 3 3 2 |
ゆうぐれ ピヨイ ツキノヤマ

のやうな工合に、旋律又は歌詞を隨意隨所で省略し、適當なるものを、適當に挿入させながら進めてゆくのである。

歌詞を省略した場合には、楽器又は鼻音唱法によつて旋律だけを聽かせることにするのであるが、旋律を省略する場合は、歌詞をリズムに乘せて曲節なしで讀んで聽かせることにするのである。

かうすれば子供達には油斷が出來ない。記憶を辿り、前後の關係から推して適當なものを當嵌めて行くのであるから張合があつて面白い。從つて倦怠がないから効果的であることはいふまでもない。

かうして、漸次省略の部分を擴げて行つて獨立して歌へるやうに指導を進んで行くのである。大抵三回か四回も繰りかへせば一通りは片づけることが出來やうと思ふ。

しかし、前にも述べた通りに三ケ所の難點はズラ〳〵と進めて行くことはかなりに六ケ敷い……しかし、今仕上げねばならぬ譯でもないから、時くならない程度に切上げて

(五)既習歌曲の練習……「うぐひす」を可愛らしく斉唱せしむることに依つて氣分の轉換を行ひ、愉快に本次の練習を終ることにする。

第二次 省　略

第三次 第二歌詞

(一)既習歌曲の練習……子供達の得意とする一曲を斉唱せしむることによつて唱歌氣分をあふり、本次の學習に進入る準備とする。

(二)階名翻譯練習

1 2 3 5 3 | 2 4 3 2 1 | 3 5 6 5 5 | 1̇ 7 6 5 0 |
ず　　ず　　ず　　ず

6 5 6 5 3 1 | 2 3 5 0 5 | 6 5 3 2 4 | 3 2 1 0 ‖
ず　　ず　　ず　　ず

(三)旋律問答……これはある子供を指し、それに旋律を以て呼びかけるものである。呼びかけられた子供は、それに適當したところの旋律を以て應へて來る。教師はそれに對して再び突いて出る。かうして受けつ應へつダン〳〵と進めて行く間に一つの曲として謂まりをつけるものである

例へば

先生　3 3 2 1 2 3 | 6 6 5 0 | と両面を投げる

子供　6 5 3 5 1̇ 6 | 5 3 2 0 | に受けたとする

先生　6—5 3 | 1̇—7 6 | と強いて行けば

子供　5 6 5 3 1 2 | 3 2 1 0 | に受けて來る。更に

先生　3 6 5 0 | と強かく出せば

子供　1̇ 6 5 0 | と受けて來るやうなもので

問題を入れずに進めてゆくところはかなりに面白いものである。しかし、これは旋律誘導のやうな工合に、全體で以て押して行く譯には行かぬ。從つて大ケ敷くなつて來るが創造性は充分に發揮せられる譯であるから、より面白く又効果的であることはいふまでもないのである。

(四)教材「汽車のたび」の練習……面白く明やかに彈いてゆく……子供達は得意になつて從いて來る。もう大抵は大丈夫であらうと思ふ。

今度は適當の頃合を見計つて階名唱法に導入することにする。……恐らく完全に捌いて行くことは困難であらうと思ふが、大體の見當がついてゐれば滿足することにしてダン〳〵と進めて行くことにする。マゴ〳〵しながらも、何とか見當をつけて來るから全く可愛いものである。

かうして行けば、漸次誤りが少くなつて行く計りでなく旋律に階名を當嵌めてみることが習慣付けられて來ることになるのであるから、詰り子供達の環境にある總ての旋律が、彼等の練習教材として提供せられたやうなもので、かなりに重大なる影響をもたらすことになる譯であるから、

馬鹿に出來ないものである。

かうした工合にして一耳り引題して置いてから、元の歌詞にかへして收めて置き、いよ〳〵第二歌詞に移ることにする。

最初は例によつて子供達の思ひの儘に歌はせてみることにする。次に更めて一同の範唱を示し、それから一句づゝの歌詞を讀んで聞かせては、それに旋律を附して復唱せしめながら纏めて行くことにする。

第一歌詞と第二歌詞とは、文字の數が同一ではないために、かなりに子供達をマゴつかせるやうである。例へば、第一段の第三小節の「オホキナ」が「さびしい」となり第二段の第一小節「カハラガ」が「やまかげに」になり又、第三小節の「フネノホガ」が「はやしに」

と、いつたやうな工合に、いろ〳〵になつてゐるので、かなりに困るやうなこともあらうとは思ふが、出來るならば子供達の力によつて解決し得るやうに指導してほしいと思ふ。旋律は出來てゐるのであるから、この新しい歌詞を如何に旋律付するかが、子供達に殘されてゐる問題であるから、せめてこれだけでは、子供達にやらせたいものだと思ふのである。しかし、何回か繰りかへしてゐれば、その内には何とか纏まりをつけて來るから面白いものである。

さらに分唱によつて仕上げをなし、一通り出來上つた頃合をみて、今度は第一歌詞からつゞけて歌はせてみることにする。

第一歌詞、第二歌詞と別々に歌はせてみると無難にいつたものも、かうしてつゞけてやつてみると、この兩歌詞が混亂してなか〳〵に旨く行かないものである。

さうした時には例に依つて第一歌詞の組、第二歌詞の二組に分け、しかも、兩者を向ひ合つて對峙せしめ、しかして相手方の口形の動きに注目せしめながら同時に併唱せしむるのである。

かうしてゐる中に、何とか纏まりはついて來るものである。適當な頃合を見て一同起立、今度は仲よく齊唱せしめて、愉快に本次の練習を終ることにする。

第四次、第五次　省略

附錄